気弱な僕の強気な生活（仮）

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気弱な僕の強気な生活（仮）

【Ｎコード】
Ｎ４１８１Ｅ

【作者名】
和藤渚

【あらすじ】
気弱でやさしい（？）龍二君の周りに起こるできごとの話

第1話　龍二のくせに

「僕と付き合ってください」
と告白する男の子。
「ごめんなさい」
という決まり文句で撃沈される。
これで高校通算五十人目。あいつにフラれたやつは。
あいつっていうのは本郷茜、この学校のアイドルのことだ。
とてもかわいく、スタイルもよく、勉強もできて、スポーツもなんでもできる。
まさに容姿端麗、才色兼備だ。
「また振られちゃったよ」
と写真を撮る倉本を見上げる。
パシャッパシャ！
「それにしても本郷茜（ほんごうあかね）ほんとかわいいよ。清楚で可憐でまさに清純派アイドルだな」
と目をキラキラさせてまるで宝石を見ているかのような目で僕に語ってくる。
「なんも知らないからそんなこといえるんだよ」
僕は一つため息をついた。
「なにか？　おまえ本郷茜についてなにか知ってるわけ？」
と問い詰められる。
「いやそうじゃないけど……」
と口ごもる。
「これで取材は終わった『本郷茜通算五十人到達』ってな」
と物陰で話していると
「また龍二ね？　何度言えばわかるのかな？告白はみせものじゃないって。どうせまた記事にする気だったんでしょ？」
指をバキバキ鳴らしてこっちに向かってきた

「これは違うんだ倉本君にむりやり連れてこられただけで……なぁお前からもなんか言ってよ倉本くん？」
ととなりを見ると倉本のすがたはなかった。
僕は完全にはめられた。
「わかってるわよね？　龍二（りゅうじ）君どうなるか」
満面の笑みを浮かべる。
「ぎゃ～！！！」
と体育館裏に虚しい悲鳴が響いたのであった。

それは三十分前だった部活にいこうとして
「おい！猛があの本郷茜にコクるらしいぜ。みにいかねーか？」
猛とは西田猛（にしだたける）。僕の友人の1人だ。
「パスしとくよ」
と断った。
「ちょっと待て！！　お前それでも友達か！！　男の一世一代を見届けなくてもいいのか？」
「別に興味ないよ。まずフラれるのがオチだよ。それにあか・・じゃなくて本郷さんが誰と付き合おうと僕には関係ないよ。じゃ僕部活いくから」
ときっぱり断った……のだが
「そんなこといわずに来いよ。ほら」
と倉本に手を引っ張られて連れて行かれたのだ。

「イタタタタタ……」

と僕は目を覚まして起き上がった。
「気がついたみたいね」
「ここは？」
と質問すると、
「保健室よ」
と先生が答えた。
「また茜ちゃんにやられたのね？」
確認を取る先生。
「はい……たくっ茜のやつここまでやるか？　普通」
僕は呆れた。
「なによ。龍二が告白されたとこ何度も見るからいけないんでしょ？　そんなに私を記事にしたいの？」
と睨みつける。そんな彼女に
「何調子乗ってんだよ。猫かぶりやがって。学校ではしとやかで落ち着いて見せて、本当はがさつですぐに手が出るわがままな暴力女のくせに。なのに……なんでみんなコロッといくかな？」
つい本音がでてしまった。
「だれが猫かぶってるって？、だれがしとかでおちついてみせてるって？だれが暴力女って」
と茜は拳を突き出した。
「すいません！！　すいません！！　もう言いませんから」
とひたすら必死に謝罪。
「龍二のくせに私の悪口なんて１００年わ」
と頭をグリグリされる。
「ぎゃ～」
と僕が悲鳴をあげる。
その光景を見て何を思ったのか
「ほんと二人とも仲いいのね」
と先生が微笑む。
「だれがこいつなんかと」

僕たちはお互い指をさして反論する。
「まぁ～息もぴったりマナカナみたい」
とからかう先生であった。

僕の名前は谷口龍二（たにぐちりゅうじ）　高校2年生。学校のアイドル本郷茜とは幼なじみである
茜にはなにかにつけていじめられる。

「今日一緒帰ろっか？　久しぶりに」
と茜が言い出した。
「ごめん、今日部活遅くなるから先に帰ってていいよ」
と言うと
「なら待っとく」
と言い出した。
「いいって別に。それに一緒に暮らしてんだから家で会えるだろ」
ときをつかったのだが
「へぇ～学校のアイドルの誘いをことわるんだ？　龍二のくせに」
となぜかヘッドロックをかけられた。こうなれば断ることなどできないので
「はい一緒に帰りますっ帰らさせていただきます」
敬語になる。
「なら校門のところで待ってるから」
と茜は走って去っていった。

2時間後
「これから新しいラーメン屋いかねぇ～？」
と部活の友人の天野に誘われた。
「ごめん今日はパス」
と断ると
「珍しいなお前が断るなんて」
「人待たせてんだよね」
と言うと怪しいという目で見てきた。
「これか？　これ」
と天野が小指を立てた。
「そんなわけないだろ？　それにそんな表現今どきしないよ」
と否定する。その言葉に便乗し
「そうだ天野。こいつみたいなもやしっ子でダメ男が彼女なんか。どうせ家族か誰かだろ？」
と藤江が言うと
そうだなと天野はあっさり納得した。
そして僕は急いで校門に向かった。

ちょうどその頃
「本郷じゃねぇ～か。これからあそばねぇ～？」
と誘う1人の男子生徒
「いや待ってる人がいるんで」
「なぁいいだろ？　遊ぼうよ。待ってる人なんてほっといてよ」
と不良の山本が強引に誘って連れて行こうとしていた。
僕には何を言ってるのかわからなかったがあかねがヤバイっていうのはわかった。

しかし僕の足は言うことを聞かなかった。
（動け！　これじゃいつもとかわらないじゃないか）

そう僕はちいさい頃からいつもいじめられていた。
いつも公園で一人で遊んでいると
「じゃまだ！　どけ！」
とけとばされ、おもちゃやマンガを取あげられ持っていかれる。
そのたびに
「お前ら何やってんだ！」
と茜がやってきていじめっ子たちをボコボコにして助けてくれた。

（いつも茜に世話になってるんだここで恩返しするんだ）
と僕は
「うお～！！　本郷さんに手を出すな～！！！　オラオラオラ～！！」
と僕は殴りまくった。しかし全く効いてなかったらしく
「なんだおめぇ～俺に刃向かおうなんていい根性してんじゃねぇ～か龍二君よ？」
と不良が向かってきた。そして胸ぐらをつかまれ不良に
「この世は弱肉強食。強いものは弱いものからなんでも奪い取れるんだよ」
と不良が右腕をふりかざしたとき誰かの手が右腕を止めた。
「好き勝手言ってんじゃねぇ～ぞ。力を弱いものにしか使えない卑怯者どもが」
と茜がキレた。
そしていつものごとくあっという間にボコボコにした。

茜は手をはたいていこっかと言って僕たちは学校を後にした。
「ごめんね、また助けられちゃったね」
とまるでちょっとどじふんだように僕は言った。
いいのよというふうな優しい顔だった。
「たくっホント弱いんだから、あいつらの言う通りでしゃばんなってーの」
と呆れ顔で言われた。
「しかたないだろ？　無我夢中だったんだよ」
いいわけをする、
「でもありがと助けに来てくれて」
と茜が照れながら言うその姿はいままで見てきた茜より一番かわいかった。
「あ！　茜がありがとうっていった明日……雨だな。それも台風みたいな嵐」
と冗談半分でいってみつ
「それってどういう意味よ？」
と僕は胸ぐらをつかまれた。
「ぎゃ～！！！」
いつものようにやられた。

「今日はカレーよ」
と夕飯の話になった。
「かあさんのカレーおいしいもんな」

僕は茜と一緒に暮らしているもちろん二人きりってわけではない。
茜の親と一緒だ。茜の親は僕の親でもある。

僕は幼い頃両親を亡くし、身寄りもなく施設に入れられたのだが、
すぐに茜の両親が引き取ってくれたのだ。
齢は同じだが誕生日が茜のほうが早い。そのためか茜が立場が上だ。
僕の性格もあるのだろうが……

そして次の日……
「きょう全国的に大荒れでしょう。特に……」
という朝のテレビ
「電車が動いてない？　やばいな今日大事な会議があるのに」
と父親がぼやいていた。
そしておれは茜の耳元で
「昨日、日ごろ言わないこというから」
と囁くと
「なんだって」
とみみをつままれ
「もう一回いってみぃ～」
と睨まれる。
「いえなんでもないです」

第1話　龍二のくせに（後書き）

この作品のいずれタイトルを変更しようと思います。（仮）なのもそのためです。なのでみなさんからタイトル募集しますね？　この作品を読んでこの作品の世界観にあったタイトルを待っててます

まだ1話目だからよくわからないかな・・・？

第2話　なにがあっても私がついてるからね（前書き）

いきなり番外編ぽいですが……
あと1話目と2話目の龍二君の性格が変わってると思いますが気にしないでください（笑）

第2話　なにがあっても私がついてるからね

ケンカした翌日本当に大雨になった
「きょう全国的に大荒れでしょう。とくに……」
という朝のテレビ。
「電車が動いてない？　やばいな今日大事な会議があるのに」
と父親がぼやいていて家を出た。
そしておれは茜の耳元で
「昨日お前が日ごろ言わないこというから」
と囁くと
「なんだって」
とみみをつままれ
「もう一回いってみぃ～」
と睨まれる。
「いえなんでもないです」

プルルルプルルル
と電話が鳴った。
茜がでる。
「はい、はい。わかりました」
と電話の声がだんだん弾んできた。
（どうしたんだろう？）
と思った。
「はい、はい失礼します」
と電話は終わったようだ。

「龍二？　やったわよ今日学校休みだって」
（うそ……マジで……）
僕は素直に喜べ無かった。
というのも……
「龍二？　肩もんで」
「はいはいはいはい……」
と肩をもまされ
「龍二？　お菓子持ってきて」
「はいはいただいま」
と僕はこき使われるからだ。
「はぁ～なんで僕がこんなことしないといけないわけ？」
と小声でぼやく。
「なんかいった？」
とにらみつけられた
「いえ……なにも」
と慌てて否定した。
「うん、はい。わかりました。すぐ行くね」
と母親は電話を切った。
「茜？　龍二？」
と呼ぶ母親。
「なに」
「なに？　かあさん」
僕たちは母親に呼ばれ返事をする。
「ごめん、ちょっと私、会社いかないといけなくちゃった」
と告げられた。
「なんで？　こんな雨なのに」
と僕が問う。
「こんな雨だからよ」
とニッコリ笑い答えた。
「そっか、大変だね」

という茜。
「かあさん、復帰初仕事か」
感慨深くなる僕。
「がんばってね」
と茜は激励の言葉を送る。
「それじゃいってくる」
母親は家を後にした。
「いってらっしゃい」
と2人で見送る。

茜の母親、いやかあさんは昔は大人気の女子アナだった。全盛期の時はレギュラー番組十本以上持っていたという。主に夜のニュース番組の担当が多くその落ち着いて、どこかさめたように読む姿に人気を博したという。しかしバラエティー番組では対照的に天真爛漫で好き勝手な言動をすることから若手芸人泣かせとも言われたそうだ中学時代から付き合っていたとうさんと結婚して茜が生まれたことからは表舞台からは去っていたが、僕たちが高校生になったのを機にフリーアナウンサーとして、また表舞台で生きようと決心しだ。今日がその第一歩目である。

「初めてかあさんをテレビでリアルタイムで見れるね」
と明るくなる僕。
「今日のニュース絶対に見とかないと、あとがウザくなる」
ダルそうな声。
「たしかに……」
僕も共感した。

僕達は小さい頃、よくイヤと言うほどかあさんの番組を見せられた。
私は昔はすごかったんだからと言わんばかりに……

「ていうことでお昼は適当になんか食べるから夜お願い」
と勝手なこと言って部屋に戻る。
「また、インスタント？　料理ぐらいは自分でやんないと後々こま」
「うるさいわね、つべこべ言わずにあんたがつくる！！！」
僕の注意にギロッと目を尖らして問答無用に反論させない目でプレッシャーをかけてきた
「はいぃ～」
有無を言わせず従った。
「フラれタ５０人の人たち、これでよかったかも……」
小声で口走ってしまった。
「なんかいった？」
とほほをつねられた。
「いえなにも」
（こいつと結婚した人は、一生棒に振るんだろうな～……って何考えてんだろう……）

そして夜
と僕は台所にいって夜ご飯を作り始めた。
「ねぇ～？　なにがいい？」
と茜の部屋の前でリクエストを聞く。
「うん。適当にいいよ」

と返ってきた。なので冷蔵庫にあるも残り物作ることにした。

数十分後
「よし、できた」
料理は完成。
「できたよ～」
と僕は茜を呼んだ。すると来るなり
「おそ～い」
ととび蹴りを食らった。
「イテテテテ……何？」
「遅すぎる、私もお腹減って堪んなかったんだから。もっと早く作りなさいよ」
とむちゃな要求をされる。
「こればっかりは……」
苦笑いを浮かべる僕。そんな僕を
「うるさいわね」
という言葉でバッサリと切り捨てる。
「食べよっか」
と僕が促す。そして茜が口を開く。
「久しぶりだね2人で食べるのって」
「そうだっけ」
茜から提供された話題に首を傾げる僕。
「うん、小学校の低学年とき以来」
と茜は続ける

「そうだっけ？」
しかし記憶にない僕はまたもや首をかしげる。
「ほら？　その時お母さんよくおじいちゃんを見にいってたじゃない」
と痺れを切らし答えをいうあかね。
「あ～あのときか」
そう言われてぼんやりと思いだした。
「その頃龍二……」
茜は語り始めた

「お母さん帰るの明日だから茜？　龍二？　ちゃんとお留守番しとくのよ？」
「うん」
とうなずく茜。
「いっちゃいやだよ。お母さん」
といまにも泣きだしそうな顔してしがみつく僕。
そしてそのたびに
「コラ！　龍二ワガママ言わないの」
と茜が突き放し家を出るかあさん。

「それでいつもお母さんが出ると泣く」
「いつの話だよ」
と昔の話に僕ははんのうしてしまう

「あ～ん、あ～ん」
わんわん泣く僕に
「ホラ泣かないの！　男の子でしょ？」
と頭をたたく茜。それでさらになく
このときから僕と茜の関係はできていたのかもしれない
そして僕は茜を見上げて
「お母さん、ちゃんと帰ってくる？」
と涙目できく。茜は一つため息をついてあきれたようにこう言った
「なに言ってんのよ。ちゃんと帰ってくるに決まってるでしょ？」
「でも……でも……」
と僕はまた泣く。
（そっか、龍二……）
と茜は小さいながら悟ったようだ。
茜は僕を抱きしめた。
「なにがあっても私がついてるからね」
と囁いた。

それで落ち着いたところで
「よし、ゲームしよう」
「うん」
と笑顔で弾んだように返事した僕に茜はホッとしたような笑みを浮かべる。
「なんにする？」
僕が聞く。
「えっと金電は？」
と提案する。
「え～？　茜ちゃん強すぎるもん。でも茜ちゃんが言うなら
いいよ？　やっても」

と微笑む僕。
「やろう、やろう」

「て具合によく金電したよね」
思い出を語る茜。
「確かにしたけど……なんでそんな話をするの？」
そこで純粋な疑問をぶつけた僕
「いいジャン別に」

「やったーまた勝った」
今にも泣きそうな顔する僕。
「わかった、わかった」
と言ってまた始める。そして
「やったー、今度は僕が勝った」
と喜ぶ僕。

（たく、同い年なのに、どっちが年上なんだか）
と頭を抱える茜であった

「……だったのよね？」
「うん」
とあいずちをうつ僕。

「ねぇ聞いてる？」
「聞いてるよ」
と慌てて答えた。
「それで夜は夜で……」

「お母さんいつ帰ってくるの？」
と質問する。
「あしたっていったじゃない」
と答えると僕は玄関にいきドアをあけて
「おか～さん、早く帰ってきて」
と泣きながら叫ぶ僕。
そして茜がやってきて部屋に連れて行って必死に慰める。

「でさ？　泣き疲れると私の膝で寝てたよね」
懐かしむように茜はそう言った。
「だからいつの話してんだよ？」
「いいでしょ？　２人しかいないんから」
とツッコム僕にそう答えた。
そして夕食を食べ終え、それぞれの部屋に戻った。

「ホント久しぶりに家事したからパンパンだよ」
それから僕は勉強を始めた。
「う～ん、ココ分かんないな。よし教えてもらおう」
茜の部屋に行き
「ちょっと英語おしえてくんない？」
テーブルで勉強する茜。隣に座る僕。
「珍しいね。龍二が教えてって。それに久しぶりじゃない？私の部屋に入るなんて」
「そうだね」
（へ～変わってないじゃん。いつもあんなことしてるけど。やっぱ女の子なんだな。茜は……）
と僕は部屋に見とれていると
「でどこ教えればいいの？」
と言われ僕は茜の隣に座った。
「ここなんだけど」
「ここはねこうなるでしょ？　だから……」
と説明する茜
（やばい眠くなってきた……）
とだんだん意識が遠のいていく
バタッ
僕は茜の膝で眠ってしまった。
「ちょっと？　龍二？」
と茜は呼びかける。
気持ちよさそうな寝息をきいてあきらめたのか
「たくっ龍二ったら大きくなっても変わんないんだから」
と頭をなでた。

翌朝
「ねぇ～昨日の見てくれた？」
と問いかける母親
「あ！」
と僕たちは思い出したように声を発した。
すると……
「……です、とても風が……」
「ここ！！　ここ！！　大変だったんだから。後ね……」
と昨日の中継のＶＴＲを巻き戻して何度も見せられた。そのせいで
「やばい遅刻！！」
と慌てる茜。
「急いで、茜」
「わかってるっつうの」
と慌しく家を出るのだった。

第2話　なにがあっても私がついてるからね（後書き）

龍二君が茜を助けたことを瞬く間に広まっていくそんな中一人の女の子が近づいてきた

次回

そんなの、自分の胸に聞いてみなさいよ！！

何をしでかしたの？　　龍二君

第3話　そんなの、自分の胸に聞いてみなさいよ！！

雨の日の翌日
遅刻ギリギリで学校に着くと
「ねぇねぇ聞いた一昨日の事？」
「え～うそ？　あの谷口君がね～」
なにやら僕の噂が流れているようだった。
「なんだろう？」
「さぁ～」
2人で
「おい！！　見ろよ！！　今日は本郷茜と一緒だ」
と誰かが気づいて言った。すると周りに人が集まってきた。
「本郷さんを助けるためにケンカしたってホント？」
「何で今日は2人で登校してきたの？」
「そういやおとといも一緒に帰ってたよね」
「ねぇねぇ2人って付き合ってんの？」
「そんなことあるもんか！！　俺たちの茜ちゃんがこんなヤサ男と」
まるで記者会見のように質問攻めにあった。そして一方茜の熱烈なファンが否定した。
「な、なんなのこれ？」
焦る茜
「さぁ？」
お手上げ状態の僕。
「のん気に『さぁ？』って言ってる場合じゃないでしょ？　なんとかしないと」
茜はこの状況の打開策を考える。
「どうすんの？」
考える茜に聞いてみる。思いついたようだ
「もちろん……すいません、道を開けていただけないでしょうか？」

と茜は今にも泣き出しそうなで声で言った。すると男達は一斉に道を開けた。
僕はゾッとした
（あ〜あ……またやっちゃったよ……）
「行こう？　谷口君」
（谷口君って……寒気がする……やっぱ女は恐るべし！！）
と俺たちはなんとか人ごみから脱出した
「やっと抜け出したね？」
「う……うん」
「朝っぱらからさっそく猫かぶってるよ……しかも龍二君だよ？
龍二君。君付けなんてありえない！！　ゾッとしたよ……」
僕はぶつぶつと隣でつぶやいていた
「なんかいった？」
と耳を引っ張られるのであった。
「ほーあの本郷茜をな……おもしろい、谷口龍二。ちょっと調べてみる必要あるわね。よしいいネタがはいったぞ」
と誰かが言った。

教室に行くと真っ先に倉本がやってきて
「おまえすげ〜な？　あの本郷茜を助けたんだろ？」
「またその話かよ」
「当たり前だろ？　衝撃的だったんだから。学校一のアイドルを学校一の
ダメ男があの山本の魔の手からから救ったんだから」
「僕はただ、ち……」
（やばい！！　幼なじみと知られたらやっかいなことになる）
思わず口が滑りそうになった
「ただ？」

「ただ困ってる人を見過ごせなかっただけだよ」
苦し紛れの理由を
「それで急接近して一緒に帰ったり、一緒に登校したりっか。うらやましいな～俺がそこにいたらな～……」
あっさり納得しうらやましがる倉本であった。

「ねぇ茜？　龍二君に助けられたの？」
と茜の友人美和子が聞く。
「まぁね……まぁ最後は私がやったんだけどね」
「ハハハ！！！　相変わらずだね。虐げられてる龍二君もかわいそうよ。
好きだからいじめたくなるってやつ？」
「そっそそそそそ、そんなんじゃないわよ」
と茜はまるでユデダコのように顔を真っ赤にして必死に否定した。
（分かりやすいな～茜は）
「がんばりなさい。私みたいならないうちにね？」
（そう、私見たいにね……）
意味深なことを言って出て行った。
「うん……」

そして昼休み
「ハハハ、でさ……」

と倉本と昼食を食べていると
「あなたが谷口龍二ね？」
「うわ～～」
と驚く俺たち。
「なんでそこにいるですか？」
校舎の屋根に立っていた。
「あなたは？」
「明神伊織よ」
「しらねえ～の？　龍二この人」
「しらないよ」
「３年の明神伊織。生徒会長兼報道部部長。本郷茜に劣らない人気。いわばナンバー２。学校の裏の支配者って言われてて。報道部では人一倍いや十倍の行動力でスクープとってくるんだ」
「へ～。それでそんな人がなんの用なの？」
純粋な疑問
「本郷茜についてちょっとねっていうことで俊哉、この人借りてくね」
「ちょっと！！　伊織ねぇ～？」
「あ～……」
僕はなんのリアクションもとれないまま体育館裏に連れて行かれた。
（何をされるんだろう……）

「調べさせてもらったわ、あなたのこと」
「はい？」

突然の報告に思わず聞き返した。
「成績はいつも学年トップ……下から、運動神経はほとんどないし、ケンカも弱い、顔もそんなぱっとしないし……調べていくとますますわかんないんだよね。あんたが本郷茜を落とした理由」
伊織は調査結果がふに落ちない様子。
「本郷さんを僕が……？」
僕は驚いた。
「ないない！！　ありえないですよ。第一僕なんかに本郷さんがなびくと思います？　ただの幼なじみとしてしか見てないですよ」
全力で否定した。
「それもそうね……なら私の思い違いか？　でもあなたといる時と普段と違うのよね」
僕の発言に同意はするも納得いかないようだ。僕に絶対的な茜を惚れさせる何かを持っているのではないかと疑っている。そんなものあるはずないのに……
「気のせいですよ、気のせい」
伊織の疑いを１００％買いかぶりだと考え自信を持ってそう答えた。
「私にはそう見えないのよねまぁいいわ、調べれば分かることだから」
言われて僕は教室に戻った。それが悪夢の始まりであった。
「伊織ねぇ～なんて？」
「なんでもない……」
「伊織ねぇ～のあの目つきは気をつけたがいいぞ？」
僕は倉本に警告された。

それからは何事もなく、家に帰った。
部活でパンパンに疲れた体でベッドに飛び込んだ。
「疲れた……」
「そんなに練習きつかったの？」
と枕元から明らかに茜や母親と違う女の人の声が
恐る恐る見上げてみるとそこには伊織がいた。
（え？　なんでいるの？　てかどこから入ってきたの？）
「生徒会長！！！　なんでこんなとこにいるんですか？てかどこから入ってきたんですか？」
「なんでって取材するために決まってるじゃない」
不法侵入をしておきながらそれが当たり前のように言ってくる。
「取材って……？」
僕は苦笑い。
「昼間話したでしょ。あの本郷茜も惚れた！！　谷口龍二の秘密！！　こんなものかしら？」
と伊織が力説する。
「何言ってるんですか？」
突然の力説に質問する。
「見出しよ」
即答する伊織。
「だから茜が僕なんか惚れるわけないって言ってるでしょ？　何度言わせるんですか？」
僕は全力で否定する。
「はっきり言い切るわね？　ならあなたはどうなの？」
尋ねられると
「僕は……」
顔が熱くなる。
「と、とにかく迷惑です！！　早く帰ってください！！！」
僕は大声をだした。
「いいのかな？　そんなこと言ってネタは上がってのよ？」

そんな僕に伊織はなにかもったいぶった発言
「何のことですか？」
何の事だかわからないので聞いてみた
「しらばっくれてもムダよ？　あなたと本郷茜は一つ屋根の下なんでしょ？」
どきりとする一言
「何でそんなことを……」
僕は動揺する。
「この報道部の力を持ってすればどうってことないわ」
と誇らしげに言う伊織。
（報道部……恐るべし……）
純粋すごいと思った
「このこと一面トップにするわよ？」
脅迫をする伊織
「それは止めてください」
その脅迫に拒否する僕
「なら協力してくれる？」
「協力？」
「ええ。今日からお世話になります。よろしく」
この言葉の意味からすると僕の家にしばらく住むということ。そう判断した僕は
「ちょっと待ってくださいよ！！」
またもや拒否する。
「バラされてもいいの？」
再び脅す
「それは……」
僕は言葉を濁す
「なら決定ね」
弱みを握られた僕は強引に押し切られ取材許可状態になりかけた。
「伊織ねぇ～！！！」

横から大きな声が。声の方向に顔を向けると
「倉本君！！」
「俊哉じゃない？　どうしたの？」
倉本がいた。
「『どうしたの？』じゃないだろ！！　勝手に人の家に上がりこんで。不法侵入だよ？」
（倉本君もね……）
説教をする倉本に心の中で密かに突っ込んだ。
「だって密着取材なんだから」
「密着って言っても限度って言うものがあるだろ？」
密着についてケンカをする2人。
「そんなこと言ってたら立派なパティシエにはなれないわ！！」
「意味わかんねーよ！！」
「すいませんでした！！　先輩」
「龍二！！　そこのらなくていいから！！」
「わかればいいのよ？　さぁ～あの夕日に向かって競争よ！！」
「はい！　先輩」
わけのわからないコント（？）が終わったところで
「やらんでいい！！　とにかく連れて帰るよ」
倉本は本題に触れた。
「え～？」
イヤそうな伊織
「え～？じゃない！！　なにダダこねてんだよ！！　龍二も困ってるじゃないか！！」
「お姉チャンここにいたいの……ダメ？」
と伊織はどこかのチワワのような涙目で言ってきた。
「そんなことしてもダメ！！　行くよ？」
それでも動じず倉本は連れて帰ろうとする。
「そんな～まだ取材おわってないんだよ」
そんな彼に引き下がる伊織

「おばさんにいいつけるよ！！　いいの？」
その倉本の一言を放つと伊織は怯えるような顔になった。
「それは……」
口ごもる伊織
「なら一緒に帰る？」
子供を諭すように尋ねかける
「……うん」
素直な子供のようにうなずく
「いい子。いい子」
と伊織の頭をなでる。
「悪かったな？　龍二。後できつ～く言っとくからきつ～く。じゃあな」
ダダをこねる伊織は、倉本に連行されていった。
（どっちが年上なんだか……）
「ふ～やっと出て行った……」
騒動が終わり一息ついた。
それと同時にコンコンとノックの音がした。
「騒がしいからもうちょっと静かにしなさい」
茜の注意だった。
「ごめん。もういいから」

翌朝
「龍二？　朝よ。起きなさい。遅刻するわよ？」
と茜は僕の部屋のドアを開けた。
「ぎゃーーー！！！　龍二～！！！！！
起きなさい！！！！　龍二～！！！！」
（なんか騒がしいな……）

ぼやけた視界がはっきりしてくる。すると急激な痛みが襲ってきた
目の前には青筋を立てながら手のひらと甲を僕の顔に叩きつける茜がいた
「いきなりなにするんだよ！！！」
「ふん。そんなの、自分の胸に聞いてみなさいよ！！」
という一言と顔面パンチが返ってきた。そして茜は部屋のドアを壊れるんじゃないかと
思うほどの力でドアを叩きつけて出て行った。
ふと下に目を向けてみると
「ふにゃふにゃふにゃ……」
そこには……

「生徒会長！！！」

第3話　そんなの、自分の胸に聞いてみなさいよ！！（後書き）

なんと龍二のベッドの中にもぐりこんでいた伊織。
それが茜ばれて大嵐。
次回だから今日からよろしく
龍二君はちゃんと茜ちゃんと仲直りできるかな？

第４話　だから今日からよろしく（前書き）

だんだん作風が変わってる気がしますけど気にしないでください（笑）

第４話　だから今日からよろしく

「ふん。そんなの、自分の胸に聞いてみなさいよ！！」
という一言と顔面パンチが返ってきた。そして茜は部屋のドアを壊れるんじゃないかと
思うほどの力でドアを叩きつけて出て行った。
ふと下に目を向けてみると
「ふにゃふにゃふにゃ……」
そこには昨日追い出したはずの伊織が眠っていた。
どうやら誤解されたようだ。
「生徒会長！！！」
僕は生まれて初めて朝心臓が止まるんじゃないかと思う朝だった
「おはよう。伊織でいいわ」
目をこすりながらそう言われた
「『おはよう』じゃないですよ！！　どうやって入ってきたんですか？」
根本的なことから聞いてみる
「そんなの気にしない。それにこれは密着取材なんだから密着しないと意味無いでしょ？」
もっともらしい理由を述べる。
「意味違ってますよ！！」
理由のはき違いを指摘する僕
「そう？」
頭をかきながら答える。
「『そう？』じゃないですよ！！！　茜に誤解されたじゃないですか」
伊織に文句を言う僕
「誤解してどうこうというっていう関係じゃないでんでしょ？」
伊織は悪びれる様子もなく退屈そうに返す

「……」
僕は何も言えなかった。

朝食
もちろん茜はご機嫌斜め。いや直角と言っておこうか。
茶碗をおくのにも大きな音を立てる。朝からぴりぴりした緊張感。
誤解を解こうにも近づけない状態である。
「どうしたの？　茜」
「なんでもない。私もう行くから」
と刺々しい言葉を発して彼女は家を出た。
「龍二？　なんかやらかした？」
「な、なんで？」
「だってこの機嫌の悪さは龍二がやらかした時にしかならないもん」
（さすが母親）
と関心している場合ではない。
（朝起きたら伊織さんが僕のベッドで寝ていたとか言えないしな……）
とりあえず僕はその場から逃げるように学校へ行った。

「なによ！！　女を連れ込んで。まぁ龍二が誰と付き合おうと関係ないけど……」
茜がブツブツ愚痴を零していると
「おはよう」
と後ろから美和子が話しかけてきた。
「おはよう」
と返す茜。

「もしかして龍二君となにかあった？」
「別に。何も」
「でなにがあったの？」
「だから何もないっていってるでしょ！！！」
「あ～あむくれちゃって。かわいい顔が台無しだぞ？」
と美和子は茜にコチョコチョしてきた。
「アハハハ、やめてよ。美和子。ハハ。ちょっと？」
「ほら。吐けや～。吐くと楽になるで～？」
「アハ、なんでいきなり関西弁になってるの？アハハハ」
「ほれほれ」
「わかった。わかった。いうから。もう止めて」
茜は涙目になっていた。
「それで、どうしたの？」

「もう、止めてくださいよ。迷惑です！」
パシャパシャパシャ
「え～と。８時１０分。急いで登校っと」
と僕に着いてきて取材という名目で僕に付きまとっていた。
「お～今日は伊織さんと登校だ」
「早くも二股発覚？」
と校門でいろいろとひやかされた。
（違うんだけど・・・ていうかそう見えないだろ！！）
僕は茜に睨み付けられた。
「うわ～修羅場～」
と女子が言った
「行こう？　美和子」
と美和子の手を引き茜は去っていった。
（これが原因か）
と美和子は悟った
（は～……先は長そうだ……）

と肩を落としてしまった僕。

教室

「おはよう。どうしたんだ？　その傷」

「いや……なんでもない」

「それより昨日はゴメンな。伊織ねぇ～が」

「いいって別に」

「もしかしてまたなんかやられたのか？」

と倉本が心配そうに聞いてきた。

「いや。別に何も……」

今朝のことを言い出せなかった。

「そっか。良かった。彼女に火がつくと止められなくなるんだよ。なにかあれば俺に言ってくれよ。あの暴走女とめられるのは俺だけなんだから」

「わかった」

倉本の頼もしい一言で少し安心した。

授業開始の予鈴がなり授業が始まった。

つまらない授業なのでぼんやり窓の外を見ていると

（！）

なにやらトカゲのように動く人影があった。

一瞬ビックリした。そして目を凝らしてみると

（伊織さん！！！）

それは紛れも無く伊織であった。

「おい、あれ……」

席が近い倉本に知らせる
「気にすんな」
というとさり気なく、カッターナイフを投げつけた。
見事に額にチェックメイト。血しぶきを上げながら落ちていった。
（カッター投げつけちゃったよ……）
「ちょっとなにしてんだよ！！　投げつけてんの！！」
「何ってカッターナイフだよ？」
と冷静に答えた。
「何冷静に答えてんの！！？」
「ヒドイじゃない」
と机の下から声が。
恐る恐る見てみると伊織が体育座りで座っていた。
「うわ～！！」
余りの驚きにイスから倒れ尻餅をつきそのまま後ずさりしてしまった。
「どうした！！」
と教師が向かってきた。
机の下から出てくるのを見た教師は
「なんなんだ！？君は？今は授業中だぞ！」
と教師は怒り始めた。当然だろう
「取材ですよ。谷口君の密着取材」
「なにわけのわかんないことイッテルですか？」
これも当然の反応だろう
「香取先生？　そんな強く言える立場なんですか？」
「どういうことだ？」
「ネタは上がってるんですよ？」
「なんのことだ？」
教師に近づき耳打ちする伊織
「高井くんのお母さんといい関係だそうですね？」
「うっ……」

凍りつく教師。
（何を吹き込んだの？　この人は……）
「じ……自習」
と教師は教室を後にした。とても後姿が悲しそうに見えた。
（ごめんなさい……先生……）
「伊織ねぇ～！！」
と倉本は鬼の形相で腕を組み伊織の前で仁王立ちする。それから1時間説教。
「わかったなら、よろしい。後でちゃんと先生に謝るんだよ？」
「うん。……ひくっ」
終わった頃には伊織の目にはうっすら涙が浮かんでいた。
その光景をまの当たりにしたクラスメイトたちは
「すげ～！！　あの伊織さんを！！」
「こうも言い負かすとは……」
「涙目だったよ？」
と感動していた。そのときの倉本には後光のヒカリが射して見えた。

一方茜はというと
「でね先生ったら・・・って言ってね？」
「ハハハ。バカじゃない？それマジウケル！」
話している中
（ちょっとやり過ぎたかな？でもあの人誰だったんだろう？龍二とどんな関係なんだろう？）
と考えていた。
「茜ちゃん？茜ちゃん？」
「え、なに？」

「どうしたの？ずっとぼーっとしてるけど」
「いやちょっとね……」
「好きな人の事でも考えてたの？」
と美和子がちょっとからかってみる
「違うわよ！！　そんなんじゃないわ！！」
「ならどんなこと考えてたの？」
「それは……」
口ごもる茜。
「わかった。今朝のこと？」
「今朝のことってなによ？」
「なにとぼけてんのよ」
「え？　なになに」
と食いついてくる友達。
「何でもない！」
とまるでこの話題は終わりというようにはっきりとそういった。
そんな日が三日続いた。

夕食
やはり重い空気。
「あ…かね？」
「なに？」
「伊織さんのことなんだけど……」
「あぁあれね？全然気にしてないよ。まぁ家族だし
そりゃ龍二だって女を連れ込む時だってあるもんね？」
と角が立つような言い方の茜。
「そんなんじゃないって」

「どうだか？」
疑念を持つ茜。
「だからそんなんじゃないって！！　僕が好きなのは！！」
そういった僕は我に返った。
「龍二の好きな人は？」
「僕の好きな人は・・・」
僕はだんだん口ごもっていった。
（……バカ）
僕はいた溜まれず部屋に戻った

「どうした？　ケンカでもした？」
「またはいってきたんですか？懲りないですね？あんなことされたのに」
「だいたい、どんなに向こうが悪くても男から謝るもんだけどね」
「誰のせいでこうなってると思ってるんですか！！！」
ずっと伊織をにらむ僕。
「わかった、わかった。そんな顔しないでよ。あなたの取材はもう止めるわ」
「本当ですか？」
「はい、これ。謝礼」
と伊織は映画のチケット二枚を僕に渡した。
「この映画茜が見たいっていってたやつだ！　ありがとうございます」
とあまりの嬉しさを隠し切れずはしゃいだ。
「本当、茜ちゃんのこと好きなんだね？」

チャイムが鳴り茜が出る。

「倉本君？」
「本郷さん？　すまないけど入れてくれる？」
「ええ……」
という昼休み以上の鬼の形相で家に入った。
そして今までの経緯を茜に話す倉本。
「ゴメンね？　龍二脅されてたんだ、伊織ねぇ～に。取材に応じなかったら
本郷さんと一緒に住んでることを一面トップにするって。たぶん久しぶり
のネタだったから暴走したんだんだと思う」
「そう。それよりなんでそのこと知ってんの？」
「何年、龍二と友達でいると思ってんの？　あいつの言動見てればバレバレだよ。それでも必死で隠そうとしてるから知らないふりをね。あいつもあいつらしいっちゃあいつらしいけど。まぁ他の人にはばれない程度だから問題ないけどね」
と二人は話しながら僕の部屋に入ってくる。
そして倉本は勢いよくドアを開けた。
「伊織ねぇ～！！　帰るよ！！」
「じゃ～ね。ということで二人が一緒に住んでいるってのは黙っとくからな」
と首根っこを掴み伊織は引きずられていった。
「なんだったんだろう？」
「さぁ～……」
「そういえば、龍二の好きな人で誰なの？さっき言ってたジャン。僕の好きなのは！！って熱弁ふるってたじゃん。」
茜は唐突に質問してきた。
僕はあまりに突然だったのでうろたえた。
「それは・・ね。」
「それは？」
こうして一晩中僕の好きな人を延々と聞いてくるのであった。

数日後
チャイムがなり、茜と二人で出てみると荷物をたくさん抱え込んだ伊織がいた。
「伊織さん、どうしたんですか？」
「密着取材よ。だから今日からよろしく」
「ちょっと待ってくださいよ！！！取材は止めるって言ってたじゃないですか？」
「あなたの取材は止めるとは言ったわ。でも二人の取材を止めるとは言ってない」
こうして伊織の密着取材という名の居候が始まった。
「は～……」

第４話　だから今日からよろしく（後書き）

美女２人と仲良くしているととある男がついに動き出した
次回よ～し！わかった勝負だ！！
なんかわかりやすくない？

第5話　よ～し！　わかった勝負だ！！

伊織が取材という名の居候を始めて二週間。ついに本郷茜の親衛隊が動き出した。
最近では伊織と茜と一緒に登校するになった。たぶん僕は今一番嫌われている男子だろう。
なぜなら学校のナンバー1とナンバー2と一緒に登校している。カッコイイ男子なら文句はない。なにしろヘタレの僕である。なにをされるかたまったもんではない。

「最近の谷口龍二は調子にのっている。なにしろ本郷茜と明神伊織という2人の美女をそそのかしやがって……たくうらやましいぜ。じゃなくけしからん！！　とにかくあいつから離さないと茜ちゃんたちまで腐ってしまう。それをなんとしてでも阻止しなければならない！」
と長々と演説のように熱く語るは斉藤明。柔道部主将である。この人は茜の非公式ファンクラブの会長なのだ。それで集会をしているわけだ。
「斉藤さんといるほうがよっぽど腐ると思うんですけどね」
と会員の1人がいった
「なにかいったか？」
「別に」
（あの、にっくき谷口（ヘタレ）を叩きのめし、茜ちゃんとラブラブ一直線！！　待っててくださいね！！　愛しの茜ちゃん！！）
「うぅ～」

と身震いする茜。
「どうしたの？茜？」
「ちょっと悪寒が……」
「風邪？」
「いや、そうなのかな……？」

休み時間
「おい！　谷口！！なんか変なやつがおまえの名前を呼んで向かってきてるぞ」
「なんだよ……」
「なんかおまえ人気者だな。また本郷茜か？」
「たぶん……」
「お前も大変だよな。助けたから注目されるのはわからんではないが……まぁがんばれヤ」
呼んでる方向にいくと
「僕ですけど、なにか？」
「話がある、校舎の裏へ来い」
僕は着いていった。
「茜ちゃんとはどう言う関係だ」
（幼なじみって言ったらなんかされるんだろうな……）
「まぁそんなん関係ねえこれ以上茜ちゃんに手を出したら許さんぞ」
（なんだよそれ……）
「どうもこうも無いですよ！！　別にただの幼なじみなだけで」
（やべぇ～！！　言っちゃった……）
「幼なじみだと！！！　ふざけんな！！！」
（そんなことといわれても……）

「そんなことはどうでもいい」
（どうでもいいんだ？）
「とにかく、今後、茜ちゃんと一言でも口聞いてみろ？　ぶっ殺すからな。覚悟しとけよ？」
と釘を刺された僕はその圧倒された空気に動けなかった。

その直後の休み時間
「ねぇ～谷口君？　数学の教科書もってきたわよ？」
「うん」
と僕は茜が持ってきた教科書を取りにていこうとすると一瞬目の前にが吹いた。床にはコンパスの針刺さっている。周りを見回すと遠くでさっきの人が睨んでいた。
（見られてるー！！！）
「どうしたの？　めちゃくちゃキョロキョロして。まぁいいや。はい、これ」
と僕は教科書をもらった。
「ありがとう。確かに受け取ったよ」
と茜を追いだすように教室の戸をしめた
（なによ？　せっかく持ってきてあげたのに。あの態度！）
と怒って帰る茜であった。
その後も茜と僕が話そうとするたびに恐ろしい邪魔が入るようになりそれをなんとか交わしながら昼休みになった

「谷口君、一緒にご飯食べるわよ」

こういうときに限ってよくかかわるのだ。
「う、うん」
断りきれずに一緒に食べることになった。
「今日の龍二なんかおかしいわよ？」
「そうかな？」
「だってしきりにキョロキョロしてるもん。誰か探してんの？」
「いや……そうじゃないけど」
とふと外を見てみると朝の人が窓に張り付くようににらんでいた。
「ひぃ～」
ぼくは驚いた。
「どうした？」
「ううん。なんでもない」
と不思議そうにきく茜にそういった。
（今のは幻だ。きっと幻覚だ）
とまた見てみる
（やっぱりいる）
恐る恐るその人に近づき
「ちょっと来い」
といわれきたのはまたもや校舎裏。
（きっと生きて帰れないよ……）
「おい！　忠告したよな？　茜ちゃんと口利いたらぶっ殺すって」
「はい……そうですね……」
僕は足がすくみそうだった。
「なんでまもらん？」
目が本気と書いて（マジ）になっている。その人は
コブシを振り上げて僕の顔の横を通過して校舎の壁に大きな音をたてた。
「何でといわれても」
「よ～し！　わかった勝負だ！！　これで負けたら一切茜ちゃんに近づかない」

「は～なんでそうなるんですか？……」
「いいな。明日の放課後グラウンドだぞ。こなかったらどうなるかわかってるのかな」
と校舎の壁を殴って大きな音を立てた
「ひ～」
「いいな！！　絶対くるんだぞ！！」
と念を押して言って去っていった。
（イヤだよ！！　なんでいかないといけないんだよ？　でも行かないと何されるかわかんないし・・・）

その夜、
「は～」
「どうしたのよ？　ため息なんかついて」
「実は……」
「つまり、私をかけての決闘ってことか」
「認めたくないけどそうなるみたい」
「一言多い！！」
と頬をつねられた

「うお～」
「たー」
とお互いに満身創痍の中殴りあう2人
「くっ」
「うん」
「なかなかやるじゃねえか」

「そっちこそ」
「お願い！！もう止めて2人とも私なんかのために」
「そうはいくかよ」
「そうだよ」
「お願いだからやめてー」

「なんて」
「バカじゃないの？　自信過剰すぎ……」
「なんか言った？　ね、なんか言った？聞こえなかったけど」
と頭をグリグリされた。
「いえ何も……」
「でどうするのよ、明日？」
という茜の問いかけに
「そんなことといわれても、一方的に言われただけで……」
「なら行かないの？」
「でも行かないと怖そう出し」
「なら行くのね？」
「行っても勝ち目無いし……」
「あ～もう、イライラする！！！　行くの？　行かないの？」
と茜は僕の胸ぐらをつかんで言った
「行きます……」
僕は涙目で答えた
こうして僕は勝負を受けることになった。

第5話　よ～し！　わかった勝負だ！！　（後書き）

時は過ぎ季節は秋、今年もクラスマッチの日がやってきた

次回

なに、張り切ってんだよ？

話メチャクチャ変わったよね？　あれ？　斎藤さんとの勝負は？

第6話　なに、張り切ってんだよ？（前書き）

この回はまたもや番外編ぽいですけど気にしないでください（笑）
注意：紹介っぽいシーンでせりふがつらなってるとおもいますが、
実況→本人のひとことです。読みづらいと思いますがよろしく＾＾

第6話　なに、張り切ってんだよ？

「よし！！今日優勝するわよ！！」
「なに、張り切ってんだよ？それに僕クラス違うし」
「張り切って何が悪い！！」
と頭をグリグリされた。
「何も悪くないです……」
今日はクラスマッチである。
普通は男女別なんだろうけど、男女混合でソフトボールである。
茜が張り切るのも無理は無い。優勝チームには売り切れ続出で入手困難と言われる
インテンドーリーが1人1台貰えるのだ。
忘れていた。このクラスマッチの進行を説明しよう。
僕らの学年は全部で16クラスある。
まずランダムに4クラスを決め、その4クラスがリーグ戦をする。
そして上位2クラスが決勝トーナメントを戦うのだ。僕は3組、茜は12組である。
「このクラスマッチはリーグ戦は3回、決勝トーナメントは7回、決勝は9回で戦う。決勝トーナメントは4回で5点差以上だったら、コールドゲームとする。ただし、決勝を除く」
と先生からの試合の詳しい説明の後、クラスマッチが始まった。
僕のクラスは1組、14組、15組である。
最初の対戦相手は1組。頭が切れる人たちの集まりなのだが……
僕はベンチ、倉本はキャッチャーで出場した。
その時なんで僕をベンチに入れたのかをきくと村内から
「お前は秘密兵器だから」
と言われた

さて試合の方はと言うと
「ストライク」
（ど真ん中？　おそらく今度は内に来る）
「ストライク」
（２球目もど真ん中？　外で勝負だな）
「ストライク」
「３球ともど真ん中だと？　お前やる気あるのか！！！」
変な読みをして八つ当たりする人もいれば
「怖い」
「ヒィ～」
と投げるボールに怖がって試合にもならなかった。
結局打ちも打ったり毎回の１８得点、投げてはエースの村内くんがパーフェクトで快勝

一方、茜のクラスはというと
茜を中心で守っていくスタイルである。相手は６組。打っては茜の特大ホームラン、投げては茜がパーフェクト。しかも９者連続三振で初戦を白星で飾った。
（たくミンナ相手にならないわね）
そして僕のクラスも茜のクラスも順調に勝ちあがって決勝までコマ進めた。

「雲ひとつ無い快晴、日差しも優しく小春日和の今日の銀法第一グラウンドです。今日はクラスマッチ決勝３組―１２組を実況、山口鉄平。解説、銀法高校クラスマッチ解説者、安西光義さん
ベンチリポート１塁側、３組の保健委員、高山弘道さん。３塁側、１２組の風紀委員、田淵涼子さんでＧＢＣ製作で銀法高校のみなさんにお送りしてまいります。それではスターティングオーダーを発表しましょう。まず先攻の３組」
※これは、校内放送です。
「１番、レフト、なんと５０Ｍを５秒台前半で走るという二川峰彦くん」
「お前誰だよ！！」
「２番、ショート、鉄壁の二遊間の１人、大友淳さん、ご存知の通り大友さんの彼氏は福川駿一君です」
「駿一く～ん」
「３番、サード、二川君並の俊足、そしてバッティングセンターでは場外を連発するほどのパワーの持ち主、内藤大博くん」
「どうも」
「４番、キャッチャー、いつもはスクープを探しに命かけてると言っていいでしょう、倉本俊哉くん。強肩です。」
「５番、ピッチャー、村内巧くん。この人は銀方では３本の指に入ると言うイケメン。それから野球経験者で１４０ｋｍ後半記録するとか」
「きゃー村内く～ん」
「んだよ！！？」
とにらみつけた
「６番、セカンド、鉄壁の二遊間のもう１人、福川駿一君」
「あなたは誰ですか？」
「７番、センター、大道信虎くんは、今話題のくるみちゃんにゾッコン中の１７歳」

「優勝するからね？　くるみちゃん」
※　くるみちゃんとはアダルトゲームに出てくるフィギアのこと
「曲がったことが大嫌い、しかも定番の三つ編みのお下げでメガネと言うスタイルは、８番、ライト水島なおみさん」
「あんたたちなんて、眼中に無いわ」
「９番、ファースト運動神経はイマイチだけど人一倍の目立ちたがり屋の水島真吾（みずしましんご）くん
もちろんうザキャラです。」

「対する１２組のスターティングオーダーです
１番、レフト、東大を狙っているが全く勉強に身が入らない上田修太（うえだしゅうた）君。俊足です」
「そうなんすよ」
「２番、サードなぜか年上なのに弟や妹の方が立場が上の森野直美（もりのなおみ）さん。女の子です
「あ……すいません」
「３番、ファースト、最近彼氏の二股が発覚した岩谷美紀子（いわたにみきこ）さん。スイッチヒッター」
「絶対、許さないんだから！！」
「４番、ピッチャー最近、谷口龍二くんとの関係が気になるこの学校のアイドル本郷茜。
準決勝では逆転のタイムリーを打ちました」
「なんでもないわよあいつとは」
「５番、セカンド、来日して１ヶ月で日本語をマスターしたブライアント・グラスくんは留学生」
「キンシ〇ソウカン、キッ〇ウシバリ、ナカ〇シハダメ」

「6番、ライト、真面目一徹の副会長と思いきや、実は明神伊織目当て生徒会に入った久本信輝君。この人も俊足です」
「あなたは誰ですか？」
「7番、キャッチャー、この間1年生にコクられていまラブラブの小坂文恵（こさかふみえ）さん。緻密なリード」
「ホントかわいいんだから」
「8番、センター、河合翔（かわいしょう）くんは未だに美樹ちゃん告白できず。脅威の守備範囲」
「余計なお世話だ！！」
「9番、ショート、久しぶりに学校に来た瀬田莱慶（せたらいけい）くん。この試合は9番に入りました」
「なんか文句あっか？」

「解説の安西さん、両チームこれまでの戦い方の印象は」
「そうですね、3組は打力、12組は投手力で勝ってきたていう印象ですね」
「確かに3組は1番の二川4割2分8厘、3番の内藤4割5分、4番の倉本5割3分1厘
5番の村内6割1分1厘そして8番の水島も4割ちょうどと5人が4割超えていますし、そしてホームランも内藤が8本、倉本が9本、村内が7本とクリーンアップもよく打ってます。それから12組ですが23イニング投げて自責点1防御率0．39の本郷茜にエラーはなし。まさに対照的なチームです。さぁどんな試合になるんでしょうか？」

そして決勝が始まった。1回の攻撃はどちらも無得点。

投手戦になりそうな立ち上がり。しかし3回僕のクラスがチャンスをつくる。
1死1・2塁バッターは4番の倉本。そこは守りのチームの12組。
「1ナウト1塁2塁。先制のチャンス3組。バッターは倉本。マウンドにはエースの本郷」
「ふん、インテンドーリーは私のものよ」
「長い間合いから第6球投げました。打ちました。打たされた。セカンドガッチリとって2塁送球コースアウト1塁送球1塁もアウト。ダブルプレー！！」
と4―6―3の併殺打で打ち取った。4回、5回はどちらも三者凡退。6回今度は12組のチャンス
村内が突如乱れヒットと四球で2死満塁。バッターは8番河合
（見ててよ？　美樹ちゃん）
「第4球投げました。空振り三し～ん！！！　美樹ちゃんにいいとこ見せられませんでした。村内なんとかしのぎまし……」

そして均衡が破れたのが8回の表僕たちの攻撃。茜が疲れ始めたころだった。1，2番の連続ヒットそして
「抜けた、抜けた2番の大友センター前ヒットでノーアウト1・2塁。3回以来ランナーがスコアリングポジションに進みました。そしてクリーンアップです3番の内藤。本郷、第1球投げました。打ちました。引っ張って左中間まん真ん中破っていったボールはフェンスまで達した！！！2塁ランナーホームイン1塁ランナーもホームイン打ったバッターは2塁到達！！ツーベース。2―0。ついに均衡が破れました、8回の表！！」
そして
「4番倉本、打ったー！！　外野は一歩も動かない～！！！　入った～！！　ホームラン！！　2ランホームランです。倉本ゆっくりとホームイン！！　4点目が入りました！！」

「今のはなんですか？　安西さん」
「恐らくシンカーだと思いますね。甘い所に入ったのでしょう」

「……3アウト。この回ついに均衡が破れて内藤の2点タイムリーツーベースヒット、
倉本の2ランホームランで4点先制しました。8回表終わって4－0。3組のリードです」
そしてその裏1点返された
「これはゲッツーコースだ。1塁セーフ！！ゲッツー崩れの間に1点返しました、12組！！」
4－1、僕たちのリード。
そして最終回、2死までアウトを取ってあと1つ……
しかし、神様はときに試練を与える……突然に……
村内が打たれ2死満塁にされ、3番の岩谷に2点タイムリーツーベースヒットをうたれた
「レフトバック！！！レフトバック！！！　頭を越えた！！！二川の足でも追いつきません！！　3塁ランナーホームイン！！　2塁ランナーも3塁回ってホームイン！！　今ボールを取って内野に返すだけ！！1点差！！！なおも2アウト2・3塁！！1打サヨナラも見えてきました12組！！」
そして監督（担任）が交代を告げる
「ピッチャー、村内に代わりまして谷口」
ベンチに戻ってきて
「後は任せたぞ！！」
と言われマウンドに上がったのはいいが……
いきなり4番の茜である。
（どうせ、龍二のヘナチョコボール。抑えられないわ）
そして僕は1球目

「マウンド上はエースからマウンドを託された谷口。いきなり話題の2人の対決です。第1球なげました」
「なんとサブマリンです！！」
（お前は渡辺俊介か！！）
と倉本は思った。
インコースに投げた
（私相手にインコースなんていい度胸してるわね！！　あとでお仕置き決定ね）
「1ボール」
その後ストライクを2つ取って僕は追い込んだ
「2アウト2塁3塁。12組1打サヨナラもチャンス。カウントは2ストライク1ボールバッターボックスには投打で活躍した本郷茜。マウンド上は3組の切り札谷口龍二。長い間合いから、谷口、第4球投げました。見逃し三し～ん！！！　12組後一歩およびませんでした！！！……」
こうした僕はインテンドーリーを手に入れた。しかし

帰宅後
「龍二！！！？」
と怒った顔で
「今日私にインコース投げたよね？しかも速い球」
「それだけ茜がいいバッターだったってだけであって・・・」
「ということで罰としてインテンドーリーは私のね」
「なんでそう」
「ね」
「ね」
「ね」
と刺々しく詰め入られ

結局……

「これ楽しいね」
「僕にもやらせてよ！！」
とお願いすると
「１００円」
と帰ってきた
「なんでお金とるの？　だいたい僕が貰ってきたやつだよ」
とぼそっと愚痴をこぼす
「なんか言った？」
とにらみつけられた。
「いえ、なにも……」
と茜のものになった。

第6話　なに、張り切ってんだよ？（後書き）

前回、斎藤さんに勝負を挑まれた龍二君
果たして勝負の行方は？
次回、僕にはそんな趣味ありませんから！！
やっと本編に戻った……

第7話　僕にはそんな趣味ありませんから！！（前書き）

ありえないことが起こりますが気にしないでください（笑）

第7話　僕にはそんな趣味ありませんから！！

勝負を挑まれた翌日
「おい！　聞いたか？　あの柔道部の斉藤が谷口に勝負挑んだらしいぞ」
「まじで！！　勝てっこないってあんな野獣に」
「ねぇ？　聞いた？　谷口くん、斉藤君に目を付けられたみたい」
「うそ～それって……」
登校すると昨日の話題で持ち切りであった。

「は～」
「ほら、しゃきっとする」
と茜は僕の背中を叩いた。
「そんなこと言われたって……」
と気を落としながら僕は教室に向かった。
「おはよう、聞いたぜ、あの斉藤から勝負を挑まれたんだっけ？ついてねえなお前」
「斉藤って誰だよ？」
（あ！　昨日の）
と思い出す僕
「お前知らねーの？」
「うん」
「銀法高校の、いや全国の高校の野獣、斉藤明。
柔道部主将で去年のインターハイでは2連覇を達成。
しかも決勝では背負い投げで相手選手の背骨を粉砕したとか。後……」
と倉本から情報を聞き怯える僕

「おい！！　龍二聞いてるか？」
「うん……」
僕は魂がぬけたような受け答えをした。
（ダメだ……力弱いし……）
といろんなこと考え初めて
「おい！！　龍二？　あ！　やべぇ魂が！！」
と倉本は僕の魂を急いで手で口に戻した
「まぁなんとかなるさ。龍二なら。あの山本を倒したんだから」
「あれは、確かに自分から立向っていったけど……」
「けど？」
「あ！　なんでもない」
と僕は我に戻ったようにいった。
（あぶない、あぶない。バレるとこだった）
「まぁガンバレよ」
「うん……」

そして朝のHR（ホームルーム）
「今日は3時間目から急遽イベントが入りました。なので3時間目はグラウンドに集まってください」
「先生、イベントってナンですか？」
「それはね」
と先生は僕に目線をむけてこう言った。
「3時間目からのお楽しみ」

運命の3時間目外に出てみると
そこには大きなステージが設置されていた
「なんだこれは！！！？」
「あ～これ？君と斉藤君が戦うところ。いわばリングみたいなとこね」
「伊織さん？何言ってるんですか？てかなんでこんなの作ってるんですか？」
「決まってるじゃない。おもしろいからよ。それにこれも提出してきたから」
「おもしろいって……これなんですか？」
伊織の手には1つの書類があった。
「これは催物届（生徒用）よ」
この書類を提出すればこの学校では、生徒主催でいろんなイベントを生徒会がバックアップして開催することができる。この学校の生徒の自主性を尊重する制度の一環なのだ。
「よくこんなの受理しましたね……」
「だってそうじゃない。学校始まって以来の落ちこぼれと言っても過言ではない君が
高校の野獣と戦うのよ？これはハン○チ王子対マ○君の決勝再試合や佐賀○の奇跡の逆転満塁ホームランよりも見ものだわそれに調査もできるし、一石二鳥だわ」
「なんかビミョーに古いし」

そして勝負の時がやってきた
僕と斉藤さんは特設ステージの上に立っていた
その周りには全校生徒が注目していた。
（今日は茜ちゃんをこいつから遠ざけるんだ。こいつの病気が移る

前に。まぁ本気ださなくても余裕だけど）
（あ～イヤだな。結構痛いんだろうな。逃げたいな。でも……）
と思う斉藤と僕。
「さ～やってきました」
と突然聞き覚えのある声がした
（この声！！）
と思い周りを見回すと、今日の朝まで見た女の人だった。
「誰だ？　あのキレイな人は？」
という男子生徒に
「なんかテレビでみたことある」
という女子生徒。

「かあさん！！」
「あの人、谷口の母親？」
「かなりキレイだな」
と見とれる男子生徒たち
「なんでここにいるんだよ！！」
「実況を頼まれたのよ、伊織ちゃんから。それに龍二の日頃のがんばりを見ときたいからね。だからといって龍二の応援はしないからね」
「あっそう」
（フリーとはいえこんなことまで引き受けるのか……　この人は……）
「それでは、お互いに一言を言ってもらいましょう」
「お前の魔の手から、みんなの茜ちゃんを守るんだ！！」
と断固たる決意に対し
「えっ、あっ、たぶんぼろ負けすると思いますけどがんばります」
と弱気でオドオドした態度の僕。
（あのバカ……）
呆れて茜はうつむいた。

「それではこの勝負の大まかなルールをこれから3本勝負を行います。それで先に2勝した方が勝ちとします。勝者は本郷茜さんからのキスです」
「お～！！」
とどよめく会場
「ちょっと何決めてんのよ！！」
「いいじゃない？　ヘルモンじゃないし。それにこれは伊織ちゃんが提案したのよ」
「そういう問題じゃないの！！　何考えてんのよ？　あの生徒会長は」
「これで龍二君負けられなくなったね」
「美和子まで何言ってんの」
「大丈夫だって。龍二君ならやってくれるって」

「ではまず1本目はこれ！！」
と大きい垂れ幕が下りてきた。
「激辛スイーツ対決～！！！」
「今から、2人にスイーツを食べてもらいます。しかし、全て激辛です。その激辛スイーツをどれだけおいしそうに多く食べられるかを競います。制限時間は15分です。多く食べられた方が勝ちです。さぁどれだけ食べられるのでしょう？」
ととてもおいしそうなスイーツが出てきた。見た目が
「なんかうまそうだな？」
「ああ見た目はな。でもお前、全部これ激辛なんだぞ」
という男子生徒。

「ちょっと生徒会長、これどう見ても懲りすぎですよね。よくこんなお金ありましたね？大丈夫なんですか？」

「大丈夫、その分部活の支給額を制限すればいいから」
（だから、いつも部費が少ないんだ……）

「谷口くん、まずはモンブランを、そして斉藤くんは洋ナシタルトをとりました。」
と1本目の勝負が進んでいく
そして一口食べる両者。
（うっカラッ～！！！　でもこれを乗り越えないと明日は来ない！！）
「なんのこれしき！！」
と一個食べ終えたが悶絶状態であった
一方僕は
（辛いよ～こんなの食べられないよ）
と思い僕は周りを見た。茜がこっちをにらみつけているようにみえた
（あのクソ会長が！！）
とちょうど僕の後ろにいた伊織をにらみつけていた
（ヤバイ茜が僕をにらんでる……）
と僕は走思い込み一気にかき込んでテーブルにあるものを全て完食した
「谷口選手、なんと一気にペースアップしてきました、速い、速い！！
なんという速さ！！」
と実況する母さん。
（おもしろくなってきたわね）
「終了！！　斉藤、洋ナシタルト、谷口、モンブラン1個、イチゴのケーキ1ホール、巨大パフェ2個、チョコレートケーキ1ホール、シュークリーム5個、マンゴープリン12個。よって……勝者、谷

口！！！」
「信じらんない……龍二って日頃そんなに食べないのよ？　しかもいつも食べるの遅くて
いつも後片付けに困ってるんだから」
と茜は驚く。
「茜、それはあなたのおかげだと思うよ？」
「どういうこと？」
そういう美和子に対して首をかしげる茜であった。
「ということでまず1本目の勝負は谷口選手に軍配があがりました」
「まず、斉藤選手にインタビューしましょう。どうですか？　今の気持ちは？」
「すっごい悔しいです。あんなやつに負けたことが。この学校の恥に負けたんだから」
と苦しそうに斉藤は言葉を発した
（そこまで言わなくても）
と茜は思った
「もう後はありませんが？」
「たたきのめすまで！！　茜さん、待っててくださいね～」
ものすごい笑顔で茜に向かって手を振った
「うっ気持ち悪……」
「すごい手振ってるよ？」

そして2本目の勝負が始った。
2本目は紙相撲対決。
紙の種類も大きさもステージに入れば自由。しかし少しでもステージからはみだしたら失格というものだ。
僕は大きい方がいいと考え、ダンボールを使ったのだが、大量に使ったせいか

ステージからはみだしてしまった。よって2本目は斉藤さんに軍配が上がった。
「あのバカ！！　ルールちゃんと聞きなさいよ」
と茜が呆れていた。

「さぁ1対1になりました。なんとか踏みとどまった斉藤くん。しかし次の勝負が
泣いても笑っても最後～」
と母さんの実況にみんなが盛り上がった。
「うお～」
「最後の勝負はこれだ～～！！！」
と垂れ幕が下りてきたと同時にステージがバレーコートに変形した
一人バレーボールと書いてあった
「一人バレーボールとは、今から1対1でバレーの試合をしてしまいます。
コートの広さは通常通り。ネットの高さは2m。15点、1セットです」

最後となる3本目のバレーボール対決が始まった。
もちろん運動神経の欠片もない僕の圧倒的な不利なわけで……
どんどん点差が開いていく。
「13－2。斉藤選手の大量リードです。追い詰められていく谷口。
龍二！！しっかりせんか！！！」
と檄をとばす母
（そんなこと言われても～……こんなの勝ってこないよ！！）
「あのバカ、負けたら承知しないからね」

「応援に力はいってるわね」
「だってあんなゲス野郎とキスなのよ？」
「なら龍二君ならいいんだ？」
「なんでそうなるの？　そんなこと一言もいってないでしょ？」
と顔を赤くする茜
（茜ったら）
と美和子は笑顔で茜を見た
（そうよ！！　ファーストキスの相手は決まってるんだから）
「これはどうだ」
とスパイクをうたれ斉藤のマッチポイント。
僕は後がなくなった。

そのときだった。
打ったボールが高く跳ね上がり、観客を追い越しどんどん転がっていく。
「ボールが～」
と1人の女の子がボールを追いかけていきいつの間にか校門の前の大きな道に出ていた。
「ふ～追いついた」
とほっとする女の子。
プップー！！！
と女の子の横から大きな音が響いた。みんなそれに気づく
「あぶな～い！！！」

女の子がその方向をむくと大型トラックが迫ってきた。

その光景にミンナ息を呑む中僕は気づいたら必死に走っていた。しかも
ものすごいスピードで
（僕何してんだろう？なにこれ体が軽い僕じゃないみたい）
トラックはもうすぐそこまできていた。
「間に合わない！！」
「轢かれる～！！」
と誰もがもうダメだと思った瞬間僕はその子を抱きかかえて反対の
塀の上にのった
「ふ～危なかったね？　ケガない？」
「はい……」
「わ～」
と周りが盛り上がった
「すごいじゃない！！」
「谷口君カッコイイ」
「スゲーよ！！　お前！！！」
「男の中の男だ」
とみんなに僕はほめられもみくちゃにされた。
そして茜がやってきた。
「お！お姫様のおでましだ～」
「ちょっといつまで抱えてんのよ」
と1発グーで殴られた
「このバカ龍二！！　何やっての！！」
「何って女の子を助けただけだけど？」
と平然と答えると
「そんなのわかってるわよ！！ナンもできないのにでしゃばってん
じゃないわよ！！今回はうまくいったけど、死んじゃったら助けた
って何も意味ないんだからね！！」
と胸ぐらをつかまれた。
「わ～なんかいつもの本郷さんじゃない」

「本郷さんがこんなことするとは思わなかった」
（やっちゃったなついいつものペースになってしまった。そういえば保健室以外で人前でいつもの接し方するの初めてだな。たぶん引かれたな完全に）
「かっこいい」
「え？」
「そんな本郷さん初めてみた。」
「本郷さん？　僕をしかってください」
と男が殺到してきた。
「え～～～？　ちょっと！！！」
と逃げる茜
「コラ！！　龍二！！！　助けなさ～い」
「え？　そんなこといわれても。こっちもそれどころじゃ……うわ～きた～！！」

僕も僕で
数分前
「谷口～」
と斉藤さんはものすごい勢いで僕に迫ってきた
（絶対殴られる！！）
と覚悟を決めたとき
「お前！！すごいぞ！！　ゴメンな。いままでずっと見下してたお前のこと。お前じゃ
茜ちゃんに似合わないって」
「いいですよ。本当のことだから」
「でも今日お前の行動をみて俺は１つ大きな間違いに気づいたんだ」
「なんですか？」

「お前じゃ茜ちゃんに似合わないんじゃない、茜ちゃんじゃお前に似合わないんだ！！」
と斉藤は力説する。
「え？」
（どういうこと？）
「谷口？お、お前にほ、惚れた！！」
やけにたどたどしくそういって顔を赤くした
（え？　もしかして、嘘！！　まさか……）
そのまさかであった。斉藤さんは禁断の扉をあけてしまったのである。
「谷口！！」
と抱きついてきた
「やめてください！！　僕にはそんな趣味ありませんから！！」
と必死に離した。
「谷口、逃げんなよ～」
こうして決闘はうやむやのまま終わった。

第7話　僕にはそんな趣味ありませんから！！（後書き）

こうして禁断の扉を開かせてしまった龍二君。
さて次回は助けた女の子のお話
次回
何がよくないんですか？
何が良くないんだろうね？　龍二君

第8話　何がよくないんですか？（前書き）

なんか倉本君の性格変わってるっぽいですが気にしないでください

第8話　何がよくないんですか？

勝負の翌日
「ふ～危なかったね？ケガない？」
「はい……」
と昨日のことを思い出す女の子。
「谷口先輩……運命の人」

「コラ！　龍二！！　ちんたらしない！！　遅れるでしょ？」
「でも、まだ全然余裕あるよ？」
「つべこべいわない！」
と耳を引っ張られながら登校する。
「あの～せんぱ～い」
と女の子は僕を呼んだ
「うん？」
「昨日はありがとうございました」
「あ！君は、あの時の」
「ゴメンね、龍二がでしゃばっちゃって」
「いえいえ、命の恩人ですから」
と笑顔で答える女の子
「そういや名前聞いてなかったね」
「1年の宮内遥です。それに決めたんです私」
「何を？」
「先輩にどこまでもついていくって。そして私気づいたんです。先輩こそ運命の人だと……」
と遥ちゃんが延々と語っている中僕は
「行こうか茜」

「そうね」
と行こうとすると遥は僕の腕をつかんで猛ダッシュ。
「ちょっと～わ～～！！　助けて誰か～」
「は～は～は～は～疲れた……」
と教室で僕は一息ついた。
「珍しいな、お前がギリギリセーフなんて。お前はだいたいこの時間帯の時はギリギリアウトなのに」
「いや、1年の遥ちゃんが引っ張ってね」
「遥ちゃんって宮内遥ってコか？」
と慌てて聞き返す倉本。
「うん、そうだけど？　それがどうしたの？」
「今年の1年の中で一番人気があるコだ。本郷2世とも呼ばれてるんだぜ？」
「たしかに、かわいかったけどね。」
「なぁ？どこで知り合ったんだよ？」
「昨日……」
「あ！昨日お前が助けたコか？」
「ホントお前って運いいよな？俺が勝負うけてればよかったな」
「全然よくないよ。斉藤さんには目付けられるし……別の意味で。それに茜にはあの後ボコボコにされるし」
と僕はぼやいた
「何がよくないんですか？」
「わ～遥ちゃん！！なんでここにいるの？ここ2年の教室だよ？」
どこからともなく現れたのは遥であった。
「そうなんですか～！！？　すいません。迷っちゃって」
「あのね～遥ちゃん1年とはいえもう6月の終わりだよ？」
「どうも、倉本です。俊哉先輩って呼んでね？」
「は～」
「引いてるよ？」
「そしたら俺はどうなる？遥ちゃん？俺、この学校未だに迷うぜ」

「そうですよね？　迷いますよね？良かった～仲間がいて」
（そういう問題じゃないんだけど……）
「そういう場合じゃなくて。とりあえずチャイムなったけど先生たちはまだきてないから教室まで送るよ。もう迷わないでね？」
「は～い」
と急いで1年の教室まで送った。
もちろん担任に怒られた。
「すいません……」

そして2時間目
「やばい！！　ノート忘れた！！」
「ホントにやばいな。今日当たる日だろ？」
「あの先生答えられなかったら何してくるか分かんないもんな……」
「貸してあげましょっか？」
「あ！ありがとう……って遥ちゃん！！！」
神の声が聞こえたかと思えばそれ遥であった。
「先輩？　なんでここにいるんですか？」
「それはこっちのセリフだよ」
「トイレに行ってて帰ってる途中だったんですけど……あれ？　ちゃんと帰れたと思ったんだけどな～」
「要するにまた迷ったんだね？」
「まぁそういうことになりますね。やっちゃいました」
と遥ちゃんは冷静な口調でいった。
「やっちゃいましたって……戻ろうか？」
「はい」
と抱きついてきた
「谷口く～ん？　教科書貸し」
とちょうど茜はその光景を見てしまった
「龍二！！！！？」

「これはいろいろと事情がありまして」
「どんな事情かな？　ねぇ教えてくれる？」
「ぎゃー」
とボコボコにされた。
その体でまた1年の教室まで送った。
「はぁ～いい加減最低限自分が使う場所は覚えて欲しいよ・・・」
僕は教室にもどりまた怒られた。

「ホント信じらんない。年下の子に手出すなんて」
「どうしたの？」
「龍二が遥ちゃんと抱き合ってた。バカ龍二、ロリコン、節操なし」
「龍二君自分からそういうことしないでしょ？たぶん遥ちゃんってこからなんじゃ」
「分かってるわよそんなこと」
「ならそこまで言うの？　もしかしてやきもち？」
「違うわよ、だいたいあんなやつのどこがいいのよ？背低いし、運動神経全くって言っていいほどないし、でもいざというときに助けてくれるし、笑顔がかわいいし、優しいし……」
とだんだん声が小さくなっていくのをみて美和子は微笑んだ。
（かわいいね。茜は）

3時間目
「次なんだっけ？」
「次は数学だな」
「そっか小テストが返ってくるんだっけ？」
「遥ちゃん！！！？」
「アレ？　先輩？　先輩も音楽ですか？」

とぼけた発言をする。
「ここ僕のクラスの教室なんだけど」
「うそ！！！　違うんですか！！！？　でも」
「でも？」
「ここまできたら運命ですよね」
と遥ちゃんは腕を組んできた。
「ずるいぞ、お前ばっかり」
と倉本が言うとクラスの男子が
「そうだ。そうだ」
と目つきを変えてせまってきた
「違うって、遥ちゃんが勝手に……ていうかいい加減腕を離してよ？」
というが当の本人はまったく聞こえてない様子。
「え？なんですか？」
だんだん僕たちに迫ってくる。
「もういいや。とりあえず送るから」
と逃げるように僕たちは教室を後にした。
「追うぞ！！」
と倉本の指示でクラスの男子たちが追ってきた
するとちょうど先生がきた
「こら！お前達授業中だぞ！！　席につかんか！！！」
と先生が怒鳴るがおかまいなし。
「言ってもムダですよあれは」
とクラスの女子の一人が言った。
「なんで追って来るんだよ！！」

ふと私は廊下を見てみると追われている龍二が眼に入った

「龍二！！」
とおもわず叫んだ
「本郷どうした？」
「いえ、なにも」
（あのバカなにやってんのよ！！？）

（音楽室は５階あの階段を使わないと。でも確実に張られてる。そしたら残るは１つ）
「わ～楽しい～鬼ごっこみた～い」
とこの状況を楽しんでた。
「楽しんでる場合じゃないでしょ？」
「だって楽しいものは楽しいんですもん」
「右へ曲がって」
と指示していろいろ逃げ回ってなんとかまいた。
「なんで音楽室に連れて行くのにこんなに苦労してんだろ？　だいたい遥ちゃんが
誤解を招くようなことするからいけないんだよ！！　それに迷ったふりしてホントはわざと僕のクラスの教室に来てるんじゃない！！！」
と口調を思わず強くする。
「すいません。私のせいで……」
としょげた瞬間僕はわれに返った。
「ゴメンちょっと熱くなっただけ。気にしないで」
「そうですよね。迷惑ですよね？急に方向オンチで元気だけが取り柄な人がせまってきたら。でもただ１つ言えることは『私、宮内遥は谷口龍二のことが好き』ということです」
ときっぱりと言い切った。
（どうしよう～！！！？　告白しちゃった。）

「こんな僕を好きになってくれてありがとう。でも君の思いに応えられないんだ。だって僕には好きな人がいるから」
「そうなんですか・・・でどんな人なんですか？」
「ちょっと耳貸して」
と遥ちゃんに耳打ちをする僕
「え～そうなんですか～！！」
「まぁ可能性は低いんだけどね」
「がんばってくださいね。でも私も負けませんからね？　いつか私に振り向かせますから」
ととても元気に微笑んだ。

「さてとこっちも可能性低いけどやってみるか。あの道で」
と耳打ちする僕。
「あの道で？」
「うん、多分囲まれると思うけど。いちかばちかで」
学校の事務室の前から和室が続いてる廊下を通って和室の横にある階段を通っていくとそこは音楽室。
そして僕たちはその階段を上りきった。そこには誰もいなかった
「は～よかった誰もいない」
「なにがよかったのかな？　谷口くん」
壁から声が聞こえた
「げっ倉本君……」
見つかってしまった
「こういうこともあろうかと隠れてたんだよ！！」
「へ～これが？」
「すご～い！！　本当に壁の中に入る人いるんだ？　アニメとかお

笑いでしか見たことない」
倉本はまるでお笑い番組のコントのネタのように壁の中いた
「おいいたぞ～」
と倉本が叫びクラスの男子に囲まれた。
「お前だけ抜け駆けは許さないぞ」
「そうだ、そうだ」
とだんだん迫られ自分たちのスペースが狭まっていく。
「さぁかかれ～！！」
とクラスの男子が飛び掛ってきた瞬間
「うるさ～い！！　なんですか？　あなたたちは」
とすごい剣幕で音楽の先生がでてきた
「あの～宮内さんを音楽室に届けに」
「そうですか、どうも、すいません。宮内さん！！　いつもいつも迷子になって！　いい加減教室の位置ぐらい把握してもらわないとこまります」
「すいません」
と謝る遥。
「まぁいいわ。あなたは帰ってよろしい。であなたたちはなんなんですか？もう授業中ですよ？」
「それは……その……」
とみんな黙り込んでしまった。すると
「大体あなたたちは……」
と説教を延々とする先生
「すいません、すいません」
とただ謝るクラスの男子たちであった。

そしてその夜僕の部屋で

「茜、僕遥ちゃんに告白されちゃった」
「うそ！！　マジで？」
「うん。あんなかわいいコから告白されたの初めてだからさ」
「で返事は？……やっぱりいい。わかってるから」
（そうよ……あんなかわいい子から告白されたら
誰でもＯＫするに決まってる。きっと龍二も……）
「でもフッたよ？」
「なんでよ！！　もったいない」
「だって僕好きな人がいるもん」
とまた墓穴を掘ってしまった……
「そうなの？　どんな人、どんな人？」
と私が身を乗り出して聞くと。
「え？それは、その……言えない」
と龍二は急に顔が赤くなってオドオドし始めた
「いいじゃない？　２人しかいないんだし」
「そういう問題じゃ……」
「もしかして言わないつもり？　わかった。言うまでプロレス技かけてあ・げ・る」
「痛いよ～やめて～あ～」

第8話　何がよくないんですか？（後書き）

茜のクラスに変な留学生がやってきた
次回、カンドウシマシタ！！
え？　なんかすごくないこの人？　　いろんな意味で……

第9話　カンドウシマシタ！！（前書き）

今回は何と2本立て！！

第9話　カンドウシマシタ！！

「あのバカ母遅刻しそうなのに昨日のインタビュー映像見せてなに考えてんのよ？」
「いつものことじゃない」
と僕たちは急いで登校していた。
そして僕はなにかにぶつかった。
「いたっ」
それは僕には得体の知れない巨大な生物にしか見えなかった。
「ば、化け物！！」
と思わず茜の後ろに隠れてしまった。
「ちょっと何やってんのよ？」
「ば、化け物が。そ、そこに」
私は周りを見回したが、龍二がいうそれはどうみても人間にしか見えなかった
「何言ってんのよ？　こんなときに。すいません」
と私は謝った。
その生物いやその人は金髪のサラサラヘアーで青い目。僕よりはるかに長身でカッコイイ外国人であった。
「ほら、龍二のせいでこの人困ってるじゃない。謝りなさい」
と僕は茜に首根っこつかまれその人の前に出された
「ごめんなさ……ひぃ～」
とまた茜の後ろに隠れた。
「ちょっと何かくれてるの？」
「だって」
「だってじゃない！！」
と胸倉をつかまれる僕。
「バケモノとタタカウヒロイン……マケテシマッテ、ソノバケモノニ、アラレモナイスガタニ……イイデスネ」

とわけのわからないことを言い残し去っていった。
僕たちはそのときキョトンとした。
（この人何言ってんの？）
（この人……）

「おはよう、茜」
「おはよう」
と美和子が話しかけてきた
「ねぇ知ってる？　今日うちのクラス留学生くるらしいよ」
「本当？どんな？」
「ものすごいイケメンとしか聞いてない」
「そう」
そして朝のホームルーム
「おはようございます。今日はまずこの人を紹介しましょうブライアント・グラス
くんです。今日から1年この学校で勉強してもらいます。みんな仲良くしてね」
と担任が紹介した後、
「ドウモ、ショウカイサレタ、ブライアントグラスデス。ヨロシクオネガイシマス」
とたどたどしい日本語で自己紹介した
（げっ！　さっきの……）
「きゃ～」
「かっこいい～」
「背高い～」
と女子の視線はその男に釘付けになった。

「席は……」
周りを見渡すグラスそして私を見るなり
「アナタハサッキノ！！」
「……」
うつむく私。
「本郷さん知り合い？」
と先生に聞かれ
「いや」
と否定した。
「ならグラスくんは間柴くんと本郷さんの間の席にお願いします」
と私の隣になった。
（まぁいっか……少しは英語の勉強になりそうだし）
と思った私だった。しかしそれが甘い考えだったと痛感するまでは
そう時間
はかからなかった。

「アナタコソヤマトナデシコマサニハッポウビジン！！」
（八方美人って……意味分かってんのかな？）
「アカネサ～ンコレナントイウンデスカ？」
「これは虫っていうの」
（そっかわかんないんだもんね）
と次から次へと質問攻めに会う。
そして1時間目が終わった。
「は～」
「疲れた。1時間目古典だんなんて、しかも漢文だし。ずっと彼の

質問に答える
のに精一杯だったよ。後でノートか」
「アカネサ～ン」
とグラスは私をものすごいスピードで私のもとへきた。
「ちょっと、なに？」
「アサ、イッショニガッコウニイッテタヒトコイビトナンデスカ？」
と唐突に聞かれ私はすごい動揺した。
「そそそそそ、そんなんじゃないわよ。ただの幼なじみなの！」
「オサナナジミ！！　イイヒビキデス。ソレニオサナナジミトイエバモエキャラノヒトツ。ツンデレ、イモウトキャラニ、オネエサンキャラナドナド・・・。アカネサンハ、ドレニハイリマスカ？」
「う～ん茜の場合はツンデレかな？」
と美和子が答える。
「ちょっと何答えてんのよ？」
「ツンデレデスカ～ボクノイチバンスキナオサナナジミキャラデス」
「知らないわよそんなこと」
私は顔から火が出そうなほど恥ずかしかった。その恥ずかしさのあまり見事に背負い投げを決めてしまった。
「ア……カ……ネ……サ……ン」
とグラスは気絶し、保健室へと運ばれた。
（あ！　やっちゃった……）
としまったと思った。
（日本についてどんなことを勉強してきたんだろう……）
と心配になる私であった。

そして2時間目の途中に戻ってきた。
「大丈夫？　大丈夫？」
と彼をいたわる女子たち。そんな女子達の目線が痛かった。

その時私は彼の顔を見ることができなかったが、彼は私の方へ近づいてきた。
恐る恐る顔を上げてみるとそこにはまるでキレイなものをみるように目を輝かせた
彼があった
「ん？！」
（なに？　その目！）
「ボクハ、アナタニホレマシタ！！」
「お～」
と歓声が上がった
「え？　急にそんなこと言われても……」
突然の告白に私はびっくりした。
彼は目を輝かせてまるで無垢な少年のようだった。
「わかったから落ち着いて、ね」
それでなんとか収拾がついた。
「ふ～」

そして昼休み
「お疲れ様」
「は～」
「たく休み時間中追いかけて来るんだもん。イヤでも疲れるわよしかも……」
とため息交じりでクラスの人たちと話していた。
「アカネサンッテオナニースルンデスカ？　ヤッパリ、アサイッショニキテタヒト
ト、ヤッテルトコロヲソウゾウシテ？」

（朝のといいなんなの？　この人）
「とか言ってくるのよ。ねぇ？あの人を受け入れている人って誰なの？」
「あぁそれは、長瀬だよ」
と上田君がいった。
「長瀬か……だろうな」
「ああなるのも無理ないわね」
と森野さんは納得した。
「いいな～神の家か」
と上田がうらやましがる。
「うらやましがらない！！」
「どういうこと？長瀬くんって結構真面目だよ？」
私は首をかしげた。
「長瀬諒（ながせりょう）。ふだんは地味であまり目立たないが、彼にはもう一つの裏の顔があるの」
「なに？」
「またの名をホワイトゴッドと呼び、男子に絶大な人気を誇る。由来は彼はどういうわけか家にはＡＶやエロゲー、エロ本なんでもそろってる。それを貸してくれたり、くれたりするんだ。たぶんグラスくんもその影響をモロに受けたんだと思う。いままでの言動もコレで説明がつく」
「なによそれ……」
「アカネサ～ン」
「また来た！　今度はなに？」
と走る私。そして三組の教室が目に入り、とっさに入った
「龍二！！　なんとかしなさい！！」
「え？」
と茜は僕の後ろに隠れた
それは、今朝見た大きな化け物いや外国人だった。
「アカネサ～ン」

「やめてよ？　茜がイヤがってるでしょ？」
「タダボクハ……」
「は～」
僕は一つ息を吐いて
「あのね？　君、茜のことを好きなのはわかる。だけど相手の気持ちも考えないで自分の気持ちだけでアプローチしたっていまくいかないよ？」
「ソウデシタカ」
と少ししょげるグラス。
「茜も茜だよ？　この人のいうことも少しは聞いてあげないと、最初から逃げてばかりだとこの人がかわいそうだよ」
「だって」
そう言いながら茜は不服そうな顔をする。
「だってじゃない。ちゃんと聞いてあげるんだよ？　いい？」
と僕はさとすようにいった。
（龍二……）
（あ～僕のバカバカバカ！！！　なに告白促してんだよ！！）
「アカネサン」
（きっと告白だ……こんなにカッコイイだ。きっとＯＫするだろうな）
（なに言われるの？）
見つめあう茜とグラス。緊張の一瞬……

「コノボク、ブライアント・グラスヲデシニシテクダサイ」
「え？」
「イヤ、レストタイムニ、ボクニカケタワザナンデスカ？　カンドウシマシタ！！」
朝のことを思い出す茜。
「なにかしたの？」
と僕が聞くと

「なんでもないわよ」
ひじ打ちされた。
こうして僕たちの学校にグラス君がやってきたのだ。

第9話　カンドウシマシタ！！（後書き）

僕のクラスにはまだなじめないクラスメートがいた
次回、知らないで連れてきたのか？　お前
どっかで見たことあるような……

第１０話　知らないで連れてきたのか？　お前（前書き）

ベタ恋企画第２弾作品ゴメンねの元ネタです。
てか同じ話です（汗）

第１０話　知らないで連れてきたのか？　お前

この日もいつも通り登校していた。すると校門のとこに髪の長いかわいい女の子が立っていた。
（あの制服はルドルフ学園の）
ずっと校舎の方を見ていた
「どうしたんですか？」
と声をかけると
「あの大道信虎っていうひとこの学校に」
「はい。いますよ。僕のクラスに。それがどうしたんですか？」
「いやなんでもないです」
といって足早に去っていった。
（なにしにきたんだろう？）

昼休み
「大道、へ～買ったんだ？」
「あ、うん」
「よくそんなん買うよな？　好きなのか？　けっこう金かかるんだろ？　それって」
（話しかけてくれた）
大道君は嬉しそうに口を開いた。
「まぁそういうやつもあるけど」
「村内、お前そんなに興味あんのか？　気持ち悪い」
「なわけねえだろ？　あ！」
としまったという顔で大道君をみる村内君。
うつむいてこういった

「ゴメン用事があるから。うるさいから教室でよっか？　くるみちゃん」
と悲しそうに大道くんは教室から出て行った
（は～また自分の殻に入っちゃったよ……）

そう僕のクラスには未だにクラスメートのみんなに
なじめない人がいる。それは大道信虎くん。出席番号3番
いわいるオタクって人である。村内君が見せろっていってたのは
くるみちゃんのフィギアである。くるみちゃんとは今大人気
のアニメのヒロインである。もともとアダルトゲームのヒロイン
でオタクの間ではその時からメジャーになっていたが、アニメ化さ
れて一気に
一般の人たちにも人気に火がついた格好となった。
いつもこんな風に話をかけてはいるが、一言二言返事してあとはフ
ィギアとしか話さない。
そんな彼に僕たちは手を焼いている。
「おい！二川ジャマしてんじゃねえよ！！珍しく好感触だったのに」
「まただね」
「誰のせいだよ？」
「いつもあ～だもんな」
「私あの人苦手。キモいし」
「でもなんとかしないと・・・」
「そうね、私達のクラスメートだし」
と僕たちは話し合った

僕の名前は大道信虎。小さい頃からアニメやゲームが好きでずっと夢中になっていました。
おおきくなっていくに連れて周りもいつの間に避けられていました。
そして中学2年の時
衝撃的なことを言われたのです。

それはある日忘れ物を取りに教室に戻ったときのこと
何人か教室に残っていたのです。
「なぁ大道、きもくねぇ～」
「うんうん、すげーオタクだし」
「この間さ、あいつと話してたらさ、俺まで白い目で見られてよまいったぜ」
と小さい頃からの友達の望くんの言葉でした。
すごいショックでした。それに追い討ちをかけるように
「小倉？大道お前のこと好きらしいぜ？」
「十分あるぜ。だって唯一の女友達だもんな」
「木根くん？それは冗談でもやめてよね。ゾッとしちゃったじゃない」
「あんな薄気味悪い人から告白されたら・・・いや想像しただけでも気持ち悪い」
「誰だってそうだよ」
「すげー小倉鳥肌立ってんじゃん！！」
「フッたら呪われそうじゃない？」

「ハハハハ。ありえるぜ。夜な夜なうなされるみたいな」
「ちょっと」
ちらっと廊下を見る小倉。
（信虎くん！！……）
と好きな子からあんなこと言われたのです。その時僕は必死に走りました。そういままで仕方なく付き合ってたのです。
所詮オタクは普通世界から排除される存在と悟りました。
それからはフィギアにしか話さないようにしました。それが一番傷つかずにすむから……
「みんな、表面だけでしか付き合わない、腹の底では……僕をわかってくれるのは
くるみちゃん、君だけだよ」
と屋上でグラウンドを見ながら大道はそういった。

放課後部活も終わり茜と一緒に帰っていると今朝の女の人がたっていた。
「あっ今朝の」
「ちょっとお話が」
と女の人が言った
僕たちは喫茶店にいった
「話ってなに？」
「実は信虎くんに私あやまりたいんです」
といきなり大きな声をだした
「どうしたんですか？いきなり。それに謝るって何を？」
「実は……」
と中学のことを話す小倉。
「そっか。それでか。実は１０月になっても大道君クラスになじめ

てないんだ」
「そうなんですか…・・」
「なじめるようにするにはどうすればいいかな？」
「それなら自分も同じ目線で付き合ってみるのはどうだ？」
「同じ目線ね？……って斉藤さん！！！！　なんでここにいるんですか？」
「細かいことは気にしない。しっかしお前も水臭いな。そんな相談ならいつでも
乗ってやるのに」
肩を寄せられた僕
「暑苦しい……離れてください！！」
と必死に僕は斉藤つき離した。
「う～ん……オタクとか関係なく誠心誠意を持って接する。それが1番！！」
とどこかから聞き覚えのある声が聞こえた
「結構難しいよ？　それ……伊織さん！！なんでここに？」
「気づかなかったの？私、ずっとここにいたのよ」
と伊織は腕組みをしてきた
「そうですか」
「それどうでもいいけど、会長くっ付きすぎはなれてください」
と茜がもすごい剣幕で僕と伊織につめよった。
「そうだ！　抜け駆けは許さんぞ！！」
（斉藤さん……）
と苦笑いを浮かべる僕。
「一度遊んでみるのは？　このケーキおいしい～」
「いいアイディアだね。遥ちゃんじゃない！！！」
「あれ？　先輩たちなんで私の家に？」
「え！　ここ遥ちゃんちなの？この喫茶店」
と驚く茜
「喫茶店？」

と首をかしげる遥。そして外にでてみる。
「あ！ホントだ。あれ確かに私んちに向かってたんだけど」
と遥はいつも通りの方向オンチを炸裂した。
（普通わかるだろ……いつもどうやって家に帰ってんだろう？）
と不安をよぎった。
「難しいな……」
（その声は？……厳燐丸（げんりんまる）。ということは……）
「私はやはり自分から歩み寄らねば仲良くなれんと思うが」
「由良（ゆら）ちゃんまで！！　まだ登場すらしてないよね！！！」
「なにか問題でもあるのか？」
「もう……いいです」
と僕は諦めに似た感情を抱いた。
「そうだ！！彼、1週間後……」
と話し合うみんな。
「それだ！！」
「いいね。それ」
「でもうまくいくかな？」
「やってみないと」

翌日もその次の日ももみんなしつこく大道君に話しかけた。
しかしみんな惨敗……そしてまた教室をでていったそんな日が1週間続いたある日の放課後
「くるみちゃん？　今日もいい天気だね？　このまま寝ちゃいそうだよ」
「あっ！　いたいた。大道君」
「なんのようだい？」
ととげとげしい口調で大道くんがいった。

「何してんのかな？って思ってさ。いつもここで日向ぼっこしてたんだ」
「いこっか？　くるみちゃん」
「釣れないな～相変わらず。僕はいや僕たちはただ君と友達になりたいだけなのに」
「どうせ上辺だけだろ？腹の底ではきっと僕は気持ち悪いと近寄りたくないとか
思ってんだろ？」
「果たしてそれはどうかな？ちょっと来て欲しいとこがあるんだ？」
と僕は大道くんの手をひいて教室まで連れて行った
「ドア開けてごらん？」
と誘導する僕。大道君はドアを恐る恐る開けてみた
パーンパーン
パチパチパチ
「誕生日おめでとう！！！大道君」
「おめでとう大道」
とそこにはパーティー会場があった
「みんな……」
「実はさ今日が大道君の誕生日って知ってね。みんなでパーティーしよう
ってなってね」
「俺はさ、お前がなじめないのにパーティーやっても意味がないっていったんだけどな？」
と村内くんそういう言うと
「何言ってんだよ？　一番張り切ってたのはおまえじゃん」
「うるせ～」
と福川くんが突っ込む。
「村内君はね、いろいろと指揮してくれてセッティングしてたんだ？　いつもはふざけてばかりの福川くんだって、水島さんだって」
「この料理やケーキは全部、谷口が作ったんだぜ？調理実室つかっ

てな」
「みんなそれぞれ一生懸命このためにやってきたんだ。それでも上辺だけ
だと思う？」
「ありがとう。こんな僕のために」
「当たり前じゃねえかクラスメートだもん」
「僕、オタクだよ？」
「そんなの関係ねぇ～よ。それだけ夢中になれるものがあるってことだろ？」
「うらやましいな。私も夢中になれるもの見つかるかな？」
大友が関心するようにいうと
「なに言ってんだよ？もう見つけてんじゃねえか」
「なに？」
「福川くん」
と大道君がいった
「言われちゃった」
「ハハハハその調子だ。大道」

「はい。プレゼント」
とみんな大道君にプレゼントを渡す。
そして僕の番になった
「ちょっと待ってて」
と僕は教室の外にでた。
「大丈夫かな？ちゃんとできるかな？」
「できるよ？　そのために来たんでしょ？　それにこれがメインな

んだから勇気を出して」
とドアを開けその人の背中を押して教室にいれた。
その瞬間みんな一瞬の沈黙の後に驚きの大フィーバーが起こった。
一方大道君は一瞬にして顔色が変わりうつむいた。
「小倉智子じゃねえか」
「お前これはやりすぎなんじゃ？金結構かかんぞ？」
「そんなにすごい人なの？この人」
「たくいつもそういうのにうといんだからお前は！！」
と水島くんに言われた。
「去年ミスラガジンでグランプリとって今、くるみちゃんの声もやってる、今大人気のグラビアアイドルさ」
「へ～そうだったんだ」
「知らないで連れてきたのか？　お前」
「うん」
「お前な～……」
と呆れるみんな
「いや自分から言ってきたんだよ？ていうかこのパーティーも小倉さんが発案者
なんだ」
「そうなの？」
小倉さんは大道君の前に行った
「ゴメンね？大道君、いや信虎くん」
「謝られても」
「そうよね？心に深くついた傷は『ごめんなさい』一言じゃ治るはずもないわね」
「今更なに謝りにきてんだよ。帰れよ！！俺がこうなったのはお前のせいなんだから」
「大道が俺っていった！！」
と驚く福川
「そんなこと言わないでよ。小倉さんだって意を決してきてんだか

らさ」
となだめる僕
「そうよ。私のせい、全ては私のせい。私が素直になれなかったから……」
「どういことだよ？」
「あの時ね」

「なぁお前って好きな人とかいるのかよ？」
「いや」
そのときドキッとした
「そっか。」
とホッとしたのもつかの間
「大道とか？」
私はすごく動揺した。必死に見せまいと……
「・・・といってしまったのゴメンね。その結果あなたを傷つけることになってしまった。一生その傷は消えることはないだろうけど。謝っても謝りきれない。」
「もういいよ。そんな話聞いたっていまさらどうにもならないし」
「それを謝りにきたのともう一つ。お願いがあるの」
「なに？」
彼女は改まって
「大道信虎さん、私、あなたのことがずっと前から好きでした。付き合ってもらえませんか？」
「嘘！！！　大道がアイドルに……」
と福川が驚き
「これは夢だ。絶対に夢だ」
倉本が悔しがる。

「さぁ？どうする？アイドルからの告白だぞ？」
と村内が返事を促す。
「はい！！　よろこんで」
こうしてオタクとアイドルというオタクにとっては夢のようなカップル
が誕生した。そしてその日を境に彼どんどんクラスに溶け込んでいった

今では
「ここのクリアの仕方わかんないんだけど？」
「ああここね、みんなここで躓くんだよね。こうやってこことおってグラウンブレスをとって……」
「大道君？　智子ちゃんとどうなってんの？」
「あぁ昨日久しぶりに1日デートしたんだ？」
「まさか大道君からのろけ話きけるなんてね」
でも
「くるみちゃん、みんなが誘ってくれたんだ。一緒に行こうね？」
と相変わらずフィギアと話すことはやめなかった。
「彼女いるのにね」
「あぁ。でもあれがあいつだよ。あいつがフィギアと話さなくなったら
本気で心配するよおれ」
という福川くんに対して
「そうだね」

と僕はうなずいた。

第１０話　知らないで連れてきたのか？　お前（後書き）

夏休みが待ち遠しくなってきたころ、転校生がやってきた
次回、涼風由良だ。よろしく
またやっかいな……
次回は８月１５日なのだ。お～終戦記念日ですね＾＾

第１１話　涼風由良だ。よろしく（前書き）

１週間ぶりの更新です

第１１話　涼風由良だ。よろしく

期末テストも終わり、夏休みが待ちきれない日々を送っていた。そして部活が終わり外は街灯が灯っていた。僕は茜と一緒に帰っていた。

「ゴメン、茜忘れ物しちゃった。先帰ってて」

「何、やってんのよ。もう。気をつけて帰ってきなさいよ」

「はいはい」

と僕は再び学校に足を向けた。

「もう８時だ。空いてるかな？」

うちの学校は二十四時間空いているため８時以降は警備員が駐在する。

そしてその時間以降、たとえこの学校の生徒だろうと、手続きをしないと校舎には入れない。

手続きをすませ学校に入り

「これで、よしと」

無事忘れ物をとった……のだが

ピピピピピピピピ……

なにかのはずみで警報装置が作動したらしい。

「え？」

「くせ者！！！」

と女の人の声と

「こいつか」

と男の人の声がした。

「この不審者が！！！！成敗してくれる！！」

と何かを振りかざしてきたのを左によけた。

「か・・刀！！？」

「ちょっと、待ってよ。ただ僕は忘れ物をひぃ～」

と説明をしようとするが相手は聞く耳持たないらしい。

「問答無用！！　そんな嘘にだまされんぞ！！」
と刀を振りましてきた。
僕は逃げ回った。当然のことだ。
「なんなんだよ一体？　君は？」
「ちょっと待て。本当に忘れ物を取りに来たのかもしれん」
「しかし……」
「事務室で確認すればよかろう？」
「お前、あいつの言うことを鵜呑みにするのか？」
「誰も鵜呑みにしてはない。可能性の話をしているのだ」
「待て～！！」
「そんなんできるわけないよ……」
そんなわけで僕は命からがら学校を後にしたのである。
（なんだったんだろう？）

翌日
「どうだ？　銀法高校は」
「やっぱり夜とは違うな」
「それはそうだろう」
「強い人いるかの～？」
「さぁな」
と高校の前に誰かと話す髪を後ろに束ねた凛とした顔立ちの女の人が立っていた。
「ちょっとお前はここで待っていろ」
とその女の人は持っていた刀を校門において心を躍らせるように校内に入っていった。
「ちょっと待て！！俺を置いていくな～！！」
「すぐ戻る」

数分後
「日本刀？」
と首をかしげる茜
「なんだろう？これ」
と僕が持つと
「おい！勝手にさわるでない！！」
「すいません！！」
と僕はびっくりして思わず落としてしまった。一瞬聞き覚えのある声に聞こえた。
「何？どうしたの？いきなり謝って」
「え？今声が聞こえたんだけど？」
「いや。全然」
と僕はどこからか男の人の声が聞こえた。
（気のせいか）
「痛い！！」
とまたどこからか声が聞えた。その声の発生元は刀であった
「たく俺置いてどこいったんだ？」
「か……か……刀がしゃべった！！！」
と驚く僕。そしてまた僕はその刀を手にした。
「何バカなこと言ってんのよ？いくよ」
と歩く茜。
「若いの、俺の声が聞こえるのか？」
「はい。ばっちり」
と僕は答えた。
「ちょっとなにやってんのよ？早くしないと遅れるよ」
と腕を引っ張られて強引に学校に入った。
「わ～」
というわけでそのまま僕は教室に刀をもってきてしまった。

（結局これ持ってきちゃったけど大丈夫かな？）
「なんだ？それ」
と倉本が聞いた。
「校門にあったのを、つい持ってきちゃった」
とぼくはそう言って頭をかいた。
「大丈夫なのか？」
「たぶん……」
自信なさそうに僕は答えた。
「それよりさ、今日転校生が来るんだってよ？　このクラスに」
「え？もうすぐ夏休みなのに？」
「だな」
「ねぇどんな人かとか聞いてない？」
「女子だとしか」
「そう」
「よ～し。みんな席に着け。ホームルーム始めるぞ」
そしてみんなそそくさと席に着く。
「今日は転入生を紹介する。涼風由良さんだ。」
「涼風（すずかぜ）由良（ゆら）だ。よろしく」
「う～ん」
倉本は腕組みをして何やら考え込んでいた。
「何考えてんの？」
「D、いやEだ！！」
「は？何言ってるんだよ？」
「胸の大きさ」
「凛々しい顔してアノ胸の大きさというギャップがそそるね」
「あのね……」
僕は彼に何もいえなかった。
「由良～！！！」
「ちょっと！！　いきなり大きな声出さないでよ！！」
「すまん……」

と僕は思わず刀に怒鳴った。
「龍二、どうした？」
「いや、なんでもない」
「アノ人が君の持ち主なの？」
「ああ。俺のなくてはならない相棒だ」
「わかった。それなら早く返さないと」
と立ち上がり由良ちゃんの所に向かう。しかし
「キャー！！　カッコイイ！！」
と黄色い悲鳴と
「うお～」
と汗臭い雄たけびが教室を埋め尽くした
どうやら彼女の凛とした態度がクラスの女子の一部と男子全員を瞬く間に虜にしたようだ。
そして一斉にみんなが駆け寄ってきた。結局近づけず、返すことができなかった。
「趣味はなんですか？」
「なんでここにくることになったの？」
「家はどこ？」
「由良様と呼ばせて頂いてもよろしいですか！！」
「ねぇ何カップ？」
「うっ……」
とまるで疑惑が浮上した芸能人のように質問攻めにあい、戸惑う由良。
「ちょっと、みんな！！」
「落ち着いて？みんな」
となだめようとする僕と水島さん。
（あいつさえいれば……）
授業前、みんな席についていた。
（みんな席ついてるし、いまだな）
と僕は刀を持って彼女のところに行く。

「あの……」
「なんだ？」
「僕、谷口龍二。よろしくね」
「それで、なんのようだ？」
「あの……これなんだけど。」
僕は申し訳なさそうに刀を出した。
「これは！！」
しかし
「谷口、なに立っている？　授業始めるぞ」
タイミング悪く教師が来てしまった。
その後も休み時間
「おい！谷口、話があ」
と由良に呼ばれるも
「谷口君？ゴメンね。そのノート持って行くの手伝ってくれない？」
と教師に呼び出され
「わかりました。涼風さん？また後でね」
「ああ」
と返すチャンスはあったものの、ことごとく失敗し、昼休みになった。
そして僕たちは屋上にいた。
「ゴメンね、なかなか返せなくて」
「問題ない。別に気にしてはいない。タイミングが悪いだけだ。」
「そういや君にも名前あるの？名刀なんとかみたいな」
「ああ、俺は彦屋敷厳燐丸（ひこやしきげんりんまる）だ。」
「へ～なんか人の名前みたい」
「もともと俺は立派な剣士になるはずだった。だが、大きな戦乱の中で朽ち果てた一人だ。想いも告げれずにな。それで未練を残してこの世に居座っちまった」
「どういうこと？」
「浮遊霊になっちまったんだよ。この刀に入ってるんだけどな」

「いままでは手にして、俺の声を聞いただけで飛んで逃げていった。そのため妖刀として恐れたれた。でも由良だけは違った。」

三年前
由良は一つの刀を手にした。
「久しぶりに持たれた」
（う……なんだこのやわらかい触感は）
「お、女だ！！？」
と動揺する厳燐丸。
「どうした？」
「ほう。これが、妖刀厳燐丸か」
と観察するように見回す由良。
「お、お前、お、女か？」
「そうだが。それが、どうした？」
「も、持つでない！女の持つものではない！！」
「こいつ、私をバカにしてるのか！！」
と由良は怒り出した。
「そ、そんなんじゃない。女に持た、れ……るのははじ、めてでな。べ、別に緊張してるわけではない」
とオドオドする厳燐丸。
「めちゃめちゃ緊張してるではないか。まぁいい。」
「俺のこと怖くないのか？」
「全然。こんな女ベタな刀初めてだ。女としてみてくれるのはありがたいが。」
と由良は笑った。そして
「なぁお前ずっとここに一人だったんだろう？」
「ああ」
「私も、ずっと一人だった。」

と由良が悲しそうな顔をした。
「そうだ！お前に女の免疫を付けるために私のものになるというのはどうだ？」
「そうだな。そろそろ身を固める時期だしな。刀だが」
「こうして俺は由良ものになったのだ。なぜこういう話になったのだろう？」
「さぁ」
「そろそろ、戻ろうか？」
「そうだな」
と立ち上がると
「谷口龍二～！！」
と由良が走ってきた。
「はぁ～はぁ～……や、やっと見つけた」
息を切らせながらそういった
「なに？　どうしたの？　あ～これか！」
と僕は思いだした。
「良かったね？　ちゃんと持ち主にのもとに帰れて」
「ああ」
その瞬間一瞬だけ由良は驚いた。
「お前に話しがある」
「なに？話って涼風さん」
「まず、その刀を返せ」
「あ、うん」
「お前、こいつの声が聞こえるのか？」
「まぁね」
「お願いだ、このこと秘密にしといてくれ。頼む！」
と勢いよくせまり、僕の両肩に手を置いてそういった。
「いいけど……」
と思わず僕は後ずさりをした。すると

「うわ～」
僕はバランスを崩し倒れてしまった。
「……」
「……」
両者顔を赤くした。
タイミングが良いのか悪いのか、茜がやってきた。
「なにやってんのよ！！」
「茜！！」
驚く僕。
「これは・・・違うんだ。」
「何が違うのよ！！」
「ひどいぞ！！俺というものがありながら！！こんな女の誘惑にのりよって！！」
と斉藤は泣いた。
「斉藤さん！！なんでいるんですか？」
「細かいことは気にするな」
「ほ～二股？モテる男は辛いね」
と伊織が関心した。
「伊織さんまで！！なんでここにいるんですか？」
「あら、気づかなかった？いつもここでお昼食べてるの」
「何言ってんだよ、伊織姉。いつもは生徒会室で食べてるじゃん。」
ボフッと倉本は伊織の肘鉄を食らった。
「倉本君！！」
「伊織姉が教えてくれてね。」
パシャパシャ
「何写真とっての！？」
「おお！この写真使えそうだ！」
人の質問におかまいなしの倉本。
「あら、みなさん。みんな学食で食べるんですか？」
といつもおとぼけ発言の遥

「遥ちゃん・・・？ここ屋上だよ？」
「うそ！！！　今回は自信あったのにな……」
遥は悔しがる。
「残念だったね」
と苦笑いを浮かべる僕。
「ところで、二人で何話してたの？」
「いや、それは……ね」
「何？言えないことなの？　だから昨日忘れ物とりに行って、変な人に襲われるのよ！」
「関係ないじゃん！！」
すると由良がいきなり刀をだして
「お前か！！！　昨日の不審者は！！　成敗してくれる！！」
「違うって！！　だから……」
「男が言い訳とは見苦しいぞ！！」
と追い回された。
後日わかったことだが、昨日の警報は誤作動だったようだ。

第１１話　涼風由良だ。よろしく（後書き）

由良が来てから一週間龍二のクラスでは思わぬ紛争（？）が・・・

次回もう！！！　みんないい加減にしてよ！！！

第１２話　もう！！！　みんないい加減にしてよ！！！（前書き）

やっと1クールあたりまでこれました
みなさんのおかげです

第１２話　もう！！！　みんないい加減にしてよ！！！

由良が来て一週間。その間教室は異様な雰囲気に包まれていた。
「教科書忘れた」
と彼女が発した言葉によって状況が一変。
「俺の見せてあげるよ」
「私のを使いくださいい」
「どうぞ」
「どうぞ」
と彼女の机には教科書が積みあがった。
またもや返せず、僕はそれを見て苦笑いを浮かべた。
「ありがたいが、一冊でいい」
隣の男子のを見ることになった。
倉本と西岡がにらみ合った。
（でかしたぞ）
（次は負けないから）
西岡とは西岡志穂（にしおかしほ）。倉本と小中高とずっと同じクラスの女子である。
事あるごとに二人は対立する。
そして二人いわくに犬猿の仲らしい。僕にはそう見えないが。

休み時間
「由良様、次は理科です。一緒に理科室へ移動いたしましょう」
とが聞いた
「別にいいが」
と返答する。
「待て待て！　は俺たちといく方が良いんだ」

と倉本がマッタをかけた。
またもや困惑する由良であった。
「何言ってるのよ？　私達がするの。女の子同士のほうが話が弾むし」
「そうです、そうです」
「そんなの関係ないだろ？」
「いいから行こう？」
「いきましょう？」
「あ、ああ」
と半ば強引に女子が由良を連れて行った。
（くそ！！負けた……）
「ねぇ？由良さん一緒にご飯食べようよ」
「何言ってんだよ！！涼風さんは俺たちと食べるんだ」
「何よ！！　どうせ胸目当てで仲良くなろうってんでしょ？」
「何だと！！！」
「だって由良さんを見る目がいやらしいんだもん。違う？」
「どこがどうそういう風に見えるんだよ」
とにらみ合う二人。
そして去っていく倉本に向かって西岡は消しゴムを投げつけた。
「何すんだよ！？」
「ゴメン手が滑った」
「なんだと」
とその消しゴムを投げつけ返した。しかし西岡には当たらず、別の女子に当たった。
「ひどい。大丈夫？」
その繰り返しでいろんなものが乱れ飛び全面戦争へと広がっていく始末。そしてその間に
「由良様今のうちに」
と由良を連れていく。
こんな風にこの一週間、僕のクラスは由良を慕うクラスの女子と男

子の間で涼風由良争奪戦が日々行われていた。
「というわけなんだけど？なんかいい方法ないかな」
僕は昼休み保健室に茜、伊織、遥、斉藤の四人を呼びだした。
「難しいわね……中立派は？」
と茜が聞いて来た。
「僕と水島さんの二人」
「なおみちゃんだけか。男子を龍二が説得して、女子をなおみちゃんが説得すれば？」
「茜？　そんなことできたらとっくにできてるよ」
「勝負をするとか」
と伊織が提案する。
「いいな、それ！！　それで俺は運命の人と出会ったわけだし」
その提案に激しく同意する斉藤。
「伊織さん？それはやめてください。この間、僕と斉藤さんの勝負のとき思いのほか生徒会がお金使って残り少ないって久本くん嘆いてましたよ？」
「大丈夫。いつものことだから。それにまだ余裕あるし」
「そういう問題じゃなくて」

「え～と保健室は……」
その頃遥は食堂の前にいた。
「あれ？保健室ってこんなに大きかったっけ？」
首をかしげる遥であった。

「先生、どう思います？」
「このままにしておくほうがいいんじゃない？」
「そんな」
「下手に入っていったら、余計にあおりかねないでしょ？」
「それは、そうだけど。でもまたいつ爆発するか……」
「そのときは、そのときでなんとかすればいいし。まぁ今は余計な刺激を与えないことね」

その頃由良たちは屋上にいた。
「なぁ私どうすれば良いんだ？」
「わからん。お前にはいいんじゃないか？」
「どういう意味だ？」
「さぁな」
と由良は厳燐丸に聞いてみる。
「ここにいたんだ？」
僕は保健室の作戦会議を終えなんとなく屋上に来て見た。
「谷口龍二！！」
「すまんな」
「何が？」
「クラスをめちゃめちゃにしてしまって」
「全然気にしてないって。こっちこそゴメンね。こんなのに巻き込んじゃって」
「だって、私が来てからというものずっとケンカばっかりではないか。しかもすべて私が原因。私……来るべきではなかったのか？」
「そんなことないよ？　考えすぎだって。そんなに自分を責めない

でよ。涼風さんが悪いんじゃないんだし。一時的にフィーバーしてるだけ。度は越えてるけどね」
「俺もそう思う」
と慰める僕。
「そうか？」
「そうだよ！」
と僕が力強く答えた。すると
「たくっ私をおもちゃにしよってけしからん」
どうやら由良は元気を取り戻したようだ。
「ちょっとトイレ」
と席を外す由良。
「あいつはいままでほとんど人とまともに付き合ったことがない。前の学校も、その前の学校もずっと一人でいた。初めてだ、あいつに人がこんなに寄ってくることは。だから戸惑っているのだ。まあいつにとってはいい経験だがな」
由良が戻ってきて
「何を2人で話してたんだ？」
「さぁな」
と厳燐丸が答える。
「もどろうか？」
「ああ」
そして3人で教室に戻ると全面戦争が勃発していた。
「みんな落ち着いて、投げないで！　痛っ」
「どうしたの？」
「放課後どうするかでまたケンカしてるの」
となおみが説明した。
「由良様は、放課後は私たちとフィンフェクトに行くの！」
※フェンフェクトとは放課後女の子の間で人気のスイーツのお店。
「いや、由良ちゃんは俺たちとカラオケに行くんだ！お前ら昨日、一緒にどっかいってたじゃねえか？」

「あんたみたいな野蛮人に由良様は渡さないわ」
「どこがだよ！！」
「変な写真ばっかり取ってるくせに。それに伊織お姉ちゃんいつもいじめるし」
「なんだと！！　そんなの関係ないだろう」
といがみ合う倉本と西岡。
「由良様は私達といきますよね？」
「由良ちゃん？もちろん俺たちといくよな？」
「いや私達とよ！」
「いや俺たちとだ！」
そんな口論に僕はついにしびれを切らし
「もう！！！　みんないい加減にしてよ！！！」
と怒鳴ってしまった。一瞬にして沈黙した。
「仲良くなりたいのはわかるけど、ケンカしたって意味無いでしょ。それに涼風さん、戸惑ってるじゃない！涼風さんまだ来て一週間しかたってないんだよ？そんなに慣れてないのに、あれやこれやケンカしてたら余計になじめにくいに決まってるでしょ！！　お互いに主張しすぎ！！　なにをするかは涼風さんが決めるんだよ？　仲良くなりたいならお互い涼風さんの話も聞かなきゃ」
「そうだな」
「そうね」
2人は納得したようだ。
「由良様、どちらがいいですか？」
「由良ちゃんどっちがいい？」
「え、その……両方」
と照れを隠すように小声で言う由良。
なんとか収拾がついた……と思ったのだが
「私達が先ですよね？もちろん」
「いや俺たちが先だ！」
「いや私達が先よ」

「いや俺たちだ」
とまたにらみ合う倉本と西岡。
当分この対立は続きそうだ。

第１２話　もう！！！　みんないい加減にしてよ！！！（後書き）

ついにインターハイが間近に迫ってきた。しかし斉藤はスランプに陥っていた。果たしてその原因とは……

次回　あんな恥ずかしいことできなよ……

やべぇ～ストックがもうない！！

第１３話　あんな恥ずかしいことできなよ……（前書き）

何と１クール！！
それにユークス１６０００人突破本当にありがとうございます！

第13話　あんな恥ずかしいことできなよ……

夏休みに入って僕は倉本たちの手伝いとして柔道場に駆り出された。
「うりゃー」
「セイヤー！！」
と大きな声が木魂する。
「休憩！！」
「はい」
とみんなどこかの軍隊のような返事する。
「すごいね」
僕は稽古の風景に圧倒されて
「うん。なんか漢(おとこ)って感じ……」
茜も顔が引きつってうなずいていた。
「なぜ私はこんなの見学しなきゃならんのだ」
「何を言っておるか！！　由良。柔道というもの武士道の一つ。剣の道にも通ずるところもあるはずだ」
嫌がる由良に説教をする厳燐丸。
「なんか練習に熱入ってますね？」
「それもそうだよ。もうすぐインターハイなんだから」
パシャパシャと写真を撮りながら答える倉本。
「誰か出るんですか？」
と遥が尋ねる。
「斉藤さんじゃないの？」
「その通り。他にも三人でるんだ」
と伊織ははりきって答える。
ふと僕は斉藤さんを見てみると
はぁ～と何度もため息をつき、深刻な顔している。
「なんか斉藤さん元気ないね」
「よくわかんないけどスランプらしい」

「どういうこと？」
「練習も最近やる気がないというか力が出ないみたいで、この間の練習試合だって
格下相手に負けちゃったんだ」
「お！　来てたのか？　しっかり見学してろよ」
「はい」
どこか浮かない顔が印象的だった。

数日後
「斉藤さんが変？」
「ええ、そうなんです」
と部活が終わった後、神妙な面持ちで語るのは柔道部の副部長、光（み）瀬和太雷（つせわたらい）。
そして続ける。
「最近ずっと浮かない顔で取材のときでも見てくれたように部活もあんな感じだし……」
「まぁ確かに前よりもやつれた感じはあったわね」
と取材の時の感想を言う伊織。
「それに見たんです。斉藤さんがちっちゃい女の子と一緒にフィッシュロードに入って行くところを」
「フィッシュロードだって！！？」
「フィッシュロードですか？」
「フィッシュロードって、あの！！」
と僕と遥、茜がさらに驚く。
「フィッシュロードってなんなのだ？」
もちろん来たばかりの由良は知らない。
フィッシュロードとは風俗店やラブホテルが立ち並ぶ通り。
そのことを由良に説明すると
「いかがわしい！！」

と一蹴した。
「お願いです！！　その原因を突き止め元の斉藤さんに戻してください！！　このままだインターハイ三連覇どころか一回戦で負けてしまいます。そうなると斉藤さんの夢そして僕たちの夢が潰えてしまいます。斉藤さんに憧れて入ってきたという人も少なくありません。僕もその一人です。人一倍練習熱心でたくさん努力してきたのに今のままじゃ確実に後悔するのが目に見えています。そんな姿ではなく彼の三連覇をこの目でみたいんです。僕だけじゃなく柔道部みんなも。だからお願いです！」
と懇願する光瀬。
「わかった。わかったから落ち着いて」
「そんなに熱くならなくても……でも斉藤さんを少し見直しました」
「その気持ちよくわかります」
「なかなかいい仲間を持ったではないのか斉藤は」
と茜、僕、遥、由良、が感心した。
「仕方ない。調べようよ。伊織ねぇ～」
「そうね。いいネタが入りそうだしね」
「伊織ねぇ～またこの前みたいに行きすぎた行動は止めてね」
と倉本が伊織にくぎを刺す。
というわけで斉藤の身辺調査が始まった。

翌日
部活の終わりの時間。インターハイが近いため日も暮れるまで練習をしていた。
みんなで体育館から出てきた斉藤の後をつけた。
「いい？　くれぐれも見つからないように」
と尾行する前に倉本がみんなに注意する。
「わかってる。わかってる」

そしてどんどん尾行していき、一番の繁華街銀法通りについた。
「よし。ここからよ。いい？　見失わないように」
と伊織が注意を促す。
「うん」
その時だった。
「みんな！！　あれ！！」
と大声で指をさす倉本。
「うそ！！　そんな……」
驚きの表情を隠せない伊織。
「え～！！？」
「ウソ～！！」
「本当に斉藤さんなんですか～！！？　あれ？」
「信じられん」
「想像できた気もするけど……」
と僕と茜と遥と由良は一往に驚いた。
そこには１４０ｃｍもないちっちゃい女の子と斉藤がそこを歩いていた。

斉藤（ターゲット）はというと少女と接触中。その会話まで聞こえる。
なぜなら取材中に伊織が
「頑張ってね」
「お、おう」
と肩をたき、超小型の盗聴器を仕掛けたからだ。この時点で犯罪なのだが……気にしないでおこう。
さて会話内容を聞くことにした。
「え～今日もやるの？」
と少女が怪訝な表情。

「仕方ないだろう？　自分でも昨日言ってたじゃん。明日もやるって」
「あんな恥ずかしいことできなよ……」
と不満そうな少女。
「俺だって腰が痛いんだからな」
そんなこと言う少女に反論した。
「それは明があんなに激しく動くからでしょ？」
「それより昨日は気持ち良かっただろう？」
「そうね。今日もお願いよ」
「それはお前次第だな」
「なによ、もう」
内容を聞いた僕たちは
「やるって！！？」
「恥ずかしいことって一体どんな……」
「腰が痛くなるほど激しく動いたって？」
「気持ちいいこと！！？」
と倉本、遥、由良、僕はソレを連想させるような言葉を聞き口をパクパクさせた。
「間違いないわ」
と断定する伊織に
「このままだと犯罪者になっちゃいます」
とアタフタする遥。
（いやもうなってるから……）
とそんな遥を僕は心の中で突っ込みをいれつつ
「とにかく少女が危ない！！」
といたたまれなくなったの僕たちは斉藤の所に駆け寄る。
「斉藤そこまでだ！！」
「そんなのダメですぅ～いくらスランプだからって小学生に手を出すなんて……」
「本当に最低なやつなんだから」

「ＢＬの次は幼女か。キリがないね～君は」
と由良、遥、伊織、茜が罵声を浴びせる。
そんな彼女たちにキョトンとする斉藤と女の子。
「え？　小学生？　幼女？」
と女の子の顔を見る斉藤。
「ハハハハハ。小学生だって、幼女だとよ。ハハハハ。あ～腹痛て～」
笑う斉藤の横でお餅のように頬を膨らませて怒る女の子。
「そんなに笑わなくていいでしょ？　明」
「ごめん。ごめん」
「どういうことですか？」
みんな状況がつかめないので僕が聞いてみた。
「紹介するよ。従姉の稲村恵子（いなむらけいこ）。こう見えても２６歳だから。それに俺は谷口一筋だから心配するな」
と誇らしげな斉藤。
「そうですか……」
苦笑いを浮かべる僕。
「でさっき話してたことは？」
「それは、くればわかる」
と斉藤に僕たちも連れて行かれた。
フィッシュロードに入り
「はじめまして。あなたちって明のお友達？」
「まぁそうですけど」
「そうなんだ？　あなたにも友達いたんだ」
「ひでぇ～よ。そんな言い方」
「こいつ小さいころは人見知りでな、いつもわたしの後ろばっかついてくんの」
「いつの話をしてんだよ！！　恥ずかしい」
「柔道を始めてから、こいつみるみる変わっていった。明るくなって心も体も強くなって……まぁ暑苦しくなったけどね」

どこか遠くを見るような目でそう言った。
フィッシューロードに入りそんな会話をしていた。そのうちに目的地に着いたようだ。
「ここよ」
と恵子が指をさした。
そこにはライブハウスフィークルーブという看板が目に入る。
「ライブハウス？」
「ええ、実は私バンドやっててね。もちろん明もね」
「斉藤さんが？」
「ウソだろ？」
「ホントなんですか？」
「信じらんない……」
驚きを隠せない表情を見せる僕たち。
「恵子さんがムリヤリ参加させたんじゃないか？　こっちはインターハイが近いって言うのに」
「細かいことは気にしない」
話によると恵子がいきなり思い立ちムリヤリ斉藤を参加させたという。それで昨日と今日ここのライブハウスで演奏するため必死にほぼ寝ずに練習をさせられ部活にも身が入らなくなったということだ。なんというか不運である。
「恥ずかしいことって？」
「ああ、初めてたくさんの人の前で歌ったのが恥ずかしくって」
「そうだったですか」
「で斉藤さん？　なんで激しく動いたですか」
「オレギターでソロがあってね見せつけるためにたくさん動いただけ」
中に入り2人は準備を始めた。
巡り巡って斉藤さんたちの番になり素晴らしい演奏を披露してステ

ージを後にした。
「やっと終った」
と安堵の表情を見せる斉藤。
「まだまだ課題はたくさんあったわ。ということで明日からもみっちり練習ね」
と恵子がいうと
「そんな」
と崩れ落ちる斉藤。
その後も恵子の監視の下(もと)バンド練習は続いたという。

そんな中入ったインターハイ。
「ほとんど練習してないのにここまで来れるとは思いませんでしたよ」
と興奮する光瀬。
斉藤は3連覇まであと1つまで来ていた。つまり決勝だ。そして決勝が始まった。
開始10秒で体落としを決められ技ありの相手にポイントが入ってしまう。3連覇のためには1本とるしかない。もう試合時間は半分過ぎていた。どんどん焦る斉藤。それでも時間は過ぎていくばかりだ。試合は降着状態。というよりも相手が守りに入っていて技をかけても相手はかわすばかり。試合時間は1分を切り絶望的だった。しかし残り27秒一瞬のすきをつき小外刈りが決まり1本勝ちで大逆転優勝をおさめ斉藤はは見事に3連覇の偉業なしとげた。
(やっぱりすごい)
斉藤のすごさを改めて感じた数日間であった。

第13話　あんな恥ずかしいことできなよ……（後書き）

次回は番外編
2クール目に入ったこの作品。
この先どうすればいいのだろう
次回、未定
ストックねー！！

第１４話　路線変更をしてみたらどうだ？（前書き）

番外編です
２クール目からもよろしくお願いします

第１４話　路線変更をしてみたらどうだ？

「ちょっと！！　いままで書いてたやつじゃないじゃないの！！」
と茜は怒りだす。
「仕方ないじゃない。まだ次の話ができてないんだし」
と僕がなだめる。
「そうなのか？」
と質問する由良。
「そうなんだよ。それにこれから今後に向けて大事な話し合いをするんだから」
「話し合いって何ですか？」
と遥は首をかしげる。
「そうだよ。６月から連載してきたこの気弱な僕の強気な生活（仮）ついに２クール目に入りました。ついにユニーク総数も１万７千人突破（２００８年８月２９日現在）して勢いに乗っています。そこで今回はもっと盛り上がるためどうすればいいかをみんなで考えたいと思います」
「はい」
と勢いよく手を挙げる斎藤。
「はい。斉藤さん」
「路線変更をしてみたらどうだ？」
「どういうことですか？」
「つまりこういうことだ」

ある日俺は恋をした……
あの時まではただのイラつく気弱なもやしっこだったのに……あいつと関わるたびにものすごい弱くて、頼りなくて、オドオドしてて

いらつく。でも誰よりも強くて、頼りになるやつで優しい。いつもこいつのペースに巻き込まれる。
なぜだろう？　あいつを考えるだけで胸がいっぱいになり何も考えられなくなる。
あいつばかりを見てしまう。

ぼくはある日恋をした……
あの時まではものすごい怖い人だったのに……
あの人と関わるたびに、怖くて、暑苦しくて、ウザい。でも誰よりも不器用だけどおおきて、広くて温かい。
なぜだろう？　あの人を考えるだけで胸が苦しくなる
あの人のことばかり思い出しちゃう…

そうやって2人は禁断の花園へ入っていく……イジメラレっ子と体は大きいけどとても優しい男の子が織りなす禁断の純愛ラブストーリー弱気な僕の強気な生活（仮）好評連載中

「てのに変えていくのはどうだ？　きっと女性読者は増えるぞ」
と自信満々に親指を立てた。
「却下」
「却下だ」
「却下ね」
「却下ですね」
「却下に決まってんじゃない」
一往にみんな否定する。
「なぜだ！！！　なぜなんだ！！？　」
と斎藤は大げさに落胆する。
「完璧に趣味に走ってますよね！！？」

「いやそんなことないぞ？　もっと女性の読者をだ」
「まず、気持ち悪い。だいたいその系統は一部の人にしか受けませんよ。よって却下です」
と説明する僕。
「そうか……」
と大げさに肩を落とす。
「斉藤君は趣味に走るからいけないのよ」
と伊織が口を開く。
「ほう？　では明神いい案はあるのならぜひ聞かせてもらおうか？」
伊織の言葉に不満を持ったのか斎藤は好戦的な口調になった。

そこは麻薬密売組織。そう私たちは大物政治家が関与しているという情報が入りこの潜入取材を命じられたのだ。
壮絶な現場。死といつも隣り合わせ。
果たして私たちは取材は成功するのか？
ヘタレ新人社員と敏腕女性記者が送るガンアクション満載のハードボイルドストーリー気弱な僕の強気な生活（仮）好評連載中。

「てのはどう？」
と提案する伊織。
「めちゃめちゃ世界観変わってるよ！！」
と僕はツッコむ。
「いけない？　題名とぴったりじゃない」
と悪びれた様子もなく答えた。
「ぴったりじゃありません！！　全然！　これは、基本ラブコメディーです！！　どこから拳銃とか出てきたんですか！！？　いきな

り世界観がかわりすぎると読者が混乱します」
「ほら某軍隊の子がとあることから女の子を守ることになった話あるじゃない？　あれみたいに兵器や武器を使って非常識な行動みたいな感じでやればラブコメは変わらないわよ」
と反論する伊織。
「パクリです！！」
「それならこれは？」
「却下の方向でお願いします」
「そう」
と伊織はため息をついた。
「これならどうでしょう？」
とおずおずと遥が手を挙げた。

私の名前は宮内遥ごく普通の高校生。でも私には秘密があるの。それは……

ボーンボーンという爆発音で街の建物が壊されていく。
「また街が攻撃されてるよ！！　遥」
と私の相棒、魔法獣のクルが私に語りかける。クルは魔法獣だけど見た目は小鳥の姿なの
「わかったわ」
そして私は路地裏に隠れ
「ランク・ルー・ギランダー！！」
と唱え変身する。ピンクふりふりのスカートに胸には真っ赤なリボン右手にはステッキを持って戦う少女
そう私の秘密は世界の平和を守るために戦う魔法少女ハルカなの。
「やめなさい！！　これ以上街を壊させないわ！！」

「来たな？　魔法少女ハルカ！　今日こそお前の息の根を止めて、世界征服してやる」
という怪人
「そんなことさせない」
「果たしてそれはどうかな？」
怪人からは無数の触手が伸びてきてハルカを拘束し、身動きできないようにした。
「これで終わりだ！！」
と怪人の触手から何十万ボルトという電流が流れた。
「う～」
だんだん意識がもうろうとしていくハルカ。ハルカの絶体絶命のピンチ！！
そんなとき救世主が現れた。
「ハルカ！！！！」
という叫び声。その叫び声で朦朧としていた意識もなくしかけていた気力も取り戻した
それはクルだった。クルの口ばしでどんどん触手は切れていった。
「うわ～！！　なんだと！！」
拘束されていたハルカは解放された。一気に形勢逆転。
「いくわよ！！　クル！」
「ＯＫ」
クルは形をかえ巨大バズーカに変身した。
説明しよう魔法獣は魔法少女と一体化して武器になることができるのだ。
「愛のクラック砲発射！！」
巨大バズーカから出た炎は一気に怪人迫ってきた。
「まだ童貞だったのに～！！」
という最期の一言を残して怪人は儚くも散っていった。

こうしてまた世界の平和を守ったのであった。
少しドジで方向オンチな遥ちゃん。でもひとたび変われば魔法少女に大変身。
魔法少女ハルカ今日も元気に活動中！！

「というのはどうですか？」
「題名がもう変わってるよ！！」
「萌え～！！」
どういや斎藤は虜になったようだ
「これで決定だな！！」
と興奮する。
「いいかもしれないね。遥ちゃんそういうの似合いそうだし」
と冷静の僕は言った。
「本当ですか？」
と嬉しそうな遥。
（よしいままで出た案を整理してみよう。ＢＬ、ガンアクション、魔法少女と）
「他には？　ないかな？」
「時代ものにしてみるのはどうだ？」
と腕組みをする由良。

世は戦国時代。下剋上なんて当たり前。そんな中一人の女剣士がいた。
彼女の名は涼風由良。とても腕が立つ。別名風来坊の由良。彼女が戦乱を鎮めるべく

旅に出た。行くところ行くところ刺客と遭遇したり、村に入れてもらえなかったり。前途多難な旅となる。果たして戦乱を鎮め、平和にすることができるのか？
風来坊の由良好評連載中。

「ていうのはどうだ？」
「それも世界観が変わってるから難しいね。てかなんで路線変更説ばっかりなの？」
「そうか。いけないのか」
と由良はまた考え込む。
「茜はどう思う？」
とぼくは茜に聞いた。
「まぁベッタベタな感じだから大どんでん返しとかあったらおもしろいんじゃない。思いつかないけど」
「そっか。倉本君は？」
「特にないな」
「わかった」
「ということで第1回企画会議終了！！」

第１４話　路線変更をしてみたらどうだ？（後書き）

斉藤の出来ことから数日後龍二は映画のチケットを見つける
次回、だから一緒に行かない？
ぎりぎりだ・・・

第１５話　だから一緒に行かない？（前書き）

なんとユニーク２万の大台を突破！！
さて今回はものすごくエロいと思いますが気にしないでください（笑）

第15話　だから一緒に行かない？

斎藤の幼女淫行未遂事件（？）の数日後まったりとした夏休みを過ごしていた。
そんなときである。冷房をガンガンかけた部屋で見つけたものがある。
それは伊織が取材のお詫びとくれた映画のチケット。その後、斎藤の決闘や留学生のグラス、遥の追っかけなどで忙しく行けずにいた。
「今週末までか。よし」
と僕は立ち上がった。

向かった先は茜の部屋。
「あのさ」
とノックせずにはいると
「ちょっとやめてよ！！」
「いいじゃない」
と伊織が茜になにかを強要していた。しかも茜は半裸状態。
僕に気付いた茜は
「え？」
「え？　あの」
一瞬時が止まった。
あろうこと茜の姿をまじまじとみてしまった。
「なにみてんのよ！！　この変態！」
と茜の罵声といろんなものが飛んでくる。
その状況をお構いなしに
「ねぇ？　龍二君？　これ茜ちゃんの水着なんだけど似合うと思う？」

と白の清純なビキニを見せられた。
「え？　え～と……」
と突然聞かれうろたえる僕。
「もう、そんなこと聞かないで！！」
とドアをバタンと閉める。
「ごめんなさい！　と、とにかく後で話があるから僕の部屋に来て？」
（うわ～……誘いにくくなっちゃったよ……）
と肩を落とし自分の部屋へと戻った。

気まずいまま数時間経った。
（それにしても茜結構きれいだったな～……）
半裸姿の茜を思い出す。
「って何思いだしてんだよ！！」
「とにかく落ち着いて誘おう。とりあえずお茶を飲もう」
ぼくは立ち上がり台所へ向かった。階段を下りてるそのときだった。
「龍二？　そういえばさっき話しあるって言ってたじゃない？　話ってなんなの？」
と1階のほうから茜が聞いてきたため、それに気を取られた。
そして足を踏み外し
「うわ～」
と派手に階段から転げ落ちた。
「イタタタタ……」
しばらく動けないでいると
「あんた、いつまで乗ってるつもり？」
下のほうから茜の声がきこえた。目の前には茜の顔が大きく写っていた。しばらく見つめあっていた。
通りかかった伊織に

「お～昼間からしかもこんな場所で大胆ね？　お二人さん」
とからかわれた。
状況説明をするとリビングに通じる廊下に僕が茜に覆いかぶさっている。よって傍から見れば僕と茜抱き合っているようにしか見えないわけだ。
伊織にからかわれとっさに離れる僕たち。
「ご、ごめん」
「い、良いわよ。別に。そ、それより大丈夫？」
「う、うん」
「こ、今度から気をつけなさいよ？」
ぎこちない会話。いたたまれない空気から逃げ出すように二人は別れた。
これで余計に誘いにくくなったことに頭を抱える僕であった。

「どうやったらうまく誘えるんだろう？　それにしてもいい匂いだったな」
茜はとても甘いにおいがした。懐かしい優しく包み込んでくれる匂い。
（って何考えてんだろう……）
「何がいい匂いだったんですか？」
どこから入ってきたのだろ？
「遥ちゃん！！」
そこには遥が立っていた。
「なんでここにいるの！！？　どこから入ってきたの？」
と驚く僕に
「いや、あの勉強してたら消しゴムを落としちゃって……」
と申し訳なさそうな遥。
「要するに、落とした消しゴムを探してるうちにこの部屋に来ちゃ

ったってこと？」
僕がそう言うと遥はコクリとうなずいた。
（ありえないだろ！！　そんなこと普通に！　でも遥ちゃんならありえそうだ）
と僕は勝手に一人で納得していた。
（とにかくまず家に送ってあげないと）
僕が頭の中で必死にシュミレーションしていた。彼女はそれに構わず
「でもこれって運命ですよね」
と言って抱きついてきた。
「ちょ、ちょっと離してよ！」
「いいじゃないですか～ちょっとくいらい」
遥は不満そうな表情を見せ、笑顔で頬ずりをしてくる。
「龍二？　話ってなに？」
なんというバッドタイミングで僕の部屋に来る茜。
「話って……それ？」
怒りを抑えて茜の拳が震えている。
「どういうこと？」
「遥ちゃんとの関係を見せつけたかったのってきいてんの！！」
「違う！！　誤解だって」
有無を言わさず猪木並の平手打ちが飛んできた
「最低！」
という言葉と頬の痛みを残して茜は去って行った。

あれからどれくらい経っただろう？　もう陽は落ち空は星で埋め尽くされていた。しかし未だに映画に行こうという一言が言えずにいた。それどころか相手にさえしてくれない。
「あれしかないな」
そうつぶやき僕は茜の部屋に向かった。

（本当に今日は最悪な一日。抱きつかれるし、裸見られるし、遥ちゃんと……でも話ってなんだったんだろう？）
と考えていると
コンコン
「茜？　今大丈夫？」
龍二がわたしの部屋のドアをノックした。

コンコン
「茜？　今大丈夫？　話があるんだけど？」
と僕は茜の部屋のドアをノックした。
「いいわよ」
と少し角が立つ言い方だったが部屋に入れてくれた。
「話ってなに？」
「今日のことなんだけど……ごめんなさい！！」
と素直に謝った。
「あ～今日のは、気にしてないわよ。お互い不可抗力だったわけだし……だいたいあんたが悪いのよ？　わかってる？」
顔を熟れたリンゴのように顔を真っ赤にする茜。
（やっぱりきにしてんじゃん）
「うん。これから気をつけるよ」
「でなによ、謝り来ただけではないんでしょ」
と茜は僕が本来言いたいことをを聞いてきた。それがちょっと嬉しかった。
「あ、あのさ？　これ伊織さんから貰った映画のチケットなんだけど。今週までなんだよね？　だから一緒に行かない？　今日のお詫

びにさ？」
と玉砕覚悟で誘う僕。
（やっと言えた……）
「なんであんたと行かないといけないの？　生徒会長にもらったのなら生徒会長と」
とあっさり断られた。
（そうだよね……僕なんかと行くわけないか……）
（何考えてんのよ！？　デリカシーがないったらありゃしない）
「はぁ～……そっか。せっかく『2人のために』ってもらったのに」
と僕はため息をついた。すると
「わかったわよ。一緒に行けばいいんでしょ？　一緒に行けば」
と不服そうに言うけど恐らく嬉しいのだろう。少し顔が赤い。
「その代わり明日う～んとお詫びをするのよ？」
「わかった」
「茜と映画か……茜と」
と自然と表情がほころぶ僕に
（仕方ないわね）
と優しい穏やかな視線を僕に向けた。
ということで茜と2人で映画を見に行くことになった。

第15話　だから一緒に行かない？（後書き）

なんだかんだでようやくデートにこぎつけた龍二君
そんな中黒い影が忍び寄る……
次回、いいから！　早く準備しなさい！！」
デートうまくいくかな？　龍二君

第１６話　いいから！　早く準備しなさい！！（前書き）

申し訳ございません・・・
２週間ぶりの更新です

第16話　いいから！　早く準備しなさい！！

「ふぁ～」
昨日1日かけてやっと映画に誘うことに成功した。そして昨日の一連の騒動で疲れ僕は泥のように眠っていたせいか気持ち良く目覚めた。
（よし！　今日は茜とデートだ！　今日は……）

「龍二！　遅い！」
「ごめん、ごめん」
と少し遅れた僕が茜に謝る。
「もうすぐ時間だから行こうか？」
とさりげなく手をつないで、いざ映画館へ。
映画館では暗闇を利用して2人で寄り添って……いい雰囲気になってその後ショッピングして、それからそれから……
とどんどん妄想が膨らむ。そんな中
「龍二！！　起きなさい！！」
「うわ～」
いきなり茜が入ってくるもんだから僕は慌ててしまった。
「な、なに？」
それに動揺していたせいか声が上ずる。
「起きてるならいいわ？　それより早く準備しなさい？」
「準備？　映画は1時からでしょ？」
その言葉にイラッときたのか
「いいから！　早く準備しなさい！！」
と怒気を強める。
「はい～」

数十分後
準備も終わり後は出かけるだけとなり、朝食を取ろうと荷物を持ち1階に下りた。
「2人とも早いわね？　デート？」
「違うよ」
「違うわよ！」
とからかう母親に2人で必死に否定する。
「茜？　ごはんは？」
「いらない」
「いただきます」
とこれから取ろうとする僕を
「なに呑気に食べようとしてんの？　あんたも一緒」
「ちょ、ちょっと～」
というわけで手を引かれ無理やり連行されたのだ。

家を出てからどのくらい経ったのだろう？
茜は未だに必死に走っている。何かに追われているそんなようにも思えた。
少し心配になり
「茜？」
と声をかけるも走るのに夢中になっているせいか僕の声は届いてない様子。
「ちょっと、茜！」
「なによ！」
イライラしているような口調でそういった。

「て、手が痛いんだけど？」
強く握っていたのに今気づいたらしく
「ごめん」
と謝った。
「それに、どうしたの？　はぁ　必死に走って。　はぁ」
と僕は肩で息をしながら聞いてみた。
「考えてみなさい？　もし生徒会長に見つかったらどうなると思う？」
そう言われて考えてみた。

「え？　ウソ？　龍二君と茜ちゃんがデート？　これは大スクープだわ！！　取材よ！！　取材！　直行よ！！」
ということになり無理やり同行させられて
パシャパシャと大量に写真を撮られ、挙句の果てには
「谷口龍二、本郷茜、やはり熱愛中」
などと新聞の一面トップになる。下手したらストーキングするかもしれない。伊織さんはそういう人だ。
恐ろしいことこの上ない
「確かに、大変なことになるね……いろんな意味で」
と納得し苦笑した。
「でしょ？　だから彼女が寝てる間にでたのよ」
グ～とそこで朝食を一口も食べないで出て行ったためお腹の虫が鳴きだした。
「お腹すいたね」
「うん」
ということで近くにカフェがあったためそこに立ち寄った。

カフェに入ると
「いらっしゃいませ！　ご主人様」
という異様なあいさつとともに異様な光景が目に入ってきた。
「え……」
目の前にはふりふりのついたメイド服。しかもネコミミまで付いている。そこそこかわいい女の子が立っていた。そうここは言わずと知れたメイドカフェというやつである。外観はとてもオシャレな北欧風って感じだ。てっきりちょっと素敵なカフェを見つけたと思ったけど、どうやらハメられたみたいだ。僕たちみたいに間違えて入ってくる人も少なくはないはずだ。
周りを見渡すと、いくつかのテーブルにメイドが付きじゃんけんをしたり、話したりしている。なんかまるで風俗店のようだ。茜はというとその光景に衝撃を受けたのか、まるで壊れたロボットのように石化して動かなかった。というより動けなかったのだろう。いたたまれない雰囲気に茜を連れ出しついに逃げ出した。
「すいませんでした！！」

ひたすら走った。近くの公園で石化した茜を元に戻した。
「茜？　茜？」
「あ！　龍二？　ここは？」
と気がついた。
「公園だけど？」
「さっきとても衝撃的なものを見たような……」
「うん……思い出さない方がいいと思う……」
と苦笑いを浮かべる僕。
「それよりさ、お腹すいたな～」
とぼやく僕。

すると茜は急にソワソワし出した。
「トイレならあっちだけど？」
「違うわ！」
と気を利かせたつもりで答えた僕に茜は突っ込みを入れる。
「ならどうしたの？」
と聞いてみると
「あのさ……お、お弁当……作ってきたんだけど……食べる？」
茜の思いがけない一言。
（え！！　茜が！！？　あ！　そう言えば……）

今朝のこと僕は1度目が覚めてトイレに向かった。
用をたしもどると、台所のとびらが少しだけ開いていた。
「ふんふんふんふん」
と鼻歌交じりで作業をしている茜の後姿。
テーブルには弁当箱が2つ。
「わ～と！　あぶない。あぶない。龍二おいしいって言ってくれるかな？」
なにやらぶつぶつ言いながら作っていた。
そんな姿を微笑ましく思いながら部屋に戻った。
そのことを思い出した。

弁当を取り出し、外出が慌ただしかったのでしばしの休憩。
「は～やっとご飯が食べられる」
と一息ついた。
「そうね」
「だって家でごはん食べる暇なかったからね」

「なによ～それ？　私のせいだってこと？」
ジト目での無言の圧力。
「そうじゃないけど……」
「それじゃ食べるわよ？　言っとくけど勘違いしないでよね？　別にあんたのためにつくったんじゃないんでから」
と手渡された弁当はとても色鮮やかなものだった。定番の玉子焼きやミートボール、タコさんウィンナーに煮物や野菜炒め、デザートにはうさぎさんリンゴと日頃の彼女を見ていてどれも1人で作れそうにないものばかりである。とりあえず一口。

そして龍二は黙り込む。
「どう？　おいしい？」
私は恐る恐る聞いてみた。しかし一向に口を開こうとはしない龍二にだんだんネガティブになっていく。
（きっと、失敗したんだわ。龍二のことだ。まずいって言えなくて言葉を探してるんだ）
「ひとつ聞いていい？」
と口を開いた。
「何よ？」
「これ、本当に茜が作ったの？」
「そうよ？」
「1人で？」
「そうよ！　なんか文句ある？」
「そう……」
またしても黙り込む龍二。
（何よ！？　まずいなら、まずいってはっきり言いなさいよ！　そうやって黙られると龍二を困らせてるみたいじゃない）
ついに耐えきれず私は
「まずかったんで」

「おいしい！　おいしいよ！！　これ！！」
目を輝かせながらの思いがけない一言に私は驚いた。

「おいしい！　おいしいよ！！　これ！！」
正直言って驚いた。日頃料理もしない茜が見た目も味も完璧な状態の弁当を作り上げたのだ。
「でもでも、煮物ちょっと焦がしちゃったし、卵焼きも塩ちょっと入れすぎたのよ？」
恥ずかしいのか慌てて否定する茜。
「そんなことない、煮物は丁度いい硬さだったし、卵焼きも全然OKだよ。むしろ絶妙な塩加減だったよ」
と絶賛する。
それをみて安堵の表情を見せる。
「ねぇ～こうして2人で外で食事って珍しくない？」
確かにそうだ。外食は何度もあるけど、小さい頃は家族とだし、高校に入ってからもお互い一緒に帰ることはあっても外で食べることは滅多になかった。
「そう言えばさ……」
懐かしさを感じながら公園を出て行った。

駅に向かい銀法通りまで目指した。
見慣れた風景だけど今日はきらめいているように見える。
たぶん茜とデートだからだろう。
茜もいつもより嬉しそうな感じに見える。

いよいよメインイベントの映画館に到着した
上映時間は1時から。
「龍二？　本当にいいの？」
さりげなく茜がそんなこと言ってきた
「何が？」
僕はわけがわからなかった。
「この映画を本当にみていいの？って聞いてんの」
「何言ってるの？　茜見たいって言ってたじゃん。それに伊織さんからせっかくもらったんだよ？」
「確かに私はものすごく見たいけど、龍二この手の映画あんた苦手でしょ？」
「大丈夫だよ。気にしないで」
にっこりと返した。
そう映画は僕の大きらいなホラー。
（茜のデートのためなんだ！　頑張らないと！）
と気合を入れて席に着いたものの……
1回目の絶叫シーンで
「わ～」
と思わず茜の手を強く握ってしまう。
「イタっ！」
顔をしかめて僕の方を見る。
「ちょっと龍二！　大丈夫？」
耳元で僕に話しかける。
「大丈夫だよ。平気、平気」
と苦笑いを浮かべる僕であったが
（このくらいガマンしないと）
となんとか踏ん張った。
その後も
「ぎゃー！！」
「わー！！！」

「ひぃ〜！！」
と悲鳴をあげてばかりだった。
2時間後
「ひくひく」
「ほら泣かないの！　男の子でしょ？」
結局僕はあまりの怖さ泣き出してしまった。
茜は僕を慰めながら映画館を後にした。
（あ〜情けないな……僕）

「そろそろ秋モノかわないと」
ということで名誉挽回をすべく次なる目的ショッピングへ。
向かった先はとあるショッピングモール。ここにはありとあらゆる服が置いてある。
「これもいい！　あれもいい！」
茜は目移り状態。
試着して
「これどう？」
とやってきた姿はベージュの生地が厚めのスカートに白のワイシャツの上に緑のカーディガンまたその上には黒のジャケットであった。
その姿はとてもかわいかった。
「すごい似合ってるよ！！」
そう言ってあまりのかわいさに我を忘れるぐらい見とれていた。
「これかわいい」
「これは派手だな」
「これはビミョー」
「これ地味かな？」
まるで水を得た魚のように目を輝かせていた。そういう姿を見ると女の子なんだなと改めて認識する。そんな光景が微笑ましかったり

もするわけで……
なんだかんだでたくさん買い込み、袋を片手に五個ずつという大荷物になってしまった。
荷物持ちは僕一人。一人せっせと駅までの道のりを重い荷物を抱えながら進んでいった。

ようやく駅にたどり着き、一休み。すぐに電車が来た。
そして座席に座り、
（は～結局僕何もできなかったな……）
と自己嫌悪に陥っていると
「今日は楽しかった。見たかった映画も見れたし、買い物もできたし、それに……」
と茜は言葉に詰まる。
（それに？　なんだろう？）
「それにべ、弁当美味しいって言ってくれたし」
恐らく茜はそれがいちばん嬉しかったのだろう。言葉をかみしめるようにそう言った。
「もしよかったらこれからず、ずっと私が弁当作ってあげる」

「もしよかったらこれからず、ずっと私が弁当作ってあげる」
とまるで告白のようなことを口走った私。
龍二ははずっとうつむいて黙っていた。
気まずい雰囲気。
そして電車が大きく揺れた。揺れに身を任せるかのごとく龍二は私の太ももあたりに
倒れた。
「ＺＺＺ」

（寝てる……）
疲れたせいで眠ってしまったのだろう。
下車する駅まで寝せておくとしよう。
しかし下車する駅になってどんなに起こしても起きなかったのでおぶって帰ることにした。

気がつくと家の近くまで来ていた。僕はいつの間にか茜に背負われていた。
「茜なにやってんの？」
と眠気交じりの声で聞いてみた。
「やっと起きた。ほら早く下りて歩きなさい」
「うん。ごめんね？」
「いつだったかな？　こんなことあったよね？」
「龍二が小さい頃怪我して、歩いて帰れそうになかったから私が背負って帰ったんだっけ？」
小さい頃の思い出を話しながら家路についた。

家に帰ると
なぜかみんな総出で迎えてくれた。
「ただいま」
「どうでしたか？　デートは」
と遥が興味津津で聞いてくる
「弁当そんなおいしかったのか？　谷口龍二」
無関心をよそおているが実めちゃくちゃ関心あるような言い方の由良。
「弁当ほめられてよかったね。朝早く起きて作った甲斐あるじゃん」
ジト目で茜を見る伊織。

「映画の時、龍二ホント女の子みたいだったぞ？　すげー萌えたぞ！！」
と趣旨違いな発言の斎藤。
「ショッピング、そんなに茜かわいかった？」
と母さんまで加わってきた。
「龍二君をおぶるなんてすごい根性あるわね」
と今日のことからかってくる。しかも写真付きで。
「私が寝てるからって報道部を舐めてもらっては困るわ」
（そうかこの人たちこういう人たちだったっけ……）

第１６話　いいから！　早く準備しなさい！！（後書き）

夏休みの終わりごろ１つの噂が……

次回

なんで僕なの？

何が？　龍二君

第17話　なんで僕なの？（前書き）

３か月ぶりの更新です。
大変お待たせいたしました

第17話　なんで僕なの？

カンカンカンカン
学校中に響く金槌の音。
今年も夏祭りの時期がやってきた。この祭りは銀法町一帯で行われる。神社だけではなく学校や会社も会場となるのだ。もちろんこの銀法高校も会場となる。そのためせっせと準備が行われていた。そんな中毎年こういう噂で持ち切りになる。
それは部活をしていた僕の耳にも入ってきた。
「え？　幽霊？」
「お前知らないのか？」
倉本が驚いたようにそう言った。
「うん……」
仕方ないので肯定する。

倉本曰く
この時期になると夜中にこのなると誰もいないはずの校舎のどこからか、ちいさい子の笑い声や話し声やときたま泣き声が聞こえてくるらしい。なんでも２０年前開かれていた銀法町の夏祭りで会場になっていた銀法高校で１人死者がでていたという。その霊が未だにここをさまよっているとか。

「他にもあるぞ？　心霊現象じゃないのかってのが」
あまりの怖さに顔が引きつる
「夜な夜な誰もいない音楽室からでたらめなピアノの音が聞こえた

り、黒板に落書きがあったり、ひどい時には教室そこら中に落書きあるとか、あとは定番の動く人体模型とか……」
彼の説明の怖さに体が凍りついたように動かなくなった。
「何雰囲気だしてんだよ！　谷口あまりの怖さにかたまったじゃないか！」
と斎藤が倉本に注意する。
「龍二君？　こいつは全部噂よ。気にしないで」
と伊織がフォローする。
「うわさを信じるなど、けしからん！」
いつも由良ちゃんらしいお言葉。

その夜
由良はいつものように警備の仕事をしていた。
「うん？」
と厳燐丸が何かに気づく。
「どうした？　厳燐丸」
「何か気配を感じてな」
「そうか。実は私もだ」
「行ってみるか」
と厳燐丸が促す。
「そうだな」
と会話を交わしながら由良たちは気配を感じる方へ向かう。
「あそこだ」
と気配をたどりながら追って行った。
しかし
「気配が遠くなった。どうやら下の方に向かったみたいだ」
と厳燐丸が言うと
「そうか。何もなければいいのだが……それにしても噂もあながち

嘘ではなさそうだな」
「そうみたいだ」
と二人はその場を後にしたのだった。

翌日
この日はお祭り当日
「たくっ！　みんなそろってお店は夕方からなんだよ？」
なんというかお祭りというのはやっぱり浮かれるものなのか、僕たちは一足早く会場となる学校へ出向いていた。しかも女性陣は浴衣姿。これもお祭り気分で浮足立っているのだろう。
「せんぱ～い。浴衣似合ってますか？」
と尋ねる遥。
「ちょっとそんなに見ないでよ！　恥ずかしいじゃない！」
と恥じらいを見せる茜
「これ新しく新調したんだ？　それより取材よ！　浴衣特集を組まないと……」
と両手にはカメラを持っている。そして
パシャパシャと写真を撮る。
「ちょっと生徒会長！！」
と困惑する茜。
（ここに来てまで取材とは……）
「ふん。みんな浮かれよってからに！！」
といつもの由良節がでるも
「由良ちゃんだって浴衣じゃない？」
と突っ込むと
「それは……」
説得力のない由良であった。
「なんでお前まで来るんだよ！！」

倉本が不満そうにいう。
「あんたのお目付け役よ。変なことしないように監視しとかないとね。間違い起こされても困るから」
とこちらも不満そうな西岡さん。
「どういう意味だよ！！？」
「そのままの意味よ」
「なんだと～！」
「まぁまぁ」
となだめる僕。

「キャー！！　何これ！！」
「うわ～」
と周りは悲鳴の嵐。行ってみると
「どうしたの！！？　これ」
僕は驚く。
看板にはヒビ、机やいすもバラバラになって散乱していた。そして材料や備品、景品もちらほらとなくなっていた。しかも
「どうしよう～」
と店主が腕組みをする。
「これひどいですね～？」
と辺りが騒然としている中由良が入ってきた。
「失礼」
そしてバラバラになった机の破片を触って
「これは昨日の……」
「間違えないな」
となにやら厳燐丸と話し込む。
「どうされました？　由良様」
と話しかける西岡。

「いやなんでもない」
と言いつつ、僕の方に向かってきた
「谷口龍二、ちょっと」
僕は由良に呼ばれ連れて行かれたのは屋上。
「お願いだ！　お前に協力してほしい！」
という突然の由良からの依頼。
「で協力って何をするの？」
由良はしばらくしてこう言った。
「悪霊退治だ」
「え～？　嘘！！？　僕？」
まぁ当然の反応の僕。
（え？　なんで？　わけがわからない？　なぜに僕？）
頭が真っ白になるくらい考えた。
「な、なんで僕なの？」
「お前が適任だと思ったからだ」
それを聞いた途端僕は顔が真っ青になりその場に倒れ
「無理無理無理無理！！！」
と必死に断るも由良は厳燐丸の刃をチラつかせ
「協力……してくれるよな？」
「は、はい……よろこんで」
なんとまぁ横暴なやり方で丸め込まれた僕であった。
はぁなんてぼくは弱いんだろう……

というわけでその夜僕は学校へ出向いた。
「遅い！！　遅刻だぞ！！」
と怒る由良に
（は～なんで僕が……）
と思いつつ

「ごめん、ごめん……」
と謝る僕。
そして僕たちは校舎の中に入って行った。
「う～怖いよ～」
夜の校舎は怖いので由良の後ろにぴったりついて行動した。
「ちょ、ちょっと離れんか！　歩きにくかろうが！」
「だ、だって怖いんだもん……」
「そうは言ったって……」
と必死で由良から離れようとはしない僕。
「だいたいなんで怖がりな僕が適任と思ったの？」
「それはな、げ」
そんな僕の素朴な由良が質問に答えている最中に
「わ～」
「おう」
足が絡み、お互いつまずいて倒れてしまった。
月明かりに照らされた由良はとても美しかった。
見つめあう二人。ピンクでぷっくりした唇。
自然と顔が近づける僕。それを許すように目を閉じる由良。
寸前ではっと我に帰る両者。しかし離れるにも離れられなかった。
見えない力に押しつけられているそんな感じだ。
「う～ん」
と抵抗するが及ばず、むしろ顔が近づいてくる。僕の顔の下には由良の美しい顔がある。
（なんとしてでもこれだけは守らなきゃ）
両手をつき、そうなるのを抗った。しかしなおも押し付けられる。
苦しそうに由良は、厳燐丸を抜いた。
「ちょ、ちょっと！！　由良ちゃん！！？　何する気？」
由良の行動に驚く僕。
「谷口龍二少しの辛抱だ。我慢しておけよ？　いますぐ楽にしてやるからな」

と言い僕に厳燐丸が襲ってきた。
「ちょ、わ〜！！」
思わず目をつぶる。
その瞬間青白いの光が昇ってきた。
僕たちは離れ、その光を見つめる。
そしてその光は素早く逃げるように僕たちから去って行った。
「追うぞ！」
「う、うん」
僕たちは光の後を追うことに。
「あの光は何なの？」
「悪霊だ」
「あ、悪霊！！？」
一気に中に悪寒が走った。
「そうだ。このままだとこの学校が危ないぞ」
光は茜の教室に入り込んだ。僕たちも後を追って入った。
「いたちごっこは終わりだ。そろそろ決着をつけてやる」
「手加減してやれよ。教室がメチャクチャにならぬように。それに」
と厳燐丸からの注意。
「わかっておる」
由良は上段の構えから、光に飛びかかり厳燐丸を振り上げ、一気に振り下ろした。すると
みるみる形が変わっていく。
（どうしよう！！　悪霊が出る！！　取り付かれる！！　来る！！）
と恐怖が頂点達し、うつむき目を閉じた。数十秒後僕が目にした光景は
「え〜ん……痛いよ〜……え〜ん」
そこには泣きじゃくる短パンにTシャツの4，5歳ぐらいの小さい男の子の姿だった。

第17話　なんで僕なの？（後書き）

悪霊の正体は幼い男の子であった。
次回
自分で言っておるではないか
成仏できるかな？　男の子

第１８話　自分で言っておるではないか（前書き）

ちょっと長いかもしれませんが気にしないでください（笑）
そして今日は２１回目の誕生日！　イェ～イ＾＾
すいません・・・浮かれました（汗）

第１８話　自分で言っておるではないか

「え～ん……痛いよ～……え～ん」
そこには泣きじゃくる短パンにＴシャツの４，５歳ぐらいの小さい男の子の姿が現れたのだ。
「ほら、いわんこっちゃない」
「すまん」
とため息をついた厳燐丸に謝る由良。
怖いはずなのに自然とその男の子にかけより
「大丈夫？」
と言葉をかけられた。
「うん……グスグスっ……」
男の子は涙を手で拭きながら答えた。
「たくっ！　小さい子なんだから乱暴にしない！」
と由良に平然と注意をする僕。そんな自分が僕はものすごい不思議に感じた。
第一僕には霊感なんてないはずなのにはっきりと男の子が見えるのも疑問に思えた。
「ってあれ？　なんでこの子が見えるんだろう？　霊感はないはずなのに」
と疑問を口にすると
「やはりな」
「思った通りだ」
由良と厳燐丸は納得しているような表情を見せる。
「なにが？」
「お前には霊感があるんだ」
と由良がそう言う。
「そ、そうなの？」
「今こうして話しているのが証拠だ。それに自分でも気付かなかっ

たのか？　すでに厳燐丸と話してる時点で自分に霊感を持っておるのだと」
「そう言われてみればそうだね」
と説明され僕は右手で頭をさする。
「でこれが悪霊？」
と僕がきく。どう見ても悪霊には見えない純粋そうな男の子だ。全然そうは見えない
「だと思ったのだがどうやら思い過ごしだったようだ。だが」
視線を下に向けると
「このクソババァ！！　よくも殴ったな！！」
と男の子は由良の足を力いっぱい殴っていた。だが由良は気にも留めず涼しい顔で男の子の首根っこをつかみ
「手がかかるのに違いない」
男の子の顔を覗き込む。
「なんだよ！？　離せよ」
と暴れる男の子。
「お前、名前は？」
「だから離せって！」
「名前はと聞いている！！」
と由良が叱りつける。
それで男の子は今にも泣き出しそうな顔をする
「由良ちゃん？　押さえて。それに離してあげなよかわいそうだよ」
となだめる僕。
そして
「浩太（こうた）だよ、桂木浩太（かつらぎこうた）」
と男の子が名乗る。
「それで何でこんなことしたんだ？」
と聞く由良。
「なんのことだよ？」
と首を傾げる浩太。

「私と谷口を接吻させよとしたではないか！？」
「せっぷんって？」
「もういい……」
と由良は諦めたように言った。
「クソ！　結局してなかったんだ？　あともう少しだったのに……」
と浩太は小声でつぶやいた。すると
「なんか言ったか？」
と睨む由良。
「いや……なんでも」
慌てて浩太は否定する。
「それでは本題に入ろう」
と厳燐丸は口を開く。
「今朝、今日だす出店が荒らされていたのだ。それだけではない。最近夜になるとこの校舎かでは奇怪現象が起こっておる。お前知らないか？」
「なんのこと？　俺は知らないぜ。看板を真っ二つにしたとか、机やいすを散乱したとか、たくさん祭りに使うものを取ったとか夜になって遊びまわってるなんて知らないぜ」
と自慢するかのごとく腰に手を当てる。その直後しまったという顔をする。
「やはりお前だな」
由良は腕組みをして見下ろす。
「違う！！」
と浩太は否定するが、
「自分で言っておるではないか」
と由良が指摘すると
「それは……」
口ごもる浩太。
「理由はなんだ」
と由良が詰め寄る。後ずさりする浩太。

「場合によっては……」
と厳燐丸に手をかける。
「まぁまぁ」
「落ち着け！　まずは理由を聞いてみるのが先決だと思うが」
と僕と厳燐丸がなだめる。
「そうか」
としぶしぶいった表情でおさまる。
こうして理由を聞くことになった。
「なぜこういうことをしたのだ？」
と厳燐丸は優しく問う。
そして彼は話し始めた。

俺の名前は桂木浩太、６歳。
小学１年生だ。しかし普通と違うところが一つある。
それは、１年を大半を病院のベッドの上で過ごしている。もちろんみんなと勉強したり、遊んだりしたい。でもそれは叶わない……
「数値もいいし、心拍数も血圧も安定してる。このまま行けば今年の夏祭りはいけるかもしれないよ」
いつものように検査をして先生にそう告げられたのは夏祭りの２週間前。
「軽くリハビリもしないとね？」
「うん」
と俺は自然と声が弾んだ。
毎年行われる銀法町の夏祭り。この町の一大イベントでお寺や神社はもちろん、会社や学校までいたるところが会場となっている。俺たち家の近くの高校でが行われる。とても楽しみ。妹も楽しみにしているよう。しかし俺は一度も行ったことがなくずっと窓の外でにぎやかな様子を眺めるだけだった。なのでとても嬉しかった。

それでリハビリも頑張ったし、ちゃんと言うことを聴くようにもした。
「明日だね？」
「そうだね」
「どこに行きたい？」
「え～と、焼きそば食べて金魚すくいしてチョコバナナ食べて、たこ焼きも。それからそれから……」
「もう！　食いしん坊なんだから」
「アハハハハ」
というお母さんとの会話。
そして迎えた当日
「大変です！！　先生！！　浩太くんが！」
昨日まで調子の良かった俺は容体が悪化し、いつもより数十倍の頭痛、激痛といって良いほどの痛みと闘っていた。
「痛いよ～痛いよ」
とだんだんまぶたが重たくなってきた。
「お祭りいきたいよ……」
その後は俺の意識はなくなった。

「それで……」
「なぁ俺ってどうなったんだ？」
「心配するなお前はもう死んでおる」
と由良はさらっと言った。
「ちょっと。由良ちゃん？　余りもストレートすぎるよ」
「しかし、本当のことを言わないと自分が死んだという認識がなくウロウロする浮幽霊も少なくないからな」
と説明する。
「それに、このままこの世にいても何も得られずやせ細っていくだ

けだ」
厳燐丸が補足をする。
「それにしたって！」
「いいよ……もう。そうなのか。やっぱり……自分でもわかってたから。俺と会う人は見る目がみんな怖がってったり、嫌がってたりしてるのを。それにそういうの慣れてるかられなんで涙が出てくるんだろう」
「そうか」
と由良は浩太を抱きよせた。
「寂しかったのだな、辛かったのだな？　もう我慢せんでもよいぞ。幽霊になってずっと一人で耐えてきたのだな？　よく頑張ってきたな。えらいぞ」
と優しく語りかける。すると浩太はいままでの我慢の糸が切れたのか、ワンワン泣き出した。
「よしよし」
とまるで自分の子どものように頭をなでた。
「それにしたって、浩太？　あれはいけないよな？　ちゃんと反省しろよ。それから盗んだものは返しておくこと？　いいか？」
どうやら今朝のことを言ってるらしい。結局被害にあった屋台は看板だけ作り直してなんとかお店は開けたようだ。
「そうだ！！　もうお祭り始まってんだ！　行こう？」
「ああ」
と由良は浩太と離れて僕と一緒に教室を後にしようとする。
浩太は物欲しそうに見て
「楽しんでこいよ」
と強がる。
「なにいっての？　君も行くんだよ？　浩太くん」
と誘う僕。
「え？　いいのか？」
「当たり前だろ？」

浩太の問いに由良はそう答えた。
そして浩太は僕と由良の間に入り
「仕方ないな～2人じゃ危なっかしいから俺がついててやるよ」
と3人は手をつないで教室を後にした。

「いか焼き3つ」
と由良が注文する。
「お客さん、2人しかいませんが」
「それでも3つだ」
店主は首をかしげるのであった。
「そういえばさ？　なんで僕を選んだの？」
今回のことに関して理由を聞いてみた
「あぁそれはな、証人が必要だったのだ」
と由良が答える。
「証人？」
「そうだ。活動報告をするときに必要でな。それにお前の力を確かめたっかったしな。後……」
それから射的や金魚すくいもも回り、定番のリンゴ飴やくじ引きも回った。
その間
「由良お姉ちゃ～ん」
と顔を体にこすりつけたり、
「これ、由良お姉ちゃんにあげる」
と買ったものをあげたり
終始由良お姉ちゃん、由良お姉ちゃんと完全に浩太になつかれたようだ。
そんな浩太を最初は苦笑いしながらも嫌ではなくむしろ楽しそうに相手をしている。

一通り回り終え
「どうだった？」
と僕が感想を聞く。
「楽しかった」
と満面の笑みでこたえる浩太。
「そうか。それはよかった」
微笑みを浮かべる由良。そこへ
「龍二～！！　２人ともここにいたのね。みんな～ここよ～」
と茜が駆け寄り、みんなに知らせる。
「こんなところで何やってたの？」
と伊織が探りをいれて
「まさか涼風！　ぬけがけは許さんぞ！」
と危険な発言の斎藤。
「みなさん神社にいたですね！！」
「遥ちゃん？　ここ……学校だよ？」
方向オンチを見事なまでに炸裂させるの遥に
「何よ」
「なんだよ」
と痴話げんか繰り広げる倉本と西岡。
「ふふふふ……お姉ちゃんやお兄ちゃんの周りには賑やかな人がたくさんいるんだね？」
とうらやましそうに口を開く。
「そうだね」
「そうだな」
僕たちは小さくうなずいた。
「そうそうみんなで写真取ろうよ？」
「浩太もせっかくだから入るといい」
と由良が浩太を誘う。
伊織はカメラをセットしてみんなそれぞれ位置とポーズを決め
「はいチーズ」

パシャと撮った写真。

数日後
写真ができたので生徒会室でみんなと見てみると
「これは！！」
と写真を見て石のように動かなくなった茜をみてみんなが駆け寄る。
「わっ！！」
「何これ！！？」
「うわ～……」
なにも知らない遥、伊織、斉藤も固まる。
由良の横にくっきりと白い影が映っていたのだ。
「これって……」
「ああ……」
僕と由良は無言でお互いうなづくだけであった。その時の由良はとても穏やかな笑みを浮かべているような気がした。
そしてその写真のことは瞬く間に広がり、この夏一番の話題になったことは言うまでもない。

第１８話　自分で言っておるではないか（後書き）

次回は番外編
久しぶりに信虎君登場！！
次回、どうでしょうね！？
覚えてるかな？　この子・・・

第１９話　どうでしょうね！？（前書き）

今回は久しぶりの信虎君ストーリーです＾＾
そして今回はいつもよりよりべたですが、気にしないでください（汗）

第19話　どうでしょうね！？

「ありがとうございます～」
「応援してますからね！！」
とファンに握手して声援をもらう。
ここはとあるアニメショップ。今ここで若手人気アイドルのCDお渡し＆握手会が行われていた。
そのアイドルの名は小倉智子。押しも押されぬ人気急上昇中のアイドルだ。

「また買いますからね？」
「ありがとうございます」
とファンに対応しながら周りを見回す。すると
（あ！　信虎君だ！！　来てくれたんだ？　わざわざ）
と自分の恋人が来たのを確認する。自然と心が暖かくなる。思わず信虎く～んって叫びたくなる。
「あの～……」
とお客の一人が呼びかける。
「あ！　すいません。ありがとうございます！」
信虎くんに見とれてしまった私は我に返り、
（いっけない、いけない。仕事、仕事！）
と仕事に集中する。

「久しぶりに会えるね？」
並んでる間いつものようにくるみちゃんに話しかける信虎。

周りは
「うわ～……こんな奴もトモちゃんのファンとは」
「いや、こんな奴だからだよ。現実に女の子と触れたこともないから、トモちゃんに幻想を抱いてるんだよ」
と引いた目でみる。
そして信虎の番
「ありがとうございます」
とCDにサインをして、握手する。
そして
「来てくれてありがとね。くるみちゃんもありがとう」
とくるみの頭をなで小声で智子はニッコリと笑う。
「あ！　これ差し入れ」
と弁当をこっそり手渡す。誰も気づいていない。
「ありがとう。いつもいつも。信虎君のおいしいよ」
「そういってもらってうれしいよ」
信虎はいつもイベントに来ればこうやって弁当を持ってくるのだ。
「じゃあね。ありがとうございます」
と普通のファンのように去って行った。
そうお互いは特別な存在。だが周りは信虎のクラスメートしか知らない。

イベントも全て無事に終わり
「お疲れ様でした！！」
と会場を後にする智子。
「お疲れ～」
「また来たんですか？」
そこには人気イケメン若手俳優の加藤秋馬（かとうしゅうま）であった。
「懲りないですね。しつこいですよ？」

嫌悪感丸出しの口調
「いや～粘り強いって言ってほしいな？　それにたまたま現場が近かっただけだよ。どうこれから？　もうこれで今日は上がりなんだろう？」
と詰め寄ってくる。
「結構です！」
相手にもせず、きっぱりと断り智子はマネージャーの車に乗り込んだ。
（あのクソ女（あま）が……）

その帰りのマネージャーの車の中
「良かったね？　お客さんたくさん来て」
「ええ。そうですね」
今日の成果について話す二人。
「でも一人、とても気持ち悪い人いたよね。なんかフィギアと話してた人。あれ絶対オタクだよ……ああいうの気をつけたがいいよ？」
と嫌そうにいうネジージャー。
「いいじゃないですか？　ファンになってくれてるんですから」
とフォローをする。
「まぁね？　でもこんな仕事してない限り絶対関わりたくないね。ああいうの。そう思うでしょ？　トモちゃん」
まるで汚いものでも見るかのような言い方に
「どうでしょうね！？」
と強い口調で智子はプイっとそっぽ向いた。
やはり好きな人の悪口を言われるといい気分ではない。
「オタクってそんなに嫌われるのものなのかな？」
と智子はボソッとつぶやいた。

翌日
「どうだった？　トモちゃんのイベント。行ったんだろ？」
と福川くんがつめよる。
「ちょ、ちょっと近いよ……くるみちゃんもびっくりしてるじゃないか」
と戸惑う信虎。
「楽しかったよ？」
と平然と答える信虎。
「そうじゃなくて、ちゃんと話せたのか？　ちゃんと」
という問いかけに
「いや何も。でも小さな声でありがとうって言われたよ？」
信虎は何気なく答える。
「それだけかよ！」
とツッコム倉本。
「だって仕方ないじゃない？　向こうは仕事中だったんだし……」
と信虎はそういった。
「いいのかな？　本当にそれで？」
目を細めて信虎を見つめる福川。
「なに？」
福川の行動に信虎は少しうろたえる。
「向こうはあの芸能界にいるんだぜ？　スキャンダルの一つや二つあってもおかしくないだろ？」
続ける福川たち。
「どういうこと？」
と信虎はつめよる。
「お前らやめとけって。大道がかわいそうだろ？」
と村内が割って入る。
「そうだよ」

と僕も便乗する。
「だってよ？　あのトモちゃんだぜ？　実際スキャンダルがないにしても裏で何してるか分かんないぜ？　もしかしたら……」
と不満そうな顔の倉本。
「裏の世界で……ってやつもありそうだもんな？」
「そうそうこの間もアイドルの裏世界のカリスマって言われてた人が捕まってたし」
「やっぱり、芸能界って怖いな」
「変なこと言わない！　大道君みてよ？」
と目線を信虎に向けると
ブルブルブル
震えていた。
「そんなことない、そんなことない。そうだよね？　くるみちゃん」
と信虎はうずくまり、ボソボソとくるみちゃんに話しかけていた。
「ほら！　もう自分の世界に入っていったじゃない」
「冗談だ、冗談」
と申し訳なさそうにフォローする。
それを見ていた由良は
「弱い者いじめなどけしからん！！」
という一言だけだった。
「で？　最近はどうなのよ？」
と女子も食いついてくる。
「最近は、昨日久しぶりに電話したよ」
とオタクの恋バナ談義に花を咲かせた。

（学校では自分の世界に入ってたけど、智子ちゃんは大丈夫だ。行ってた通りにはならない）
とどこかに変な安心感を持っていた信虎であった。

そんな矢先のことだった信虎のその安心感がもろくも崩れさるのは
――

今日も一日が終わり
「もう寝ようか？」
とくるみちゃんに声をかけベッドに入りかけた時ケータイがなった。
着信を見ると愛する智子ちゃん。テンションが上がり電話に出ると
「もしもし信虎くん？　急にごめんね？」
その声は信虎のテンションに反してとてもさめた声であった。
「どうしたの？」
元気のない智子を気にかける。
「あのね？　……この関係お終いにしましょう」
声を詰まらせそう続けた。
「え……？」
一瞬わけがわからずおもわず聞き返してしまった。
「私、好きな人ができたの。　だから別れましょう？」
「どういうことだよ！！」
突然の最後通告に動揺する。
そして
「さよなら」
と一方的に電話を切る智子。
そして翌朝
何気にテレビをつけた信虎は衝撃を受けた。
一瞬目を疑った。これは夢なんだとも思った。しかしこれは現実……
やっていたのは朝の情報番組。いつものように芸能ニュースに芸能
記者の人と女子アナがスポーツ紙の1面の紹介をしている。そこには
加藤秋真、小倉智子熱愛発覚！！の文字。
「嘘だろ……」

第１９話　どうでしょうね！？（後書き）

智子の突然のスキャンダル騒動　果たして本当のことなのか
次回無理してんな？　ありゃ
大丈夫かな？　信虎くん

第２０話　無理してんな？　ありゃ（前書き）

やく２ヶ月ぶりです（汗）まだ信虎くんつづきますが気にしないでください（笑）

第２０話　無理してんな？　ありゃ

「嘘だろ……」
僕はこれを見た瞬間いっきに体が固まってしまいました。背筋が凍るってこういうことをいうのでしょうか？　愛する彼女の熱愛報道、頭が真っ白になるのは当たり前。とりあえず学校にはいかなければなりません。
「いこっか？　くるみちゃん」
こうして虚ろな目で学校へ向いました。

加藤秋真。人気急上昇中の若手イケメン俳優です。壊された日々というドラマでデビュー。それが密かに話題となり、ノートパソコンのＣＭで一気に知名度が上がりました。演技はうまく、誠実でとても優しいと周りから言われています。その上おぼっちゃまときてる。僕には足元にも及ばない……

僕が学校につくと
「あの見た？　小倉智子と加藤秋真の熱愛発覚」
「あ～あれかなりショックなんだけど。私、秋真のファンだったのに～」
とかなり落ち込む女子。
「そうだったんだ？」
「ホントむかつくよね～あの女のことだからきっと秋真を色仕掛けでもしたんでしょ？　あの女マジで許せないんだけど？」
こんな会話や
「朝の見た？」

「ああ！　見た見た！　トモちゃん顔に似合わずやることはやってんだな」
という男子たちなど。
彼にとってはとても心ない言葉が飛び交います。
（なんだよ！　なにもしらないくせに！）
僕は拳を握りしめました。
（うだうだ考えてたら、谷口君たちに迷惑がかかる。とにかくいつも通りに）
そう思いながら教室へ向かいました。

教室につくと
「ほら！　謝れ！」
と村内くんが2人をつきだします。
「マジでごめん！！　まさか本当にそうなるとは思わなかった」
「縁起でもないことといっちまったな……悪い！」
何のことだと思えば2人は昨日のことを言っているようでした。
「ああ別にいいって」
気にしてないそぶりを見せます。
「大丈夫か？」
倉本君が言葉を発する。
「何が？」
といつも通りに振る舞います。
「トモちゃんのことだよ？」
福川に尋ねらました。
「ああ、全然気にしてないよ？」
「加藤秋真ってけっこうかっこいいらしいしね」
そう他人事のように言いました。
「お前それでいいのかよ？」

と問い詰められましたが
「遠くの親せきより近くの他人っていうしね。仕方ないんじゃない？　ねぇ～くるみちゃん」
いつものようにくるみちゃんと話した。
（いつも通り、いつも通り……）
「それはちょっと違うぞ？」
と村内が突っ込みました。
「そっか、そっか。アハハハハ……席につこうか？　くるみちゃん」
と僕は席に着きました。
（ふぅ～何とかごまかせた）
とホッとする僕。

そんな僕をみて
「無理してんな？　ありゃ」
と心配する村内くん。
「やっぱりそう見える？」
谷口くんも答える。
「やっちゃったな……」
と苦笑いする倉本君と福川君。
「このままじゃ元に戻ってしまうわ」
と水島さんは考え込みます。
「いや下手したら……」
とつぶやく村内くんでした。

その頃、
「いいね！！　くれぐれも頼むよ！」

と最後にそう念を押され個室で社長や上司を交えた今回の件の話終えた。そして私は
「はぁ～……」
とため息をついた。そこに
「これはどういうことですか！！？」
と詰め寄るのは事務所の後輩のシンガーソングライター、高井梢枝。
彼女は唯一事務所の中で信虎くんのことを知っている。
少し興奮気味での彼女を落ち着かせる私。
「ちょっと！　落ち着いて？　まず深呼吸しようか」
そして彼女も落ち着きを取り戻す。
「でこれはどういうことなんですか？」
と改めて尋ねられる。
「見てのとおりよ」
「それじゃあ今日のワイドショー全て……」
梢枝ちゃんの動きが止まる。
「トモちゃん？　行くよ」
とマネージャー声がかかる。
「ちょっと！　まだ話は！！」
という梢枝ちゃんを無視して仕事に向かった。

僕は今朝のショックで今日一日を無気力で過ごしていました。力は出るわけもありません。
そんな僕の前に彼が現れた。そう校門には加藤秋馬です。とてもカッコイイです。思わず見とれてしまいました。
「ちょっとあれ見てよ？」
「あれって加藤秋馬じゃない？」
「なにやってんだろう？　行ってみよう」
と下校する生徒が気づいたようです。

そして下校中の僕に彼は口を開きました。
「君か？　智子さんに付きまとってるってやつは？　困るな～　そんなことされたら」
「そんなことしてません！！」
僕は否定した。
「へ～？　いつもメールしたり、電話したり彼女のイベントに必ず手作りの差し入れを持っていったり、それを押し付けたりそれが付きまとっていないといえたもんだな」
とどこから仕入れたのか僕が智子ちゃんにいつもやっていることを次々とあげていく。
「聞いた？　今の？」
「だいたいなんでアドレスや番号知ってんだ？」
「完璧にストーカーじゃん」
と野次が引きます。
「だいたい君は付き合ってると思っているかもしれないが、彼女は全くそう思っていないみたいだ？　むしろ困ってるって聞いたよ」
と淡々と彼は説明します。
「どういうことですか？　向こうから告白してきたんですよ？」
わけがわかりませんでした。向こうが告白してきたのです。困るくらいなら最初からそんなことはしません。
「実はあれゲームで負けて仕方なく告白したんだと。それで君がＯＫしたもんだから告白した手前断れず無理して付き合っていたんだって。つまり君は最初から相手にされてなかったってこと。わかる？」
彼は僕に言い聞かせるように言いました。
「そんなことありません！！」
と全力で反論しました。
「どう反論しようとかまわないけど、みんなの目はどっちが正しい思うかな？」
と余裕の笑み。そしてこう続けました。

「それに君と智子ちゃんでは釣り合わない。君みたいなオタクと今をときめくアイドルである智子ちゃんではね！！」
と明確な一言。決定打を打ち彼は去って行った。
間が悪くこの言葉だけ聞いたので
「うわ～オタクだよ……」
「いるよね？　妄想と現実を一緒にする人」
「お前とトモちゃんと付き合ってただと思いあがりもいい加減にしろよ！！」
「きっと強要されたのね。怖かったのね？　かわいそうに……」
「加藤秋真の言う通りだよ。　自分の立場をわきまえろって～の！
一般人ならともかく。だからオタクってやつは……」
と何も知らない野次馬に罵詈雑言を浴びせられます。
（やっぱり……オタクなんて……）
そして僕は立ちつくしたのです。

（ふん、これで邪魔者はいなくなった。もともと俺の足元に及ばなかったがな）
と心の中でほくそ笑む。そして必死で笑みをこらえる秋真であった。

事務所についた私は、一気に何かが込み上げてきてその場にいた梢枝ちゃんに泣きついた
「うわ～ん！！　信虎君と別れたくないよ～！！」
そんな私を見た梢枝ちゃんは
「どうしたんですか！！！？」
と驚いたものの

優しく受け止めてくれた
しばらくして
「落ち着きました？」
という彼女の眼差しは優しい母親のようだった。
いつの間にか今回のことを話している自分がいた。

案の定だった。
熱愛報道後の信虎は前にもまして自分の殻に入るようになった。いやこうなったのは熱愛報道だけの原因じゃないようだ。しかしそのことは話さない。それどころか
以前のように話しかけても返事をしない。ついにはあのくるみちゃんとも話さなくなった。そして、どことなく虚ろでため息ばかり、空という感じだ。
やはり本人は気にしてない風に装ってはいるものの相当こたえているようだ。
「あれは重症だね……」
「やっぱりな……」
と僕たちは信虎を見てため息をついた。
（なんとかしてあげたいな……そうだ！！）
僕はあることを思いついた。そして教室を1人でていった。

彼女から別れを切り出して数日、僕が抜け殻のようになっていました。そんなある日のこと
その日放課後ある女の子が正門に立っていました。
「あなたが大道信虎さんですね？」
と尋ねられます。
「そうですけど。何か？」

僕がそう答えると
「ちょっとお話が」
と彼女に手を引かれ、
「え？　ちょっと！　待っ」
何もできずただ車の中へ連れていかれる僕でありました。

第２０話　無理してんな？　ありゃ（後書き）

完璧にフラれた信虎　次回　いや勝ってもらわなくては困ります
大道信虎、男……見せます！！

第２１話　いや勝ってもらわなくては困ります（前書き）

どうも2月ぶりです（汗）
おそらく一連の信虎君の話は支離滅裂だとおもいますが気にしないでください（笑）

第２１話　いや勝ってもらわなくては困ります

「ちょっとお話が」
と彼女に手を引かれ、
「え？　ちょっと！　待っ」
何もできずただ車の中へ連れていかれる僕でありました。

ついたのは街のファーストフード店。
そこでハンバーガーとオレンジジュースを頼み席に着きます。
「私は、小倉智子さんの後輩の高井梢枝と申します。実はお願があるんです！！」
と梢枝さんがかしこまりました。
「智子ちゃんの後輩……」
その言葉で何を聞きに来たのか範囲は絞られます。
「先輩を、智子さんを助けてください！！」
と頭を下げる彼女。そんな彼女に僕は
「助けるってどういう……それに彼女とは別れましたから、もう関係ありません」
冷めたひと言。
「本当にそれでいいんですか？　このままだと本当に加藤秋真のモノになっちゃいますよ！！？」
またこの言葉。この言葉をここ数日何回聞いたでしょうか？
「いいですよ、もう。お役御免って感じだし。結局敵わなかったんだから」
と自嘲的になりました。
「逃げるんですか？」
と梢枝は真剣な顔で睨みつけるようにそう聞いてきました。

「だって仕方ないじゃないですか。　好きな人ができたって言うんですから、だいたい勝ち目ないしそれに僕が行ったところで迷惑なだけですよ」
と諦めに似た一言。
「そうですか……あなたにとって先輩はその程度だったんですね！！　がっかりです！」
とイラついた様子で席を立ち、去ろうとしました。
「違う……そんなんじゃありません……本当は！！　僕！！」
と声を大きくすると彼女は振り向き、再度僕を見ました。
「本当は……悔しいです……でも聴いたんです。罰ゲームでいやいや付き合ってたって、僕に気持ちは最初からなかったみたいですから。それに僕と智子ちゃんじゃ誰が見ても釣り合わないから。向こうはとてもイケメンだし、しっかりした人だし、僕なんかじゃとても相手になりません……」
そう言う僕をみて彼女はニヤリと笑いこう言いました。
「そんなことはありませんよ。十分勝機はある。いや勝ってもらわなくては困ります」
その言葉に一瞬耳を疑いました。
「それってどういうことですか？」
僕は聞き返しました。
「あなたは彼の本当の姿を知りません。あなたが見ている、いやみんなが見ている加藤秋真は仮面を被っているのです」
「彼の本当の顔……？」
再度復唱しました
「そして今回の一連の報道の真実も」
と彼女は真剣に僕を見据えて言いました。
「まずはこれ」
と梢枝ちゃん取り出したのはＩＣレコーダー。
何か録音されているようです。
「では聞いてみましょう」

そこに入っていたのは

「なぁあれって本当のか？　秋真」
そんな質問する男の人。どうやらどこかのドラマ現場のようです。
おそらく共演者なのでしょう？
「あれって？」
「あれだよ。智子ちゃんの熱愛報道」
とぼける秋真に対して説明する共演者。
「ああ。本当だよ？　あの子は俺のものになるために生まれてきたんだ」
「この間まで新人アナウンサーの玉田美由紀、その前はベテラン女優寺本里桜。ホント飽きねえな」
共演者は皮肉を言う。
「うっせー。今まではお遊びだ。でも今回は違う。やっと運命の人が現れたんだ。必ず手に入れるよ。　どんな手を使ってでもね……」
そう言う秋真に
「あ～怖い怖い」
とからかう共演者。
「本番はいりま～す」
スタッフの声が入る。
ここで止まっていました。

「これは？」
そのＩＣレコーダーの中身について聞いてみました
「これとある所に頼んで調べてもらったんです」
犯罪と思いますが、あえてスルーします。

「これが彼の本当の姿です。そう、目的のためなら手段を選ばない。それで何件も事務所がつぶれたということもありました」
「それで今回は？」
と恐る恐る聞いてみます。
「まず彼のお祖父さん、加藤潤一は国会議員ってことは有名な話ですよね？」
確認を取る梢枝ちゃん。
「はい。何度かテレビでみました。それと今回の熱愛報道とどういう関係が？」
その確認に疑問を持つ僕。
「その加藤潤一の支持が多い業界が芸能界。いろいろと芸能事務所から献金をもらったり、芸能事務所の支援もしてます」
芸能界の裏のドンといったところでしょうか？　僕はピンときました。
「ということは利用したということですか？」
思いついたことを即座に聞きます。
彼女はゆっくり大きく頷き
「そう、彼には甘い加藤潤一は彼の言うことを何でも聞きます。不都合が起こればお祖父さんに言っていたそうです。今回も手回しして報道関係者に情報を流し、それを認めさせるのです、圧力をかけて。これを認めないと事務所を潰すとね。もちろんバックに大きな組織があるため上層部は手出しできないため説得するのです。彼女もそのことを知っているので従わざるを得ません。これで今回の件も認めないといけなくなったというわけです。
こうしてこの一連の報道の全容が明らかになったのです。彼女はじっと僕を見て
「これを聞いてどうします？　それでも関係ないと意地を通すか、それとも……」
僕の答えはもう決まっていました。
「……行かせてください……加藤秋真の所へ行かせてください！！

！」
僕がその答えをだすと彼女は一瞬鼻で笑い
「そうこなくっちゃ」
と彼女はどこか安心したように微笑みかけました。
僕たちは彼、加藤秋真の所へと向かいました。

「これでＯＫ？」
と呆れたように尋ねる女の人
「はい。ありがとうございます。これで彼も」
「で君はどうなのよ？　一緒に暮らしてんだし」
その人のお礼にからかう女の人。
「今は関係ないじゃないですか」
と恥ずがるその人であった。

僕たちは向かったのは加藤秋真の所属事務所、和田部プロ。彼女を返してもらいに。
そしてこの問題の終止符を打つため……
「加藤秋真に会いたいんですけど？」
「あの……非常に申し訳ございませんが、一般の方の立ち入りはお断りさせていただいております」
しかし受付で門前払いでした。まぁ当たり前ですがね。
それでも僕たちは食い下がります
「彼に会わせてください！！　話したいことがあるんです！」
「お願いします！」
と梢枝ちゃんも頭を下げます。
すると

「なんだか騒がしいなぁ～」
と彼が階段から下りてきたのです。
ご都合主義お許しを。
「誰かと思えば、君は智子さんに付きまとってるストーカー君ではないか」
わざと大きな声そう言ってニヤリと嫌な笑みを浮かべます。
広いフロアの周りの人たちは一瞬僕を見ます。
「ストーカーだってよ」
「うわ～キモ！」
という痛い視線。
「まぁいいや。僕に話があるって言ってたっけ？　聞いてあげるよ」
「でも次の仕事が」
マネージャーがそれを止めるが適当に理由つけて遅れると連絡しろと振り切った。
「じゃあ行こっか」
そして僕は外へ出た。
「話ってなんだい？　もしかして彼女を返してほしいとかいわないよね？」
秋真は温和な表情で尋ねた。
「そうだよ」
と答えると、彼は僕に近づき思いっきり腹部を殴りました。とても重くずしんと入り僕はその場でうずくまりました。
「信虎さん！！」
梢枝ちゃんが思わず叫びます。
「ふざけんなよ！　寝言は寝て言え！　じぶんの顔を見てみな。誰が見たってキモいんだよ！！　お前なんか誰も相手するわけないだろ！　それに言ったよな？　お前じゃ智子さんじゃ釣り合わないって！　お前なんか二次元の中だけで生きとけばいいんだよ！！！
この！！　この！！」
秋真はサッカーボールをけるように僕蹴り飛ばし、踏みつけまして

ました。
「もうやめてください！　彼、ぐったりしてるじゃないですか！！？　これ以上」
梢枝ちゃんが必死でやめさせます。しかし
「そんなん知らねえよ。こいつが傷つこうが、死のうが。それにおじいちゃんに頼めばこんなのもみ消せるしな。なぁこの最低ストーカーオタク野郎？」
彼は僕の胸倉つかみ一発殴ると僕は吹っ飛びなおも彼は殴り続けます
「なんだ？　ケンカしてるぞ？」
「あれって加藤秋真じゃねえか？」
そしてだんだん野次が増えていきます
「どっちが最低なんですかね？」
ボソリと彼女は口を開きました。
「なんだと？」
と秋真は振り向きます
「結局はおじいさんなんですね？　目的のためならおじいさんの力を使い、無理やり自分の思い通りにしていく。何か不都合が起きればすべておじいさんに尻拭いをさせて。それでいてすべて自分の力でやったんだって思ってる」
口調を強くします
「何が言いたい？」
彼は彼女を睨みつけます。
僕は立ち上がり
「本当に欲しいものは這いつくばってでも誰の力も借りずに自分の力で手に入れようとするもの。少なくともいま言えることは自分で売った喧嘩くらい自分でかたをつけろってことですよ！」
と僕はだんだん彼に近づき、後ろから襲いかかり右ストレートが左頬に綺麗に入り彼は倒れました。
「ぼく勝ったんだ……」
そして僕はいしきが途切れました

眼が覚めると野次は引き、
「目覚めたんだね？　どこか痛くない？」
見上げると智子ちゃんの心配そうな表情がありました。
「智子ちゃん！！　なんでここに？　痛い」
僕はびっくりしました。しかし体は動かせません。
「大声出すからよ。梢枝ちゃんから連絡あってね。急いできちゃった」
と満面の笑み最高にかわいいです。
「ありがとう。加藤秋真はどうなった？
僕お礼を言ってその後動向を聞きました。
「病院に運ばれたよ？　加藤さんの車でね。結構騒ぎが大きかったからニュースになりそうな感じだね」
深刻な彼女の口調に僕は
「そ、そうだね……人気若手俳優に傷をつけたって厳しい非難をうけるかもね……」
僕はいつになく落ち込みます。すると
「なんてね。今回は裏で加藤さんが手を回してこの事は表沙汰にはならないようにしてあるから、大丈夫」
安心する一言。
「そっか」
ホッと一安心。
「そういえば梢枝ちゃんから聞いたよ？　秋真のでまかせ聞いて信じたんだって？」
でまかせ？　何のことでしょうか？
「なんのこと？」
尋ねてみました
「罰ゲームでいやいや付き合ってたって」

「いや、それは……」
うろたえる僕。
彼女は膝の上にある僕の額をペチンと叩き
「信じたんだ？　ひど～い私、そんなに信用されてない？」
彼女はため息をつきます。
「そんなことないよ」
必死でフォローします。
逆効果だったみたいで
「やっぱり信用されてないんだね……」
さらに落ち込むと
「仕方ないな～信用出来ないのなら信用させてあげる」
こう言って彼女の顔は近づけ何度目かの唇を交わしました。
初めてよりもドキドキしたかもしれません。
「これで信用できた？」
恥ずかしそうに顔が赤いです。
「う、うん。ぼ、僕も智子ちゃんに釣り合うように頑張るから！」
ムードをぶち壊しのここでいう必要のない宣言をしましたが、彼女は少し笑い
「頑張って」
と包み込むような表情でその一言だけでした

翌日
朝、僕はいつものようにテレビをつけました。
それを見た瞬間かたまりました。
やっていたのは朝の情報番組。いつものように芸能ニュースに芸能記者の人と女子アナがスポーツ紙の1面の紹介をしている。そこには
「加藤秋真ＶＳオタク、勝者はオタクトモちゃん、勝利のプレゼント」

とでかでかと書いてありました
記事の内容はもちろん昨日のことキスの写真まで載せてありました
「嘘だろ……」
こうして僕たちの関係は公に知られることになったのです

第２１話　いや勝ってもらわなくては困ります（後書き）

ついに2学期、生徒会最後の大仕事の文化祭の準備に励む伊織であったが・・・

次回、大丈夫ですか？

伊織さん～！！！

第２２話　大丈夫ですか？（前書き）

久しぶりの本編です

第２２話　大丈夫ですか？

今日から2学期
みんな元気にといいたいところだが休み明けなので辛そうに登校している。
そんな中、とある一室だけ元気に活動しているところがあった。
そこは生徒会室。
2学期は大きな学校行事が控えている。それは十月の学園祭、そして十二月のクリスマスパーティーと立て続けにある。
クリスマスパーティーは次期生徒会でやるのだが、学園祭は伊織の代、伊織が生徒会長としての最後の行事である。その他にも生徒会長としてやらないといけない仕事もある。なので伊織は報道部の活動と同時に夏休み返上で仕事をしている。
「まだ？」
と倉本がせかす。
「うん。あとこの資料に目を通して、それからこの申請書にもハンコ押さないといけないの。後は……」
とやらないといけないことを列挙する伊織。
「そんなにあんの？」
と倉本はため息をつく。
「仕方ないでしょ！！　あんたと違って伊織お姉ちゃんは忙しいのよ！」
と一緒待っていた西岡が呆れる。
「どういう意味だよ！！？」
「そのまんまの意味よ」
「なんだと！」
といつものようなケンカが勃発した。
「まぁまぁ」
とそんな2人をなだめて

「2人とももう帰っていいわよ？　遅いから」
と言われて
「でも……」
「それじゃ……」
2人が躊躇するが
「いいから、いいから」
と2人は背中を押されまるで追い出されるかのように生徒会室を後にした
「大丈夫かな？　伊織お姉ちゃん」
「まぁ大丈夫だろ？　俺にしちゃ伊織ねぇ～に似合わないもうすぐ生徒会長をさっさと辞めてくれるから嬉しいんだけどな」
心配する西岡に対して思ったままを言う倉本。
「何よ？　それ！！　伊織お姉ちゃんじゃ生徒会長勤まらないってこと！！？」
それの怒りをぶつける西岡。
「そんなんじゃねえよ！」
倉本は否定する
「じゃあなんで……」
西岡は質問する。
「どうでもいいだろ？」
とぶつかり合う2人であった。

僕の家では
「今日も遅いね？　帰ってこないのかな？」
「忙しんでしょ？　なんだかんだで生徒会長はやることたくさんあるからね。しかも現会長としては最後の大仕事だから気が抜けないんじゃない？」
最近ほとんど伊織は家に帰ってこない。

というかもう家族のようになっているのが不思議なのだが……
「大丈夫かな？」
「だいたい生徒会長はもともと住んでるとこ違うでしょ？」
「そうだけど……」
心配する僕をよそにあっけらかんとしている茜。
夏休みからずっと学校に出ているが、ここのところずっと帰ってくるのが遅い。帰ってこない時もある。
（ホント大丈夫かな？）
僕は心配するのであった。

それからは2週間は何事もなく過ぎて行った。
「これはあっちに運んで。あれはこっちに。それは向こうに……」
と指示を出す伊織。
「こんなにいっぺんに言われてもできねぇ～って」
「そんなこと言わずちゃっちゃと働く！！」
と弱音を吐く倉本にげきを飛ばす西岡。
「へいへい」
「会長、各クラスの出し物と予算案です。あとこれは神山女学園との会合の決算書類です」
と会計の人が伊織に持ってくる。
「会長？　意見箱に入っていた意見です」
「どれどれ」
伊織は次々とくる書類に目を通す。
「会長？　明日の意見交換会の資料ですが、どうされますか？」
「そうか。明日だったわね？　まだできてないな……わかった。今日中に作りますから」
意見交換会とは言葉通り、教師と生徒のお互いの意見を交換する会議のこと。主に生徒側の要望や教師側の意見などを話し合う。その

生徒側代表として伊織が行くことになっている。
「何か悪いね？　生徒会役員でもないのに手伝ってもらって」
とお礼を言われる2人。
「そうだぜ！！　なんでこんなこ……うぐっ」
と文句を言う倉本に肘鉄をくらわせ
「全然いいですよ。伊織お姉ちゃんにはお世話になってますから」
こうして生徒会の仕事が行われていった。
そして学その日がやってきた。

「もう朝か……」
伊織は今日も生徒会室で寝てしまっていた。どうやらここの所やらないといけない仕事が多いので生徒会室で寝泊まりするようになった。
「めちゃくちゃ寝てしまったな～」
久しぶりに長い睡眠を取ったのにもかかわらず、体がだるい。
長丁場の仕事の疲れだろう。確かにきつくてしんどいが、みんな不眠不休で頑張ってくれてるのに疲れたなんて言ってられない。
「よし！！　仕事、仕事！　仕上げなきゃ」
と両手で頬を叩き気合を入れていつものように仕事に取り掛かった。
仕事は一通り終わり、保健室に向かう。鍵は掛かっているが、生徒会室に全ての教室のスペアがあるので心配ない。
測ってみると
３８．２度
どうやら完璧に風邪をひいてしまったようだ。
しかし
（このくらいなら大丈夫ね。今ここで休んだりしたら、確実に迷惑が掛かっちゃう）
と我慢し、伊織は生徒会室に戻っていった。

そして授業が始まり、一日が動き出した。

放課後
「最近、伊織さんの顔色悪いですよ？　大丈夫ですか？」
と生徒会の人が心配して声をかける。
「ええ。大丈夫よ？　ちょっと疲れてるだけだから」
と否定する伊織。
「そうですか。無理はしないでくださいよ……」
生徒会の人はその一言だけであった。

迎えた翌日3時間目の休み時間
「ちょっとトイレ行ってくるね？」
と伊織と教室からトイレへ向かった。
用をすませ、教室に戻るところであった。
（なんか思うように動かない。フラフラする……）
バタッ

「は～？　伊織ねぇ～が倒れた！！！？」

第２２話　大丈夫ですか？（後書き）

倒れてしまった伊織、倉本の発言の真意が明らかに？
次回そっか……ありがとう

第２３話　そっか……ありがとう（前書き）

すいません・・・２か月ぶりです（汗）
おそらく不定期になるとおもいますがよろしくお願いします
今インフルエンザはやってますんで気をつけてください

第２３話　そっか……ありがとう

は～？　伊織ねぇ～が倒れた！！！？」
と血相を変えたのは倉本だった。

「こっち、こっち早く来なよ～」
少女の声が手招きしながら遠くの男の子を呼ぶ。
「待ってよ～伊織ねぇ～」
息を切らしながら遠くから女の子を追う男の子。
「早くしないと日が暮れちゃうよよ～うわ～」
ぽちゃん
足を踏み外し橋の上から川に落ちたようだ。
浅瀬でただ尻もちをついただけだった。
「いった～い」
そして追いついた男の子が心配そうに手を差し伸べる。
「大丈夫？　たく伊織ねぇ～はしゃぎすぎなんだよ」
橋にあがらせ男の子は呆れ顔の男の子。
「だって……」
「だってじゃないの！　そんなことじゃいつか大けがしちゃうよ」
うろたえる女の子に忠告する男の子。
いつもそうだ。彼は年下なのに私に注意する。
「う～～」
なにも反論できない女の子は唸り声をあげた。
「時間がないの！　早くいくよ！」
そういって女の子は歩みを進めた。
「ちょっと伊織ねぇ～。大丈夫なの？　伊織ねぇ～」
女の子は濡れた服やケガも、男の子の声も気にせず先へ進んだのだ

った。

「ねぇ～伊織ねぇ～」
「伊織お姉ちゃん？　伊織お姉ちゃん？」
と伊織は呼びかける声が聞こえてきた。
一番最初に目にしたのは覗き込む倉本と西岡。
「ここは？」
（夢か……あんな懐かしい夢を見るなんてね）
と伊織は尋ねる。
「龍二の家だよ？」
と倉本が答える。
そう伊織は家の布団の中。
「いったい私……あ！　意見交換会！」
と伊織が振り返ろうと考えてとっさにできた言葉。
「それは久本くんが代わりに行ってくれてますから大丈夫ですよ」
と僕が安心させる。
「びっくりしたぜ。職員室にいったら伊織ねぇ～が倒れてっからよ」
それで伊織の中の空白だった記憶がうまる。
「それで？」
「保健室に連れてって、先生に測ってもらったら熱が３８度まであって」
「それで強制帰還されたってわけ」
倉本と西岡が説明する。
「そっか……ありがとう」
お礼をいう伊織。
「たくっ重かったぜ。太った？」
と倉本はデリカシーのかけらもないことを聞いてくる。
そんな倉本に対し

「レディーにそんなこと聞かない！」
と西岡ひじ打ちを食らわせる。
「当然だ」
「ですです」
「当たり前よ！」
由良と遥と茜が西岡に同意する。
「何すんだよ！！　みんなして……」
西岡に不満をぶつける倉本。
「当たり前でしょ？」
と西岡が反応する。
「というのはウソで本当はものすごく軽かった。ちゃんと食事とか取ってんのかなって、生徒会で大変だったんだな～って。どうせ伊織ねぇ～ことだから前しか見えてなくて無理してもまっしぐらだからさ。いい休憩時間になるんじゃない？」
「だいたい。体が資本なんだから、からだ壊したら元も子もないしね？」
と二人は気遣う。
「ということで今日一日絶対安静だからね！　いい？　絶対安静！」
とと西岡が念を押す。
「わかったから」
伊織は少し苦笑い。
「それじゃ、これからお粥つくってあげるね？　谷口君？　台所借りるね」
と二人は台所に向かった。

勢いで2人は来たもののお互い何か気まずい雰囲気。
「この間のことなんだけど……」

口を開いたのは西岡だった。
「なんだよ。もうちょっと米入れて」
答える倉本
「ごめんなさい！　伊織お姉ちゃんがあんな風になるなんて……ちゃんと聞いておけばよかった」
思い切って謝罪する西岡。
しばらく考えた後倉本が口を開いた
「いや俺があんな言い方をしなければよかったんだ。それにちゃんと理由を言わなかった俺も悪い」
「え？」
倉本の答えに西岡再度聞き返した。
「いずれいつかこうなることが分かってた。だから生徒会長にはなって欲しくなかったんだ」

明神伊織。俺、倉本俊哉の一つ上の幼なじみ。彼女はとてもかわいくて、明るくて、何でも知ってて、何でもできて近所からも評判の女の子。そんな彼女は俺にとってまさにヒーローだった。
でも彼女にも限界があった。あれは忘れもしない彼女が小学一年生の時。

「俊哉！！　私ね劇でお姫様になったのよ！！」
目を輝かせて嬉しそうな笑顔。
きっと立候補にしたにしても推薦されたにしても満場一致で決まったのだろう。
その情景が目に浮かぶ。
「すごいよ！　伊織姉ちゃん！！」

俺も自分のことのように喜んだ。
こうして劇の練習を始めた。家でも練習をしていた。一人じゃ感じをつかめないと家での相手役はもっぱら俺であった
内容は身分の違いでの禁断の恋愛物語であった
「ダメなんです！！　貴方じゃないと。本気で愛せるのはあなただけ」
「姫様、ありがたきお言葉。このような者にそういっていただけるとは！！　しかしなりませぬ！　私(わたくし)めなんかを好きになっては一族の恥になります。そうなれば王族の顔に泥を塗ることになります！」
こんなセリフである。当時、その台詞の意味もわけもわからなかったがが未だに覚えているセリフだ。もちろんたくさん練習したからでもあるが、その台詞を言う伊織ねぇ～の表情がドキドキして胸が苦しくなるようななんともいえないものでそれがとても印象深かったからだろう。今でもその気持ちはよくわからない
そしてたくさん練習して本番をむかえた。みんなが止めても人一倍練習して本番に臨んだ。
それがあだとなった。当日、熱を出したのだ。しかし親にも何も言わずそのまま学校に行き、彼女は姫を見事に演じきった。俺も見たが、あの拍手今思い出しても鳥肌がたつ。
暗幕が下りて気が抜けたのかとたんに倒れ
「明神さん！！」
という声が体育館中に鳴り響き病院に運ばれた。
3日目が覚めなかった。
診断の結果は練習のしすぎによる過労であった。
彼女が伝説になったのは言うまでもない。

「ていうことがあって、それからあんまり頑張らないといけないようなことをしてほしくなかったんだ」

「そうだったんだ」
昔のことを西岡に話す倉本。

そして伊織は一人で考える。
（いままで、突っ走ってきたのかな？　私。周りも見ることさえせずに……今度はゆっくりと歩いていこう。２人が気づかせてくれたのよね？　ありがとう）
と心の中で２人に感謝する伊織。

絶対安静と言われ、たまには２人甘えようと思ったのだが
「できたよ」
そういって部屋に入ってくる２人。
「おいしそうです」
「食べていいか？」
「よくできたね」
「ダメに決まってるでしょ！」
「そうだ、これは生徒会長のため作ったものだ」
それぞれの反応をみせる遥、斉藤、僕、茜、由良。
どうやらそうはいかないようだと感じる伊織であった。

第２３話　そっか……ありがとう（後書き）

グラス君、師匠について武者修行！？
次回、シショウ！！！
茜ちゃん頑張ってね（爆）

第２４話　シショウ！！！（前書き）

どうも2週間ぶりの更新です

第２４話　シショウ！！！

グラスがやってきて数か月が過ぎた。
茜を師匠と呼んでいる。茜が、何をしたのかわからないけど
少なくとも僕が想像もできない衝撃的なことが2人には起きたのだろう。
そして今日も
「シショウ！！　オハヨウゴザイマス！！　キョウモゴシドウノホドヨロシクオネガイシマス！！」
やたらとうまい日本語で校門の前に立っていた。
「はぁ～」
彼女は朝から重い重いため息をついて
「おはよう」
とあしらうように茜があいさつし僕たちは彼を素通りする。
「ニモツオモチシマス」
そそくさと近づき茜のカバンを持とうとする。
まるで付き人のようだ。
しかし
「いいって、いいって。そんなことしなくて」
断る茜。
「ソウデスカ……」
しょんぼりするグラス。
それでも朝から松〇修造す並のテンションだ。一日だけでも疲れるというのにそれが毎日続いてる。これでも以前よりは大分落ち着いた方だ。
以前はもっと……

数か月前
グラスが弟子入りを志願して間もない頃
「シショウ！！！」
茜が彼の視界に入るたびに全力疾走で駆け寄ってくる。
「オハヨウゴザイマス！！　キョウハ、ドウイウシュギョウヲヤルノデスカ？」
朝から目を輝かせやる気満々のグラス
「修行って……別に何もしないわよ」
苦笑しながらそう答える。
「ナニモシナインデスカ？」
再度語りかけるグラス。
「ええ。そうよ。だからいちいち私のところに来なくてもいいの」
遠まわしに避けていた茜だったが
グラスはというと
（ナニモシナイトイウコトハムノキョウチナルトイウコト。マエニキイタコトガアル。ジャパンデハシュギョウニハイルマエニココロヲムニシテムノキョウチ二シテハゲムト。スナワチ、ムノキョウチニタドリツカナイトシュギョウハサセナイトイウコトカ！！）
こう解釈したようだ。
「サスガシショウ！！！　セイシンノシュギョウデスネ！！　イツドンナバショデモシュギョウヲナサレル。ヤハリチガイマスネ！！」
無駄に感動するグラスに
「違うから……」
冷静に突っ込む茜。

そして翌日
グラスは教室で座禅を組んでいた
「なにしてるの？」

「何で座禅なんてくんでんの」
「どうしたの？　急に」
クラスメイトの疑問の嵐も
「ミナサン！！　シズカニシテクダサイ！！ムノキョウチニナラナイトシュギョウニハイレナイノデス！！」
と一喝するグラスに？マークが頭の中にいくつもつくクラスメイト達であった。

その数日後
「シショウ！！　オハヨウゴザイマス！！！」
誰に教えてもらったのだろう？　玄関をでるとグラスは家の前に来ていた。
「なんで君がここにいるの？」
とても自然な質問をする。すると後ろから
「あらグラス君だったかしら。おはよう」
なぜか母親があいさつをした。
「オハヨウゴザイマス！！　シハン！！」
グラスは返す。
「師範？」
僕はグラスに聞いてみる。
答えは
「シショウノオヤイコールシハンデ～ス！！」
どこで覚えたか知れない間違った日本語であった。
（間違ってるよ……）
と心の中で突っ込んだ。
「あ～グラス君ね、昨日家を探してるようだったから私が教えたの。それに茜を師匠と呼ぶのに見どころを感じてね」
あ～……また余計なことをしてと無駄な母の心づかいに逆に感謝さ

え芽生えてしまう。
「グラス君！　茜を師匠に選ぶとはお目が高い！！」
「それどういう意味よ！」
そう言う母親に不服そうな茜。
「自分の胸によ～く聞いてみなさい」
さらりと毒を吐く母。
「ソレデハシショウ！！　カバンオモチシマス！！」
「いいって。これは私のカバン私が持つのが当たり前なの！」
遠慮というより嫌がっていた。
しかし
「サスガシショウ！！！　コレデマイニチマッスートレーニングシテラッシャルノデスネ！！」
グラスはまたもや感銘を受けたようだ。憧れの眼差しで茜を見ていた。
「いや違うから……」
一つ一つえらく感動するグラスにため息交じりで突っ込んだ。

放課後
「シショウコレモッテクダサイ！」
グラスは茜にカバンを差し出す
茜はそれを持つが重さに負け地面につけてしまった。
「重っ！　どうしたの？」
びっくりして思わず聞いた。
「シショウヲ、ミナラッテバッグニ１０ＫＧノオモリヲイレマシタ！」
嬉しそうに茜に語るグラスであった

その数日後
「次、漢字のテストだからちょっとテキストを見ておこう」
茜は漢字のテキストを机に出しておもむろに開き出題されそうなところを
机に指で何度も書いていた。とても茜らしい行動だ。
それを見たグラスは
（キットユビノチカラヲキタエテイルノデスネ！！　コマカイトコロマデトレーニングヲサレテイルトハ、サスガシショウ！！）
また間違った感動をし、突き動かされたグラスはものすごい形相と勢いで机に指をこすりつけた。
（シショウ！！　スコシデモチカヅケルヨウニガンバリマス！！）
こうしてグラスはどこか違う修行に励むのであった。

第２４話　シショウ！！！（後書き）

遥はある日とんでもないものを拾った
次回
先輩も見に行きません？
何を見に行くのかな？

第２５話　先輩も見に行きません？（前書き）

なんだかんだであけましておめでとうございます
かなりさぼ・・・いや時間がかかりました。
今回は強引すぎる展開なのであらかじめご了承ください・・・
そしてしょぼいです（あ！　それ、毎回だったｗｗｗ）

第２５話　先輩も見に行きません？

文化祭も伊織が体調を崩したものの、何とか成功してから数日がたった。
季節をすでに秋。銀法山（ぎんほうざん）も鮮やかな頬紅を塗っていた。
そのころ僕たちはというと

「ホントに綺麗ね～」
感想を述べる茜。
「うわ～……」
せわしく周りを見回す遥
「たまにはこんなのもよいな」
由良はクールに抑えてはいっているはいるが
「セリフと顔が違わよ」
目をきらきら輝かせている由良に伊織はニヤリと突っ込みをいれる。
「そうだな。あんなに行きたくないといっていたが、５日前から準備していたからな。昨日も遠足に行く子供のように夜眠れなかったしな」
今日に至るまでの行動を厳燐丸が赤裸々に語った。
（そうだったんだ……）
「うるさい！」
厳燐丸に反応する由良だが
「え……？　私うるさかったですか？　すいません！　すいません！」
厳燐丸の言葉が聞こえない遥はひたすら謝る。
「いや、違うのだ。すまぬ」
遥に謝罪する由良であった。

一方男性陣をというと
「ねぇ～少し休もうよ」
弱音を吐く倉本。
「なにいってるのよ！！　さっき休憩したばかりじゃない。あと少しよ」
西岡はそんな倉本に説教をたれる
「いいじゃんかよ！　少しくらい！」
「だめに決まってるでしょ？　大体あんたはね太りすぎなのよ！少しは痩せなさい。そうすればすぐに疲れなくても済むわ」
彼女はいやみのごとく続ける
「なんだと！　言わせておけば！」
「なによ！」
犬猿の仲なのかケンカするほどなんとやらなのかわからないが、いつものようにケンカが勃発。
「山を歩く姿もいいぞ！！」
僕の歩く姿に興奮する斉藤。おそらく危険きわまりない発想だろうそう紅葉狩りに来ていた。
鮮やかな紅葉にみんなそれぞれの反応だ。
そして目的地に着くと
「これうまいこれも……」
「また太るわよ」
たくさん作ってきた弁当をほうばる倉本に呆れた一言を放つ西岡。
そうやってみんなで弁当を食べたり
「それ～」
「どうだ」
「まだまだ」

バレーボールで遊んだり
「これ綺麗な葉っぱ。うわ～これは大きいな～」
落ちている色づいた葉っぱを拾ったり
みんな各々の紅葉狩りを楽しんだ

自宅に帰り着きニュースを見ながら夕食を取っていた。するとこんなニュースをやっていた
「今日３時４０分頃銀法市の民家に熊が押し入りまもなく射殺されました」
近年全国的に熊の被害が相次いでいる。ここ銀法市も例外なく増えてきていた。
「またか。最近多いね」
「そうだね」
茜とそんな会話をしているとバーンと銃声のような音が大きく鳴り響いた
「今の何だろ？」
「さ～」
僕たちにも聞こえて茜に尋ねてみたが茜はあしらうようにそう答えた

翌日
「せんぱ～い！　おはようございます！」
登校しているとさわやかなあいさつをする遥に遭遇した。
「おはよう」
僕たちもあいさつを返す
「先輩実はネコを拾ったんですよ」
そう話題をふる遥

「へ～どんな品種？」
茜が質問。
「多分雑種だと思います。でもかなり大きいですよ？」
と彼女は答える
「そうなんだ」
きっと大きくなって飼えなくなったから捨てられたんだね……かわいそうに……
自分の都合で簡単にペットを捨てる人間に怒りを覚えた。そしてちゃんと育てている遥に尊敬なようなものを感じた。
「困るようなことがあったらいつでも言ってね」
そういっボクは教室へと向かった。

数日後
茜と登校中、遥に出くわした。彼女は傷だらけ。心配になり声をかけてみた
「遥ちゃん、大丈夫？」
「先輩おはようございます。なにがですか？」
遥はいつものように元気だ。
「いや、その傷……」
いろいろと怖いので恐る恐る聞いてみる。
「あ～これですか？　ライアンと遊んでできました。あの子とてもやんちゃなんですよ。昨日もコンクリートの壁に穴あけたんですよ？　ダメだっていってるのに」
ライアン？　拾ったネコのことだろうか？　今さりげなくすごいことを聞いた気がする。
「へ～そうなんだ？」
苦笑いであいずちをうつ僕。
「そうだ！　先輩も見に行きません？　かわいいですよ？」
無邪気な少年のような目で遥が誘ってきた。

（そんな目をされたら断りきれない……）
「わかったよ。行くよ」
こうして僕は放課後大きなネコを見にいくことになった

放課後
遥に押し切られたせいかなぜだかとても憂鬱な気分だ
かといってあの無邪気な目は勝てない……
そんなことを考えていると遥が正門にやってきた
「先輩！　お待たせしました！　行きましょう？」
彼女には疲れという言葉はないのか僕の手を引きどんどん進んで行く。
まるで自分の楽しみを人に共有させたいそんな雰囲気だ。
（そんなに好きなのか）
遥を見て僕はそう思った　「先輩！　見えてきましたよ」
遥に操られるがまま歩み進めると廃墟になった工場らしきものが見えてきた
「工場？」
僕は頭をかしげた
「家じゃ飼えないのでこうやって飼ってるですよ。ライアンの大きさから言ってもここが最適なんですよ」
そんな会話をしているうちに僕たちは工場の前に立っていた

「廃工場で密会なんて変わった趣味してるわね」
今までいなかったはずの伊織がそこにいた
「違います！　そんなんじゃありません！！！　ていうかなんでここにいるんですか！！？」

僕が驚くとはぁ～とため息をついて
「毎回毎回驚いて同じようなこと言って進歩ないわね～なんでって取材に決まってるでしょ？」
それがさも当然かのような顔をする
（僕……何も間違ってないよね……）
疑心暗鬼になる
「密会だと！！！　世間は許しても俺が許さん！！　谷口は俺の恋人だからな！！」
どこから現れたのかわからいきっぱりと危ない宣言する斉藤
「違いますから……」
斉藤のテンションの高さに少しブルーになる僕
「密会！！！？　龍二いつからそんな関係になったの？」
茜の目が怖い！！　憎しみが滲みでてるよ！！
「だから違うって……はる」
僕は搾り出すように声をだした
「密会だと！！？　いかがわしい」
「男はみなそんなもんだ」
由良節にフォローする厳燐丸。
誰も僕の話を聞いてくれないどころか話さえさせてくれない……
どうすればいいのかと頭を抱えている僕をよそに
「ライア～ンごはんだよ～」
大きなネコを呼ぶ遥
そこからおもむろにのさのさと姿を現したのは
「もしかして……」
「これが……」
「ウソ……だよな？」
僕と茜が絶句し、斉藤が恐る恐る聞いてみる。
「そんなことだろうと思った。遥チャンらしいわね」
あきれる伊織。
「なんのこれしき」

さわやかに言ってのける由良。

それは熊だった

第２５話　先輩も見に行きません？（後書き）

なぜか熊を拾った遥
そんな遥に黒い刃（？）が襲い掛かる
次回
ダメですよ！　ケガしてるんですから動いちゃいけません！！
遥ちゃん……すげぇ～！！

第２６話　動いちゃいけません！！（前書き）

どうも2週間ぶり？です
今回はすごく強引すぎで、いろいろ超展開すぎるところがありますが気にしないでください（汗）

第２６話　動いちゃいけません！！

「ライア～ンごはんだよ～」
大きなネコを呼ぶ遥
そこからおもむろにのさのさと姿を現したのは
「もしかして……」
「これが……」
「ウソ……だよな？」
僕と茜が絶句し、斉藤が恐る恐る聞いてみる。
「そんなことだろうと思った。遥チャンらしいわね」
あきれる伊織。
「なんのこれしき」
さわやかに言ってのける由良。

それは熊だった
「みんな！！　死んだふり！！！！」
僕はパニックになりそう叫ぶ
すると茜、斉藤は一斉に寝転がり死んだふりをする
「何をしてるんですか？」
状況がわかっていないのか遥は一人キョトンとしていた
由良は
「これくらいでわめくとは情けない」
そう言いながら厳燐丸を取り出し熊に正面突破を試みる
（結局由良ちゃんも怖いんじゃん……）
内心そうつぶやいた。
「ダメですよ～！　ライアンがけがします～」
遥は由良を必死で止める
熊はというと僕の叫び声に驚いたのか僕たちにめがけて一直線で向

かってくる。
「コラ！　ライアン！　ダメですよ！」
と熊をしかる。
まるで遥が母親のようだ。
すると熊の足は失速したものの変わらずこっちに向かってくる。そして僕の前にやってくる
（やばい！！）
「僕を食べてもおいしくないよ！！」
思わず熊に向かって助けを請う。
しかしその言葉もむなしく熊の顔が僕に向かってきてドロッとした粘液が僕の服に付着する。
（もうダメだ！！！）
覚悟して体自然とに力が入るが一行にドロッとする粘液が付着する以外は何も起こらない。
すると
「アハハハハハ！！　くすぐったいよ！」
僕は笑い出した。
熊もといいライアンを見てみると僕の全身を舐めていた。大きな舌で。
その後茜や斉藤も笑い出した。同じことをされたようだ。
じゃれているらしい。どうやら僕たちは気に入られたようだ。
遥は準備していた大量のライアンの食料をどんどん取り出していく。中には明らかに業務用だろうというような大きい袋や何十人用かわからない大きな魚、ダンボールに入っている飲み物が入っていた
遥によればこれが一食に食べる量らしい。おそらく食費2か月分ぐらいだろう。恐ろしいほどの食欲。
まぁ秋だから冬のためにたくさん食べなければいけないけど

「確かに大きなネコだけど……」
僕は改めて目の前の大きなネコの迫力に苦笑いしてしまった。
「ねぇ～あれ何？」
そんな時茜は熊の前足に指をさす
包帯が巻いてあった
「うん……包帯だな」
斉藤が考え込む
「どうしたんですか？」
考え込む斉藤に声をかける
「そうか！　わかったぞ！　宮内、お前熊と戦ったんだな！！　だから負い目を感じた宮内は熊を世話をしだした」
突拍子もないことを言い放つ斉藤。
「なわけないじゃないですか？　いきなり何言い出すんですか……」
呆れ果てる僕。
「それでどこからこれを拾ってきたんだ？」
厳燐丸をしまい由良が尋ねる。
「実は……」
遥が口を開いた

みんなと紅葉狩りにいったあの日帰り道
私はみんなと別れて家に帰ってるうちに道に迷ってしまいました。
気づけば周りはまったく知らないところでシャッターが閉まっているお店ばかり。それに外灯も疎らで私の右側には林か森か木がたくさん密集していました。
そこをぽつぽつ歩いていると遠くから黒い物体が現れました。
何かな？と思っていると物体がのしのしと私の方に向かってきます。

その影はしだいに外灯に照らしだされ姿があらわになってきました
それは焦げ茶色の大きな体につぶらな瞳の熊でした。それはまるで
途方にくれてに歩いてるようでした。
それに足を引きずっていたのでよく見てみると前足から出血が。恐
らく猟師の人に撃たれたのでしょう。
とにかく熊さんの治療をしなければいけません。
しかしお腹が空いていたのか私を見たとたん襲い掛かってきました。
今は冬眠に向けてたくさん食べないといけませんからしかたありま
せん。
「ダメですよ！　ケガしてるんですから動いちゃいけません！！」
そんな熊さんに私は一喝しました
すると熊さんはおとなしくなりました
とりあえず常備していたマクロンとバンソウコウで応急処置をして
熊さんを匿う場所を探しました　そしてあの場所にたどり着いたの
です
その後ちゃんと家から救急箱を持ってきて手当てをしました
その時
「こら！　じっとしててください！」
熊さんは少し暴れたもののなんとか手当てができました
そして家にある食料をたくさん持ってました
きっと足りないだろうけど……
「たくさん食べてくださいね」
私はその食料を差し出しました
熊さんは恐る恐る差し出した食料に向かうと臭いを確かめ、ゆっく
り顔を近づけ食べはじめました
「そういえば……まだ私名乗ってませんでしたね？　私宮内遥って
いいます。あなたの名前は……あるわけないですよね……」
黙々と食べている熊さんの横で私はしばらく考えました
「う～ん、何がいいかな？」
ふと思い浮かびました

「ライアン。そうだ！　ライアンよ！　今日からあなたの名前はライアンです！」
そうやって私は勝手に熊さんの名前を決めたのでした
それから私とライアンの日々が始まりました

「てなわけなんです」
今までのことを話した遥
「まぁ大変だったんだね……」
どこからツッコめばいいかわからないから僕はそう苦笑いを浮かべるしかなかった
「ホントに何から何まで遥ちゃんらしいわね」
珍しく優しい笑みの伊織
「それにこの子とも仲良くなるのも遥ちゃんぐらいしかいないだろうし」
冗談半分のため息をつく茜
「お前にそんな一面があったとはな」
驚く斉藤
「でこのライアンとやらはいつまで面倒みるつもりだ？」
現実に引き戻す由良
「そ……そうですよね？　いつまでもっていうわけにもいきませんし……ケガが治るまでみようと思ってます」
そう由良を真っすぐ見つめた
「そうか」
そのサッパリ一言で終わった

その日から僕たちもライアンの世話に参加するようになった
「食べすぎだよ」

大食いのライアンに圧倒される僕
「ちょっとくすぐったいってば」
ライアンになめられ笑う茜
もともとライアンが人懐っこいのかそれとも遥がそうさせたのか警戒心のに強い熊にとってこうやって人間と遊んでることはとても珍しい。
それから数週間が過ぎ傷も大分癒えてきたころ
「ここか」
一人の男が廃工場の前にたっていた
「ちょっと君たち？　いいかな？」
男の人にそう言って中に入ってきた
しばらくライアンの全身をくまなく観察し
「間違いない」
一人男の人は納得してこう告げた
「これからこの熊を射殺します」

第２６話　動いちゃいけません！！（後書き）

次回
やっと2クール目の話が終えた・・・
ということで次回の第２７話は番外編
やっぱりさ、更新が途絶えるのはあれじゃね？
え？　まだ遥ちゃんの話終わってないよ～？

第２７話　やっぱりさ、更新が途絶えるのはあれじゃね？

「２クール書くのにどんなに時間かけてんのよ！！！」
茜はご立腹のようだ。
「どうしたの？　茜」
いきなりの怒鳴り声に僕は混乱する。
「普通、２クールの終わりは半年後でしょ？　だからこの作品も２００８年の６月に連載開始して週１回のペースで更新してるんだったら本当なら２００８年の１２月５日にここまでいかなければならないの！」
まくし立てる茜
まずクールの説明をすると、よく放送業界使われる期間のこと。３ヶ月で１まとまり、つまり四半期のこと。なので基本、３ヶ月周期で番組の変更が行われるのだ。２クールとなると約半年なので茜の言うとおり２００８年の１２月５日にこの２７話がアップされなければならないのだ。
しかし今は２０１０年の６月。３年をかけて２７話まで書いているのだ。
週一更新が目標であるこの作品。目標とはいえあまりにも時間がかかり過ぎている。
「ということでどうやったら時間をかけずに更新できるかをみんなで考えようと思います」
こうして第２回企画会議が幕を開けた。

「まずこうなった原因を考えて見ましょう」
まず手を挙げたのは伊織だった
「はい、伊織さん」
僕は指名する

「ただたんにネタが思い浮かばないからじゃない？　じゃないとこんなにあかないでしょ」
伊織が指摘する
確かにそうだ。いきあたりばったりで出来ているこの作品
ネタがつきやすい
この話もその場で作っている。
なのですぐに手が止まる
「それにいつも見切り発車だしね」
「そんなこと言ってはいけません！」
伊織の身も蓋も無い一言に思わずツッコんでしまう僕

「そうか？　他に原因があると思うが……」
珍しく真剣な面持ちで口を開く斉藤
「というのは？」
その面持ちに期待して意見を仰いで見る。
「それは、俺とお前の愛が足りないからだ～！！！」
「はい？」
そんな答えに期待した自分がバカだったと体に錘をつけたようにとても重いため息をついた。
「他に何か意見ありませんか？」
「ちょっと待て！！！　まだ終わっとらんぞ！！！」
そんな斉藤の抗議をスルーして次の意見を仰ぐ
「はい。他に何か意見のある人？」
おもむろに手を揚げたのは倉本だった
「はい！　倉本くん！」
「ネタが浮かんでも先延ばしにするからじゃないか？」
それも一理ある。
だいたい展開は決まっているのになかなか書かない時も確かにある。

例えば１７話・１８話も現にそうだったしそうかもしれない。
「そうだ！　展開は決まっていてもそれまでのしっかりしたプロセスが無いから手が止まり遅くなるのではないか？　ようはプロットが不十分ってことだ」
由良は名案とばかりに手を上げて論じる
「プロットとは何だ？」
斉藤が質問する
「プロットとは物語の簡単な構成です」
プロットが不十分との意見がでたがいままでプロットをほとんど立てたことがない。痛いところつかれてしまった。
「大丈夫ですか？　なんか作者の人の精神ダメージがじわじわきてるみたいですよ？」
心配そうな遥。
「いいわよ！！　いつもどうでもいいなろうの企画に飛びついて私たちをおなざりにしてるんだから！！」
すねる茜
「こらこらそんなこと言っちゃ！！」
これも的を得ている。ベタ恋だシャッフルだなんだって企画に参加してなかなか進まなかったのも事実。
「しかも全部期限過ぎての投稿だしね」
伊織が口を開いた
「ネタがないなら元から参加するなっての！！」
茜がまた暴言を
「それはさすがに言い過ぎだって」
僕がフォローする
「そして今度はなろうじゃなくて友人とゲーム作り」
どこからその情報を得たのか伊織が発言する
「何よ！！　それ！　そんなに私たちは必要ないこと！！？」
声を荒げる茜
「そうでもないみたいだぞ」

落ち着いた斉藤が一言
「毎回企画に参加しているときでもちゃんと俺たちのこと考えてるらしい」
珍しく斉藤がフォロー役に回った
「どういうこと？」
まったくわかっていないよな反応をする茜
「次、どの人のどの話をしようとかだいたいこういう展開でとか考えてるようだ。第一自分自身でも遅すぎることを焦ってるしな」
作者の思いであろうことを推測する
「もともとはこれを公募にだそうと考えているみたいよ。だいたいこれが一番お気に入り件数が多いし、アクセス数も多い。実質作者の作品の中で一番人気をそんな風と思うわけないでしょ」
冷静に分析する伊織
なんだかんだでみんなフォローする
「公募に出すのにこんなペースでいいんですか？」
心配そうな遥
「良くも悪くもマイペースだからね～。この作者は。いつ完成することやら」
僕も先も見えないのでそういうしかない
「そんなんで大丈夫なのか？　書き出して４年はたってるぞ」
不安材料を由良が指摘する
そうなのだ。この作者が小説を書き始めた当初からこれは作られていた。なのでどこかで期限を決めないと完成しないすでに半年以上更新も途絶えていることだし

「やっぱりさ、更新が途絶えるのはあれじゃね？」
唐突に倉本が口を開いた
「なに？」
「エロゲのしすぎだろ」
その一言が一気にこの場所を北極にした。

「それではここで第2回企画会議を終わります」
会議終了後みんな微妙な空気になったのは言うまでもない

第27話　やっぱりさ、更新が途絶えるのはあれじゃね？（後書き）

一緒にすごしてきた熊が射殺？
次回……わかりました
遥ちゃんの完結編

第２８話　……わかりました（前書き）

長らくお待たせしました
なんだか夏が終わってしまいましたね・・・
あいかわらず不定期になってますがよろしくお願いします
ということで今回は遥ちゃんの完結編です

第２８話　……わかりました

「間違いない」
一人男の人は納得してこう告げた
「これからこの熊を射殺します」
その言葉に僕たちは頭が真っ白になった
「どういうことですか？」
自然と口が開いていた
「最近熊の被害が大きくて、この辺一体も今月に入って４件の被害が出てましてね」
説明をする男の人
「疑わしきは処分ですか」
伊織の深刻な顔
「違いますよ。確定しているんです、この熊がやったって」
再度男の人は言う
「なんで」
思わず遥は言葉を発した
「この間の夜、民家が被害を受けまして、その際熊に向かって発砲したんですが逃げられましまったんですよ。右の前足にはそのときの傷があるはずです。そうその包帯が何よりの証拠です」
確かに包帯が巻かれてあった。
「確かに包帯巻いてありますけど……」
それだけで断定されるので困惑する僕たち
「さぁその熊から離れてください。皆さんも標的になりますよ？危ないですから」
男の人はライアンから離れるように促す
そして僕たちは渋々ライアンから離れた
しかし
「いやです」

遥だけは即座に意思を表明し一歩も動かなかった。
「あなたも死にたいのですか？」
「何の罪もないライアンが殺されるのなら私も一緒にいます！！」
男の人の言葉にそう答えた。
「たかが熊ぐらいで本気にならなくなくとも」
男の人はため息をつき下らないというような態度
「たかが熊って……」
低い声で遥でつぶやいた
「だってそうでしょ？　熊は人間を襲ったり、田畑を荒らしたり、危害を加えることしかしませんよ？　そんな危険物を放っておけるわけないじゃなですか」
さももっともらしく振舞う男の人
「そんなことありません」
今にも爆発しそうだが抑える遥
「なんでこんなこと言えるんですか？　現に４件被害が出てるんですよ？　そんな凶暴な生き物を守ろうとするなんてあなたは悪魔の何者でもありません。だいたいこの人間様に刃向かうすら許されないのに刃向かいなおかつ人間様に守られようとするなんてどこまで人間様を愚弄するつもりだ！！」
だんだん発する言葉に怒気が孕んでくる
「なんかイヤな感じだね……」
その光景を見ている茜が口を開いた
「ああ。あいつの言うこと、本当にヘドが出る」
「全くだ」
茜に続く由良に厳燐丸も同意
確かにあの男の人はイヤな感じだ
話し方もおそらく高学歴であろうプライドの高いナルシストのような話し方
自分がすべて正しいそおもっているような口ぶりである。
きっと自分の思い通りにいかないと無能なやつだと自分を棚に上げ

て周りを罵るだろう
「熊はもともと大人しくて臆病な性格です。人間を襲うなどありえません」
遥は声を震わせる
「それではなぜ近年、熊の被害が出ているんでしょうね？　しかも人間も襲われているそれをどう説明するんですか？」
言えないだろうとニヤリと嫌な笑みを浮かべ返答を待つ男の人。
「それは……熊のえさが無くなったからです。熊はどんぐりなどの木の実を好んで食べます。特にブナやナラの木の実をね。ですがここ近年はスキー場やゴルフ場などで開拓で森林は伐採され熊が必要な木の実が得られなくなって木の実を探しているうちに人間のいるとこまで来ているのでしょう。特にこの時期は冬眠のためには大切な時期。熊も必死なんです」
学者になれるかもしれないと思った遥の説明であった
「ほう～我々人間のせいだと？」
「そうです、私たちが自分たちの欲望のままに勝手に山に住む生き物たちへの境界線を破ったからです」
男の人のいかにも興味深いと言ったような質問に遥はやるせなさを全面に出してそう答えた。
「そんなことありえない！！　なぜなら人間は特別な存在なのだから！！！　何をしても許される存在だ！　そこらの虫けら同然の下等生物なんかと一緒にされては困るんだよ！　人間の威厳が汚れる！」
とうとう男の人の本性が確実に露わになった
「はぁ～……またそんなこと言ってるんですか？　少しは自然に敬意を払ってくださいよ。毎回間違ってるし……」
今度は女性の人がやってきた。どうやら部下のようだ
「人間は自然の中に入ってるんですよ？　だから動物たちと一緒。人間が特別ということはありません」
「だからあなたは間違ってるんですよ！」

男の人は女の人に反論
「そんなことは後回しとして、ずいぶん手間が掛かってるみたいじゃないですか。先輩」
話を切り出した
「ああ。この小娘がね。邪魔するんですよ」
男の人は答える
「人間の都合で熊を殺してしまうなんてさせません」
阻止しようとする遥
「そっか。確かにそうだね？　気持ちは良くわかる。けどそれもまたあなたの都合だよね。愛着があるものはそうそう離したくないものさ。でも人里に現れた以上なんらかの対応をしなければならない。まぁ普通は空砲を撃って山に戻るように警告するんだけど人に危害を加えた可能性があるとなると別。いつ人を襲うかもわからないし」
女の人は説得に入った
「なんとかならないんですか？」
必死で訴える遥
「動物の命も大事だけど、人間の命をどうしても優先させないといけない。何十人、何百人の犠牲者が出てからでは遅いの。だからお願い分かって！」
こちらも必死に説得する
「……わかりました」
遥は覚悟を決めて説得に応じるようだ
「わかってくれたようね」
安堵の表情を見せる女の人。
「最後にいいですか？」
女の人に尋ねる
「いいわよ。思いのたけを伝えて」
許可が下りるとくるっと反転し、ライアンを抱きしめた
「今までいろんなことがあったね？　全部忘れないから！今まで本当にありがとう。これからもずっと……一緒だからね！！」

涙ながらにライアンに語りかけ遥はライアンから離れ僕たちの元へ。
「もういいのね？」
「はい」
女の人の質問に力強く答えた
「それでは発射準備」
男の人の合図でみんないっせいにライフル銃をライアンに突きつける
そして
「発射！！」
バーンバーンバーン
周りの音が聞こえないほどの銃声と
グオーーーー
という熊の悲鳴が木霊した
これでライアンは力尽き天に召されていった
すべてが終わった瞬間糸が切れたように遥は崩れ落ち、しばらく涙が止まらなかった

1ヶ月後
この間までライアンがいた廃工場には大きい石を置いただけだがライアンのお墓が立てられていた
そしてみんなで墓参り。
ライアンが亡くなり数日はかなり遥も落ち込んでいた。しかし
「ライアン？　みんな来てくれたよ？　はい　ライアンが好きだったお菓子だよ？　好きなだけ食べてね」
元の明るい遥に戻っていった。戻れた理由として彼女は
「ライアンを守れなかったときはとても悔やみました。でもたくさんの素敵な思い出を貰ったのでそれでけで充分。出会えたことに感謝しないといけません。それにアイアンは私の中で生きてますから」
とのこと。
方向音痴で頼りない後輩が少し大人びたように見えたのは気のせい

ではないようだ。

第２８話　……わかりました（後書き）

なんと斉藤さんについに春が？

次回未定

第２９話　私（わたくし）はあの時からずっとお慕いしていますのに……（前書

あけましておめでとうございます
もう２月の後半ですが
今年もよろしくお願いします

第２９話　私（わたくし）はあの時からずっとお慕いしていますのに……

ある日のこと
一人の女の子が複数の男に囲まれていた
「なぁ姉ちゃん、俺たちとつきあわねぇ～？」
「いい思いさせてやるからよ？」
強面の男や柄の悪いやつばかりだ
「……」
女の子は恐怖からか声が出ないようだ
「何も言わねーな～」
「つうことはＯＫってことだよね～」
勝手に話を進めていく男たち
しかし女の子は手を行くのがイヤがる様子
それでも無理やり引っ張っていく
「ほら行くぞ！」
「……」
女の子は留まろうとするが男の力が勝りどんどん引っ張られていく
「よってたかって女の子を強引に引き込むとはそれでも男か？」
現れたのはガタイのいい大男。部活帰りか手には胴衣を持っていた
「なんだ？　お前は」
ある男は睨みつけた
「図星だから反論できないってか？　こんな大人数でしか女の子を口説けないんだから肝も小さいんだな？　きっと」
大男はまた一言付け加える
「なんだと！！？」
それに感化された男たちは大男に迫って来る
「仕方ない。相手してやるか」
そういうと１分も掛からずに華麗な柔道技で男たちを倒していった
倒された男たちはおきあがることもできずまさに再起不能状態だった

「誰一人として立ち向かってこんとは……全く骨がないな～」
おとこたちに言い放つと女の子に駆け寄り
「気をつけて帰るんだぞ？　じゃあな」
大男は去っていった
その瞬間女の子の中で何かはじけた
（見つけた……私の旦那様……）

帰宅中の斉藤は周囲を見回す
（誰かにつけられてる気がするな……）
「うぅ～気味悪いな～……さっさと帰ろう」
身震いをして足早に帰宅のとにつくのであった

数日後
生徒会室はいつものメンバーで話をしていた
そんな中斉藤がある悩みを打ち明けた
「俺、最近どこからかずっと視線を感じるんだ……」
その悩みに伊織は食いついた
「ずっとってどういうことですか？」
僕が話の中身に入っていく
「前は帰るときだけだったんだが、そこから家でも視線を感じるようになって、最近は朝起きてから夜寝るまで四六時中感じるんだ」
その詳細を話す斉藤
「心当たりは？」
尋ねる茜
「ないから困ってるんじゃないか」
斉藤はため息をついた
「狙われてるとか？」

思いつたことを口にする伊織。
確かに柔道をやってるから目をつけられる可能性はあるけど、普通そこまでするとは思えない
「よほどの恨みがあるのだろう」
厳燐丸が推測する
「ストーカーとか？」
遥がふと口にした
「ないない。斉藤くんに限ってそんなことありえないわよ」
伊織がバッサリと否定した。
ハッとした由良が
「もしかしてお主、女の子にやましことをしたのではあるまいな？」
ドスの利いた声で斉藤を問いただす
「してねぇ～よ！！」
即座に否定する斉藤
「どうだか？」
茜は疑いのまなざしを向ける
「信じてくれ！　谷口俺はなにもにもしとらんぞ！！」
なぜか僕に訴える斉藤に僕は苦笑いを浮かべる
結局なにも解決しなかった

その日の夕食
「恵子ちゃん、またきたの？」
やや不満そうな斉藤
「いいじゃない？　ここの方がスタジオ近いし」
悪びれる様子もなくご飯を口に入れる
「それはそうだけど……あ！　醤油とって？」
「はい……醤油でございます」
「ありがとう」

なにげなく受け取る
いるはずのない人が醤油を渡していた
「ってお前誰だよ！！！？」
気づきようやくツッコミを入れる
「やっとお気づきになりましたね。旦那様」
淡々としゃべる女の子
「旦那様！！？」
斉藤はびっくりする
「いつの間にそういう娘ができたの？」
目を輝かせて身を乗り出す恵子
「あらあら、そういう娘がいたなら私にも紹介してほしかったな～」
目を細めて息子を見つめる斉藤の母親
「違うわ！」
「……なぜそのようなことを……私はあの時からずっとお慕いしていますのに……」
女の子は明らかな大根芝居。
「そうなんだ、そうなんだ」
さらにテンションが上がる恵子
「どこで知り合ったの？　そうそうお名前は？」
話を続ける母親
完全に2人は騙されていた
「私の名前は霧島夏実と申します」
「霧島ってもしかしてあのキリシマ財閥の？」
キリシマ財閥とは日本有数の名家でひとたび本気を出せば一国を黙らせることぐらい容易ぐらいの権力とお金を持っているつまりかなりいいとこのお嬢様なのだ
「すごーい！！　こんなお嬢様を射止めるなんて明」
テンションマックスじゃないかと思うくらい目がらんらんとしている恵子
「知らないから！！　とにかくお嬢様だろうがなんだろうがお前は

知らないし結婚するつもりもない。だから出てけー！！」
なんとか夏実を追い出した

「おはようございます」
夏実は斉藤が出てくるのを見計らって現れた
「うわ～なんでここにいるんだよ！！」
「旦那様のテレパシーを感じましたので」
冷静に言ってのける夏実。
「そ、そうなのか……」
彼女に言葉に詰まる斉藤
「さぁ行きましょう。早く行かないと遅刻してしまいます。今日の紅白戦がんばって下さい」
「お前学校違うだろ！！？　なんでそんなこと知ってんだよ！！？」
自分しか知らないことなのでとても驚いた
「夫のスケジュールを妻が知るのは当然の努めですし、妻が夫に付き添うのも当然です」
と言い放つ夏実。
そして2人は出発する
歩いている間ずっと
ジーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
斉藤の横顔を見つめ進んでいく
「なんだよ？」
気になり夏実の方をむくと
「ポッ……そんなに見つめないでください」
顔を赤らめ顔を背ける夏実
「ずっと見てるのはそっちだろ！！」
そんな態度だから斉藤もどうしていいかわからない状態だった
そんなこんなで学校に着き、僕たちと出くわした

「斉藤さん、おはようございます。その人は？」
知らない女の子をみて質問する
「……明様の嫁です」
と宣言する夏実
「へぇ～斉藤さんにも彼女ができたんですね？　おめでとうございます」
祝福する僕
「いや！　違うんだ」
弁解する斉藤を置いて僕は教室へと向かった
その後も夏実は四六時中付け回り、斉藤も日に日に疲弊していく様子が見て取れた

生徒会室では
「はぁ～……誰も遠くへ行きたい」
斉藤が机に寝そべってぼそりと言った
「お疲れ様です……」
僕は斉藤に苦笑い
「そろそろ部活だ。行ってくる」
斉藤が席を立つと話題の張本人が斉藤の肩をたたく。
「はい……忘れ物です……」
斉藤に胴着を届ける
「ありがとう……ってなんでお前がここにいるんだよ！！！？」
斉藤が問いただす。
「あの……お義母さまから届けるように頼まれまして」
それに答える夏実
「それにしても本当に熱心よね？　まさか学校まで押しかけてくるとはヒューヒュー斉藤くん」
伊織が茶化す
「ちょっと会長……」
茜が伊織を制止する

「……お前……もういい加減にしてくれよ！　いつも俺の嫁、俺の嫁って、前にも言っただろ？　お前を嫁にした覚えはないし、そうやって付きまわれる理由も無い！　はっきり言って迷惑だ！！」
彼女にそれまでのストーカー行為のことををはっきりとＮＯと突きつけた
「……そうですよね？　いきなり知らない人から旦那様とか言って着いてくるのは迷惑ですよね？　そこまで追い込んでしまった私も悪かったです。わかりました。今後、一切明様には近づきません。その代わり最後に１つお願いがあります」
夏実は決意をしたようだ
「なんだ？」
尋ねる斉藤
「私とデートしていただけないでしょうか？」

第２９話　私（わたくし）はあの時からずっとお慕いしていますのに……（後書

デートをすることとなった斉藤さん、果たして夏実さんとはどうなるのでしょうか？

次回、私は大好きな明さんの隣にいられてとても幸せでしたよ？

第３０話　私は大好きな明さんの隣にいられてとても幸せでしたよ？（前書き）

※今月３月１１日に起きました東日本大震災にあわれた方、心から
お見舞い申し上げます
連日報道での原発の事故を含め悲惨な状況に胸が痛みます。時には
涙が止まらなくなります。
被災された中には家族や友人の安否がわからなかったり家自体がこ
われている方々もおおくいらっしゃいます
何をすればいいかわかず途方にくれるという状況に直面している方
々も多くいらっしゃいます
しかし前を向いて生活しなければないりません
そういうお手伝いをこの作品を通してできたらいいなと思います。
元気をあげられたらと思います
１日でも早く復興して、被災された方々が普通の生活が送れるよう
になることを心から願っています
ということで斉藤さんのデートの後編です

第３０話　私は大好きな明さんの隣にいられてとても幸せでしたよ？

「私（わたくし）とデートしていただけないでしょうか？」
夏実が願い出る
「いや、ダメだ」
斉藤は即答する
「なんでよ？　ここまでしてくれてるんじゃない。何がいけないの？」
伊織は理解不可能と言わんばかりである
「当たり前だろ！！　ストーカーするような女と一緒に居られるかよ！！」
反論する斉藤
しかし
「この際、いいじゃないですか。あんなかわいい娘（こ）が言い寄ってくるなんて滅多に無いですよ？」
茜が続く
「そうだな」
冷静に由良が同意する。
「女の子があそこまで勇気を振り絞ってお願いしているのに断るなんて鬼畜です」
遥も同調する
（何気に遥ちゃんキチクって……）
そんなことはスルーして情勢的には今の斉藤はまさに四面楚歌の状態である
遥の鬼畜発言が効いたのかはわからないが、全員が斉藤の拒否に対して猛抗議をしたおかげでなんとか夏実とデートをすることとなった。

そして迎えたデート当日
なぜか俺は銀法駅の前にいる。待ち合わせをしているのだ。デートの。相手は美人なお嬢様で向こうから誘ってきた。普通の男であれば泣いて喜ぶシチュエーションだろうが女なんぞには全く興味がない俺には苦痛で仕方ない。しかもそれが苦痛な日々を送らせた張本人なのだからなおさらだ。
しかしこれが終われば全てが終わり、あいつから解放されるんだ。
そして谷口とばら色の未来をと考えていると俺を苦しめている元凶が現れた。
「明さ～ん」
と手を振りながら近づいてくる
姿が大きくなった瞬間あろうことか固まってしまった
（かわいい……）
本能がそう告げた
夏実は
「……明さん？……大丈夫ですか？」
覗き込む
気づいた俺は目の前の夏実に驚いた
「うわ～！」
「大丈夫ですか？」
心配そうに見つめる
「大丈夫だ。何でもない」
（かわいくない、全然かわいくない……谷口の女装姿の方が千倍可愛いわ！）
ふいに思ったことを否定し、自分に言い聞かせた
「何をブツブツ言ってるんですか？　行きましょうか」
心の声が口に出ていたか？
「お、おう」
俺たちは駅を後にした

やってきたのは動物園。坂道を登りまずいたのはゾウであった
檻の奥の方でまるで俺たちを見ているかのようにじっと見つめている
「ゾウっていつでも群れを作って生活をするんですって」
ストーカー女が俺に話しかける
「それがどうした」
そっけない態度を取る
「なんかいいですよね！」
「そうか？」
興奮気味で話す夏実に俺は首をかしげた
「ええ。いつでも家族一緒みたいでいいじゃないですか！　私もそんな家庭作りたいな～」
彼女は物思いにふけた。
（こいつもこんな所あるんだな）
俺はなぜだか安心した
象の檻を過ぎた後はヤギやライオン、シマウマ、キリンなどいろんな動物を見て回った

俺も女も腹の虫が鳴ってきたので動物の観察はひとまず休憩して昼食をとることにした
場所は広い原っぱ。たくさんの家族がビニールシートを広げていた
俺達も同じようにする
今日はストーカー女が料理を作ってきたと言う。ストーカー女だ変なものを入れて強引に自分のものにするんじゃないかと不安になってしまう
取り出したのは高級そうな重箱。さすがお嬢様と感心してしまう
「あのうちの専属の料理人たちから教えてもらって作りました」
恥ずかしそうに俯くストーカー女
（う～なんだよ！　これはアピールなのか？　かわいいですよって

いうアピールなのか？）
彼女への胸キュンを必死に耐える
そしてフタを開けてみるとどれもこれも御節だろうかと疑いたくなる豪華な料理が所狭しと並んでいた
とりあえず一口
難癖つけようと必死に考えたが出てこず
「……う、うまいぞ」
素直に料理の感想を言った
すると今まで親にこっぴどく起こられたような不安そうな顔から晴れやかな満面の笑みに変わった
「良かった……」
（やべぇ～完全に汚染されそうだ……助けてくれ！！　谷口！！）
そんな心の声が届くことなくにの後もマウンテンゴリラやトラなどを見て回り動物園デートを楽しんだ

俺たちは動物園を離れて町を一望できる高台へやって来た
太陽は西側にある自宅に帰宅しかけていた。
「こんなとこあったんだな」
俺は長年この街に住んでいて初めて知った
夕日を見ながら女は口を開いた
「今日のデートとても楽しかったです」
「そうか。でも俺は何もしていないぞ。何一つお前が喜ぶことなどしていない」
今日一日を振り返る俺
「そんなことありません。私は大好きな明さんの隣にいられてとても幸せでしたよ？」
ストーカー女は振り向き微笑んだ
（うわっ！　今の反則だろ！！　こんな笑顔見せられたら……）

「だけど夢の時間は終わり、現実の世界に戻らないといけないですね。無理を言って付き合ってくれて本当にありがとうございました。今日のことは忘れません。もう二度と顔見せませんので」
こみ上げてきたのかストーカー女は次第に涙声になっていく
「バーカ。何泣いてんだよ」
「え？」
「まぁ……なんだ……そこまで想ってくれるようだし、いいぜ！
また会いたいっつったらまたいつでも会ってやる。ただし迷惑になるようなことはやめろよ。夏実」
自然と言葉が出てきた
こうして斉藤は夏実との面会を許可した

数日後
斉藤が登校中
「すいません！　インターハイを3連覇した斉藤明さんですよね！」
とある女の子が斉藤の前にやってきた
「ええ。そうですけど」
斉藤は肯定する
「実はファンなんです！！　サインをもらってもいいですか？」
と興奮し、色紙を差し出す女の子
「あ～き～らさま～！　これはどういうことですか～？　私（わたくし）というものがありながらほかの女子と仲良くするなんて」
後ろから天使の皮をかぶった悪魔が一歩ずつ近づき手来る
右手にはどこから持ってきたのかチェーンソーが。
ゆっくりエンジンをかけ
「ちょっと待て！！　この人はただ単に柔道のファンだ」
反論する斉藤
「でも女の子と仲良く話していたのは事実」

夏実は聞く耳を持たない
うぃ〜〜ん
チェーンソーの音が大きくなる
「言い訳なんか聞きたくない！　もういいです！　あなたを殺して私も……」
斉藤を追い回す夏実であった

第３０話　私は大好きな明さんの隣にいられてとても幸せでしたよ？（後書き）

次回、お母さんと茜が大ゲンカ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4181e/

気弱な僕の強気な生活（仮）

2011年4月21日12時03分発行